

# 国史跡 山王圍遺跡

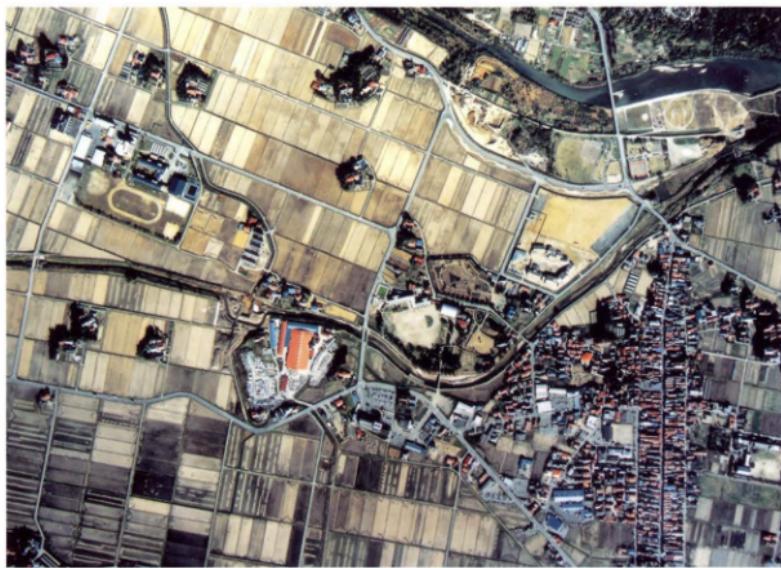
発掘調査報告書 I

1996

一迫町教育委員会

# 国史跡 山王圍遺跡

発掘調査報告書 I



1 山王廻遺跡航空写真  
Aerial photograph of the Sanno-gakoi site



2 第2、3号堅穴住居跡（北から）  
Pit dwelling 2 and 3



3 第5、6、7号堅穴住居跡（西から）  
Pit dwelling 5, 6 and 7



1 第1号配石遺構  
Stony feature 1



2 第2号土器埋設土壤  
Pit 2 with buried pottery

## 序

山王圓遺跡は古くよりその存在が知られており、縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡として、発掘調査が行われてきました。とくに、一迫町立一迫小学校の体育館建設にともなう昭和39年と40年の調査において、縄文時代の遺物を大量に包含する良好な泥炭層が発見され、重要な遺跡であることが明らかにされました。その成果にもとづいて昭和46年に国の史跡に指定されております。

町では指定以来、史跡の環境整備、資料館としての山土考古館における出土品の展示など史跡の保存と活用に努めてきましたが、一迫小学校が平成2年に移転することが決まり、その跡地の整備が課題となりました。このため、平成5年度から6年度の2ヶ年で史跡山上圓遺跡保存活用基本計画を策定いたしました。この度の調査はこの整備計画に基づき、継続調査の第一次調査として実施されたものです。

山王圓遺跡は、その遺物の豊富さから基幹的集落遺跡として周辺の遺跡との関連が論じられてきましたが、当時の土地利用のあり方が不明のままでした。この度の発掘調査によって、住居跡をはじめとする数々の遺構が発見され、遺跡の姿が明らかになりつつあります。本町ではこれらの調査成果をふまえ、山王圓遺跡をより多くの方々に理解していただけるよう整備していく予定であり、平成8年度には基本計画にそって仮称「縄文マインド研究所」の基本設計に入り、平成9年から10年に建物を建設することとなっております。

最後になりましたが、本発掘調査のみならず本書の刊行にあたりましてもご指導、ご協力を賜りました東北大学教授 須藤降先生をはじめとする諸先生方、宮城県教育庁文化財保護課、並びに関係機関の方々に深く感謝申し上げます。

平成8年3月

宮城県一迫町教育委員会

教育長 遠藤昭吉

## 例　　言

- 1 本書は宮城県栗原郡一迫町真坂字山王に所在する国史跡山王団遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国庫補助事業として一迫町教育委員会が調査主体となり、史跡整備の目的で平成7年7月17日から10月11日にかけて面積約1550m<sup>2</sup>にわたって行った。
- 3 以下に調査組織を掲げる。

調査担当　一迫町教育委員会

調査指導　須藤 隆（東北大学文学部教授）

岡村道雄（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）

加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長）

調査協力機関 東北大学文学部考古学研究室

宮城県教育庁文化財保護課

調査員　大堀亜弥（一迫町教育委員会総務課技師）

調査参加者　阿子島香（東北大学文学部助教授）

古川一明、山田晃弘（宮城県教育庁文化財保護課技術主査）

天野順陽、二好秀樹（宮城県教育庁文化財保護課技師）

富岡直人（東北大学文学部助手）

関根達人、菊池佳子（東北大学埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）

菅原哲文（東北大学大学院博士課程）、日下和寿、水見淳哉、伊藤典了、池谷勝典、西村 力、

荻原研一、石田 真（東北大学大学院修士課程）、工 小慶（東北大学大学院研究生）、藤原弘明、

高橋 哲、卡橋さやか（東北大学文学部研究生）、酒井 淳、閑 健吾、小山有希、佐藤道子、

山澤安利、児島 学、坂田由紀子、西井 亨、鈴木 純、北村浩貴、鹿又喜隆、五十嵐満、

川原 啓、熊谷宏靖、澤田純明、若山智也、杉山陽亮、池谷考史、千葉直樹、三上紅美子、

丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、川口貴史（東北大学文学部学生）

佐藤幸一、佐藤正利、津田小砂、曾根茂子、曾根あいし、松田 司、曾根義秋、笹川義春、

久我とも子、久我敏夫、門伝保輝、佐藤運之丞、後藤祥子、曾原みさ子、松田せつ子、

津田登喜子、金田せつ子（一迫町）

- 4 編集は須藤 隆の指導のもとに、大堀亜弥、富岡直人、菅原哲文、水見淳哉がこれを進め一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が整理・分析を行った。以下に資料整理・分析作業の体制を掲げる。

整理参加者 伊藤典子、池谷勝典、西村 力、荻原研一、石田 真、王 小慶、藤原弘明、高橋 哲、  
玉橋さやか、関 健吾、小山有希、佐藤道子、廣嶋秀俊、坂田山紀子、西井 亨、鈴木 純、  
北村浩貴、鹿又喜隆、五十嵐満、川原 啓、熊谷宏靖、澤田純明、若山智也、杉山陽亮、  
三上紅美子、藤田直行、池谷考史、千葉直樹、川口貴史、丹羽美智子、栗野昌之、京野恵子、  
廣田英一郎（東北大文学部）、斎藤幸子、佐藤勝了、官原みさ子、佐藤たけ子、阿部辰江、  
小山幸江、佐藤幸一、佐藤謹之坂（一迫町）

- 5 本報告書の執筆分担は、文章末( )内に付記した。
- 6 調査報告書をまとめるにあたって、次の方々の御協力と御助言を頂いた。  
興野義一氏（日本考古学协会会员）、藤沼邦彦氏、阿部博志氏、須田良平氏（東北歴史資料館）、千葉景一氏、  
青山 哲氏、斎藤古弘氏、佐藤則之氏、東理浩明氏（宮城県教育庁文化財保護課）、太田昭夫氏、荒井 格氏  
(仙台市教育委員会文化課)
- 7 遺跡探査については、安達三郎氏（東北大名誉教授・東北工業大学教授）、宇野 宁氏（東京農工大学助教授）  
〔文部省科学研究費補助金 重点領域研究 遺跡探査パルスレーダ用アンテナの設計と埋藏物のイメージング法  
に関する研究〕班)、奥島基良氏（東京工業大学名誉教授・桐蔭学園横浜大学教授）、杉本恒美氏（桐蔭学園横浜大学講  
師)、木岡誠一氏（千葉工業大学教授)〔同「地中構造及び文化財の超音波探査法の開発研究」班〕に依頼した。
- 8 地質調査については阿子島功氏（山形大学教育学部助教授）に依頼した。
- 9 石材の鑑定は蟹澤聰史氏（東北大学教授）に依頼した。
- 10 明治大学考古学博物館（館長 幸沢充則明治大学教授）より、1962年時の遺跡測量図面を提供して頂いた。
- 11 自然科学分析はパリノ・サーヴェイに依頼し、詳細な報告を受け取った。本報告書に要約した内容を掲載し  
た。
- 12 地図は建設省国土地理院発行の1/50,000「岩ヶ崎」を複製、使用した。
- 13 土色については『新版土色帖』(小山正忠・竹原秀雄: 1994) を参照した。
- 14 遺物図面、写真図版中の( )内の番号は属性表中の登録番号に対応する。

## 目 次

第1章 調査の目的 .....	1
第2章 遺跡の概要 .....	2
第1節 自然景観 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の概要 .....	6
第1節 調査の経緯 .....	6
第2節 調査の方法 .....	7
第3節 調査の経過 .....	7
第4章 発掘調査の成果 .....	9
第1節 層序 .....	9
第2節 遺構 .....	11
第3節 遺物 .....	21
第5章 結語 .....	28
引用文献 .....	30
附章 山正隈遺跡における古環境変遷 .....	31
はじめ .....	31
第1節 分析試料 .....	31
第2節 分析方法 .....	32
第3節 縄文時代晩期から弥生時代前期の古環境変遷 .....	32
第4節 稲作の消長について .....	35
第5節 第3号堅穴住居跡の <sup>14</sup> C年代測定結果について .....	35
第6節 総括 .....	37

付表1	山王廻遺跡出土十.器觀察表	38
付表2	山王廻遺跡出土土師器觀察表	40
付表3	山王廻遺跡出土陶器觀察表	41
付表4	山王廻遺跡出土石器觀察表	41

## 図 版

第1図版	山王廻遺跡発掘区配図図	第10図版	山王廻遺跡出土土器拓影（K区）
第2図版	山王廻遺跡遺構配図図（A～D、K区）	第11図版	山王廻遺跡出土土器大側面（D、E、G、K区）
第3図版	山王廻遺跡遺構配図図（E～J区）	第12図版	山王廻遺跡出土上器尖側面（A、C、G、K区）
第4図版	山王廻遺跡出土土器拓影（C区、D区）	第13図版	山王廻遺跡出土石器
第5図版	山王廻遺跡出土上器拓影（D～G区）	第14図版	山王廻遺跡出土石器
第6図版	山王廻遺跡出土十.器拓影（C、E～G区、K区）	第15図版	山王廻遺跡出土土器
第7図版	山王廻遺跡出土土器拓影（E～K区）	第16図版	山王廻遺跡出土上器
第8図版	山王廻遺跡出土土器拓影（K区）	第17図版	山王廻遺跡出土石器
第9図版	山王廻遺跡出土上器拓影（K区）		

## 写 真 図 版

P.L.1	山王廻遺跡航空写真及び第2、3号竪穴住居跡	P.L.11	山王廻遺跡出土土器
P.L.2	G区全景及び第1号配石遺構	P.L.12	山王廻遺跡出土土器
P.L.3	I区全景及び畔壁状遺構	P.L.13	山王廻遺跡出土土器
P.L.4	K区全景及び第5号竪穴住居跡	P.L.14	山王廻遺跡出土土器
P.L.5	山王廻遺跡出土土器	P.L.15	山王廻遺跡出土土器
P.L.6	山王廻遺跡出土土器	P.L.16	山王廻遺跡出土上器
P.L.7	山王廻遺跡出土土器	P.L.17	山王廻遺跡出土土器
P.L.8	山王廻遺跡出土上器、土製品	P.L.18	山王廻遺跡出土石器
P.L.9	山王廻遺跡出土土器	P.L.19	山王廻遺跡出土石器
P.L.10	山王廻遺跡出土土器		

## 第1章 調査の目的

1964年秋、東北大学の伊東信雄教授の研究室に一迫町診療所の興野義一医師から、一迫小学校校庭の山王圓遺跡において建物の建設工事に伴って多量の縄文時代の遺物が出土したことが報ぜられた。伊東教授は、その遺物が出土した包含層が泥炭層であり、晚期の豊富な資料とともに弥生時代初期の土器が多数出土したことなどから、遺跡の重要性を知り、考古学研究室による調査が必要であると判断された。そして、その年の12月に、急遽、短期間の予備調査を実施し、遺跡の状況を確認した。その予備調査の結果にもとづいて、発掘調査計画が立てられ、翌1965年4月から6月までの2カ月におよぶ長期間の発掘調査が実施された。

この調査によって、厚さ1mを超す泥炭層から縄文時代晚期後半の亀ヶ岡式土器が層位的に出土し、縄文時代終末の物質文化の変遷が詳細に捉えられることとなった。また、最上層では晚期終末の包含層の上に弥生時代初頭の遺構と包含層がひろがっており、土器、石器、土器棺など貴重な資料が多数出土した。東北地方の亀ヶ岡文化から弥生時代農耕文化への変遷を捉らえることのできる極めて重要な遺跡であることが明らかになった。

地下水位の高い泥炭層では、遺物の保存状態がきわめて良好であった。とくに、有機質の資料が豊富に出土し、トチ、クリ、クルミ、ドングリ、ニワトコの種子、葉、木、動物の骨、貝など食料の残滓、縄類、木製品、塗り櫛、鼈胎漆器、編布、ヤスなどの骨角器、塗り貝製品、土偶、耳飾り、土製玉類など縄文人の豊かな生活内容を示唆する多種多様な遺物が豊富に出土した。

とくに編布は、きわめて繊細な編物技術が認められ、縄文人の衣生活に対する認識を大きく変えた。また漆器類、とくに鼈胎漆器の製作技術は、縄文人の工芸技術の並々ならない洗練度、伝統の深さを明らかにした。また、多量の亀ヶ岡式土器は土器作りの技術の高さを明確にした。このような調査内容から、山王圓遺跡は、国の重要遺跡として1971年に史跡指定が行われた。その後、資料館の建設、史跡公園としての整備が進められた。さらに、史跡北側低湿地には湿性植物園が設けられ、地域の人々のための憩いの場として活用がはかられた。さらには1989年には、出土遺物の資料館が改装され、展示施設の整備と展示品の充実がはかられた。

1994年になって、一迫小学校が著しく老朽化したため移転新築計画が浮上した。遺跡の主要部分と重なる小学校の移転に伴って、遺跡の整備すべき範囲が一気に拡大することとなった。そのため、一迫町教育委員会は、遺跡の範囲、集落遺跡の中核部、泥炭層の範囲と保存状況など、遺跡の全体的見直しが必要と認識し、今後の整備計画、さらにその活用計画の策定をすすめ、1995年にその策定案を完成した。

その結果、策定案にもとづいて、①縄文時代の集落の主要部分の構造を明らかにする。②泥炭層の範囲を明確にし、地下水の変化などによる影響も含め、その保存状況を把握する。③泥炭層から、時期の明らかな植物遺存体（種子類、草、樹木の葉や茎、樹幹、花粉など）を確保、分析し、縄文時代晚期の自然景観を復元する基礎資料をうる、といった目的を達成するため、5年次にわたる史跡整備のための発掘調査を実施することと決定した。

一迫町教育委員会は、この調査を効率的に進めるため、東北大学文学部考古学研究室と宮城県教育庁文化財保護課の協力と指導のもとに発掘計画を協議、立案し、その計画にもとづいて、1995年夏、第1次発掘調査を実施した。その結果、予想以上に大きな成果をうることができた。今回の調査報告書は、一迫町教育委員会と東北大考古学研究室が全面的に協力してすすめたものである。

(須藤)

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 自然景観

山王廻遺跡は、栗駒山(1628m)と荒雄岳(984m)の山麓に源を発する一迫川によって形成された南北3km、東西15km程の沖積地のほぼ中央の自然堤防上に位置する。この自然堤防は一迫川とその支流の長崎川にはさまれ、標高37~39mで、東西240m、南北180m程のひろがりをもつ。長崎川河床面からの比高は3m程度で、現在の水面より1~2mの微高地である。一迫川流域の沖積地を囲む丘陵地には、ナラ、クヌギ、アカマツなどの樹林がひろがり、キジ、ヤマドリ、ノウサギ、タヌキ、ムササビなどが棲息している。一迫川や長崎川などにはウグイ、コイ、フナが棲息し、サケの遡上もみられ、オオハクチョウ、ガンカモ科などの渡鳥が飛来する。

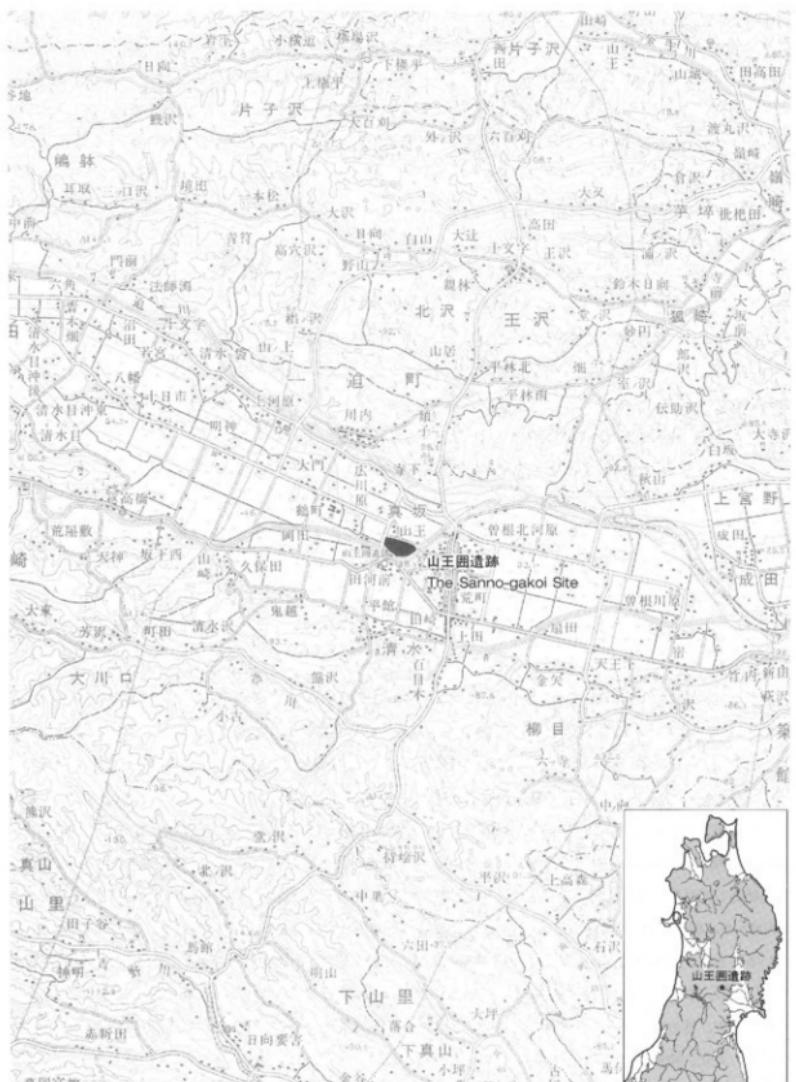
山王廻遺跡周囲の丘陵地は、鮮新世後期から更新世前期に平坦面であったが(宮城県 1991)、更新世中期以降浸食が進み、多くの谷が開析された。約1万年前に水河時代が終わりをつげると、海面が急速に上昇し、遺跡周囲においても沖積化が進んだ。現在、遺跡付近での沖積層は厚さ3~7mである(宮城県他 1992)。縄文時代の前期前葉の大木1式期には、山王廻遺跡から18km東方の迫町八ノ森貝塚のようにヤマトシジミなどの汽水性貝類を主体とする貝塚が出現し、仙北湖沼域の奥部でピークに達していた海進は終りをつけ、海岸線の後退が進んだことがうかがえる。中期後葉に海退はさらに進み、更新世に形成された谷筋も河川の運ぶ土砂で埋没していった。海退と沖積化に伴って内湾が汽水化、さらに淡水化し、迫川流域には多数の沼沢、低湿地が形成され、築館町嘉倉貝塚など多くの貝塚が残されることとなった。山王廻遺跡の東方10km程の一迫川と迫川との合流点に位置する嘉倉貝塚は、後・晚期の淡水性貝塚であり、仙北湖沼域の最奥部が淡水化していたことがうかがわれる。

山王廻遺跡の所在する自然堤防では、縄文時代前期大木3式土器が確認されており、前期中葉には生活の場として利用されていたと考えられる。晚期には自然堤防の北に沼沢、低湿地がひろがり、その後埋没するにつれて泥炭層や低湿地堆積層が形成されていった。そして弥生時代にかけて急速に埋没していったと推定される。

### 第2節 歴史的環境

一迫川流域では旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代にかけて丘陵地や自然堤防上に数多くの遺跡が残されている。山王廻遺跡の南にのびる築館丘陵では、60万年前に遡る築館町上高森遺跡(芥沢 1996)をはじめとして、岩出山町座敷乱木遺跡や古市馬場塙A遺跡など、旧石器時代前期から晩期にかけての遺跡が数多く分布している。花山村原井田、大穴山、天沢、小田裏A・B遺跡など一迫川上流域の遺跡から、石刃や細石刃核、有舌尖頭器などが出土している(花山村史編纂委員会 1978)。一迫町佐野原遺跡では、大型の局部磨製石斧が出土し(興野 1976b)、柳ノ日古屋敷遺跡(中山遺跡)でもローム層中から剣片が出土している。

縄文時代になると、丘陵地を中心として多数の遺跡が出現する。一迫川と迫川流域では、一迫町赤坂遺跡から早期中葉の口絵式土器が発見されており、この地域における最古の縄文遺跡といえる。高清水町大寺遺跡では、多量の貝殻文土器が採集され、早期後半の大寺式の標式遺跡となっている。前期には、大栗A遺跡をはじめ丘陵



第1図 山王開遺跡位置図 [Scale 1 : 50,000]

### Location of the Sanno-gakoi site

国土资源部施行「岩々崎」

上で遺跡が増加する。また、追川流域では追町糠塚貝塚、八ノ森貝塚など前・中期の貝塚が多数みられる。中・後期の遺跡では丘陵平坦面に立地する一迫町小古遺跡で人木10式期の堅穴住居跡が確認されている。一迫町宝領遺跡では後期前葉の遺物包含層から土器が多量に出土し（佐藤 1984）、比較的規模の大きい集落が営まれたと推定される。晩期には若柳町館貝塚、敷味貝塚、築館町横須賀貝塚、嘉倉貝塚、大型遮光器土偶が出土した田尻町恵比須田遺跡、国指定史跡中沢貝塚、泥炭層から有機質遺物が出土する田尻町北小松遺跡など数多くの貝塚と大規模遺跡が群在する。一迫町巻堀遺跡では厚さ1.5mにおよぶ晩期Ⅲ～VI期の遺物包含層が検出され（宮城県教育委員会 1977）、山王團遺跡でも厚さ1mにおよぶ晩期IV期の遺物包含層と遺構群が検出されている。このように晩期には大規模な集落が多数形成されていたことがうかがえる。

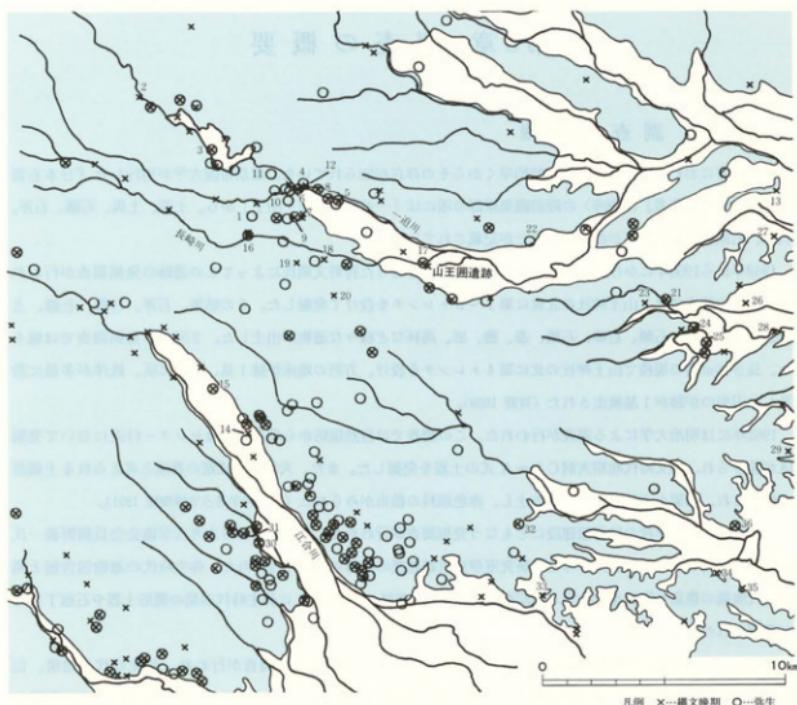
弥生時代には、一迫川流域の青木畠遺跡、山王團遺跡、伊豆沼・内沼にのぞむ横須賀貝塚、嘉倉貝塚、浄土遺跡、青島貝塚など前期の山王Ⅲ層式期から中期中葉の樹形團式期にかけての遺物を出土する遺跡が分布する。その大部分が山王Ⅲ層式期の遺跡であり、これらの弥生時代前期の遺跡の多くは晩期から継続する。

山王團遺跡から一迫川を遡った青木畠遺跡では多量に土器、石器、土製品が出土し、弥生Ⅱa期の青木畠式が設定されている（加藤 1982）。また、山王開遺跡から出土した上器群にもとづいて弥生Ⅱb期の山王Ⅲ層式が設定されている。この山王團遺跡の弥生Ⅱb期の層からは石庭丁が出土しており、宮城県北部地域において前期後半から水稻農耕が行われていた可能性が指摘されている（須藤 1983）。中期中葉の樹形團式期の遺物は一迫町上戸遺跡、山ノ神遺跡、山王團遺跡、築館町横須賀貝塚、嘉倉貝塚、岩出山町境ノ日A遺跡（太田他 1982）などで出土している。また、後期になると丘陵上で小規模な集落遺跡が多数確認されており、上ノ原A遺跡や古川市宮沢遺跡、高清水町東館遺跡などから天王山式上器が出土している。ことに上ノ原A遺跡ではこの時期の隅丸方形の堅穴住居跡が1棟検出され、中央に石組炉をもつ焼失住居であることが明らかにされている（佐藤他 1978）。このような丘陵地における多数の天王山式期の遺跡の出現は、弥生時代後期になってこの地域で農耕活動が盛んに行われたことを示唆している（須藤 1986）。

古墳時代前期になると、鳴瀬川、江合川流域では小牛糠町京鉢塚古墳、鳴子町石の梅古墳などの前方後方墳や、全長100mにおよぶ大規模な前方後円墳である古川市青塚古墳が出現する。東館遺跡や志波姫町鶴の丸遺跡では塙釜式期の方形周溝墓が検出され、志波姫町宇南遺跡、古川市留沼遺跡では同時期の堅穴住居跡が調査されている。このような遺跡のあり方から、前期古墳文化の北限であるこの地域において農耕集落の発達と、有力な首長層の台頭がうかがえる。また、一迫町清水田遺跡、高清水町大寺遺跡では北海道系土器が出土しており（興野 1976 a, b）、北海道統繩文文化圏との交流が行われていたことが推定される。中期前半に、この地域で古墳は減少する。集落跡としては東館遺跡で南小泉式期の堅穴住居跡が検出されている。中期後半には、色麻町念南寺古墳（前方後円墳）や、御山古墳（円墳）が造営される。後期では、志波姫町山ノ上遺跡で住社式期の堅穴住居跡が検出されている。また、鳴瀬川上流域に300基を超す色麻町色麻古墳群が形成され、関東地方からの集団移住が推定される（古川 1987）。この背景として畿内政権の影響が強まったことが考えられる。さらに古墳時代の終末期には、一迫川中流域で、竹の花、山王、西沢横穴古墳群などが形成され、追川上流域の金成丘陵地には内陸部北限の白地、山根前、大立、姫塚などの横穴古墳群が分布している。

以上のように一迫川流域、追川水系付近は、東北地方における南北の特色を異にする地域文化の境界領域にあったと考えられ、東北の先史・古代史を理解する上できわめて重要である。

（富岡、大場、西村、水見）



凡例 ×…萬文晩期 ○…弥生

No.	遺跡名	萬文			弥生			No.	遺跡名	萬文			弥生			
		早	前	中	後	晚	前			早	前	中	後	晚	前	中
1	大穴山遺跡	○	○	○				19	猪田原遺跡	○	○	○				
2	越戸遺跡				○	○		20	向芳沢遺跡	○	○	○				
3	天沢遺跡		○	○	○			21	高倉貝塚	○	○	○				
4	宝領A遺跡	○		○				22	本木遺跡				○			
5	青木塙遺跡		○	○	○			23	照越台遺跡	○	○	○				
6	巻塙遺跡		○	○	○			24	横須賀貝塚		○	○	○	○		
7	清水田遺跡	○	○	○	○			25	淨土遺跡		○	○	○			
8	上戸遺跡		○	○	○	○		26	敷味貝塚		○	○				
9	上ノ原A遺跡			○	○			27	大畑貝塚		○	○				
10	山ノ神遺跡				○	○		28	唐木崎貝塚		○	○				
11	上澗野B遺跡					○		29	平貝貝塚		○	○				
12	竹ノ花遺跡		○	○	○			30	岩の上遺跡	○	○	○	○	○	○	
13	柴の脇遺跡			○				31	天神山遺跡	○			○			
14	天王寺遺跡			○	○			32	萩田遺跡				○	○		
15	根岸遺跡				○			33	北小松岩田西遺跡				○			
16	大栗A遺跡	○	○	○	○	○	○	34	恵比須田遺跡	○	○	○	○			
17	山王塙遺跡			○	○	○		35	中沢目貝塚		○	○	○			
18	日向遺跡			○	○			36	長者原貝塚		○	○	○	○		

第2図 一迫町周辺遺跡分布図

Distribution of the Final Jomon and Yayoi sites around the Sanno-gakoi site

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の経緯

東北地方において山王圓遺跡は比較的早くからその存在が知られていた。東京帝國大学が刊行した『日本古器時代遺物発見地名表』(1928年)の陸前國栗原郡の項には「一迫村・眞坂・山王」から、土器、上偶、石鉗、石斧、石皿、石錐、石鑊、円石が出土したことが記載されている。

1948年から1958年にかけて、郷土の先史に強い関心をもった狩野文朔氏によってこの遺跡の発掘調査が行われた。最初の調査では、山王神社の北東に第1～3トレンチを設けて発掘した。その結果、石斧、石匙、石鐵、上偶、石皿、凹石、石鑊、石棒、石錐、壺、甕、高杯など様々な遺物が出土した。2回目の発掘調査では幅6m、長さ16m程の規模で山王神社の北に第4トレンチを設け、方形の地床跡1基、周囲に灰、鉄滓が多い量に散乱した円形の炉跡が1基検出された(狩野 1959)。

1962年には明治大学による調査が行われた。この調査では自然堤防から現在の給食センター付近において発掘区が設けられ、縄文時代晚期大洞C 2～A'式の上器を発掘した。また、大洞C 2式期の墓壙と考えられる上壙群が検出され、石製小玉約60個が一括出土し、赤色顔料の散布がみられた(明治大学考古学博物館 1991)。

1964年、一迫小学校の体育館建設とともに発掘調査が行われた。この調査は日本考古学協会会員興野義一氏を発掘担当者として、東北大学考古学研究室伊東信雄教授の指導のもとに行われた。弥生時代の遺物包含層と縄文時代晚期の豊富な資料を包含する泥炭層が確認され(興野 1965)、とくに弥生時代前期の瓢形土器や石庖丁などが発掘された(須藤 1983, 84)。

翌1965年には、伊東信雄教授を中心に東北大学考古学研究室による第2次調査が行われ、弥生時代の遺構、包含層、縄文時代晚期後半の泥炭層が調査された。出土した上器は登録されているもので391点におよび、石器、土製玉類、耳飾、ヒスイ製・石製玉類、輪輪、櫛、藍胎漆器、骨角器、岩版、土版、土偶、猪牙製垂飾、編布、木製品、植物遺存体、動物遺存体など多様な遺物の出土がみられた(伊東他 1965)。

1971年に山王圓遺跡は国史跡の指定を受け、1976年には東北大学考古学研究室によって保存管理計画策定のための調査が行われた。ボーリング調査の結果、泥炭層、遺物包含層の分布が確認された(一迫町教育委員会 1976)。

1976年以降、10年にわたる史跡整備がなされ、山王圓遺跡は「山王史跡公園」として形を整えた。1990年、指定地内にあった一迫小学校の移転が決定され、それを契機としてあらためて遺跡全体の整備のみおしが進められることとなった。一迫町は1993、1994年度に国指定史跡山王圓遺跡保存活用基本計画策定委員会を設置し、史跡整備計画を検討した。委員会は、「地形復元レベルと縄文晚期の遺構面の確認」、「自然・社会景観の復元的調査・研究」、「生業形態に関する総合的調査・研究」、「縄文・弥生時代の技術復原とその応用」、「調査・研究成果の公開等」を目的とする発掘調査の実施を提言した。今回の発掘調査はこの史跡整備の基本計画にもとづく初年度の調査である。

(大堀、菅原)

## 第2節 調査の方法

縄文時代の集落構造を捉え、それらを構成する遺構群の性格と配置、時期などを明らかにするために、自然堤防の東半部を中心として発掘区を設定し、遺構、包含層の確認・精査を目的とする調査を行った。

発掘区は遺跡の南西に原点を設定し、南北を基軸とした一辺3mのグリッドを基準とした。発掘区設定のための基準点は一角点「真坂」(-140227.500, 10294.440, 38.860)と1987年に史跡整備の際に設けられた第X座標系の既知点であるA点(-139985.753, 10386.946)、B点(-140026.921, 10492.012)を利用した。さらに任意に設定した点はD点(-140081.592, 10365.3185, 38.992)、F点(-140072.76, 10387.945, 38.600)、G点(-140107.000, 10378.000, 39.474)、I点(-140084.000, 10378.000, 38.997)、J点(-140100.979, 10390.703, 39.654)、K点(-140107.000, 10339.000, 39.254)、L点(-140138.000, 10335.00, 39.081)、M点(-140092.002, 10419.983, 39.208)である。軸は国土座標を基準とし、東西軸には北に向かってA A、A B、A C……、南北軸には東に向かって1、2、3……と名称をあたえ、グリッド名は南側の東西軸名および西側の南北軸名をその区名とした。この基準軸にそって発掘区を設けた。

発掘区の設定は従来の調査成果と自然堤防の地形を考慮して行った。南西にのびる自然堤防の東端にA～D区を設定し、遺構の分布を確認することとした。自然堤防中央部においては、1958年の調査で炉跡が発見されており、その周辺の遺構の分布を確認するため、K、L区を設定した。1965年の発掘調査では大規模な泥炭層が検出されており、その際出土した大量の遺物は発掘区の東側の自然堤防上から廃棄されたと推定される。この推定にもとづき、自然堤防から低湿地にかけて、地形と遺構の分布を確認するためにE、F区を設定した。また、1965年の発掘調査区の南側にG～J区を設け、低湿地のひろがりを確認することとした。

調査にあたって、層位的発掘を行い、各調査区における堆積層相互の対応関係を明らかにするよう努めた。遺構については分布状況を把握し、堅穴住居跡、ピットなど主要な遺構を精査した。主要な遺構の土壌はすべて採取し、フリイによる微細遺物の検出を行った。遺構、遺物の検出状況については詳細に記録し、特に第2、3号堅穴住居跡、第1号配石遺構出土上の遺物については出土位置をすべて記録した。これらの測量と記録を効率的に行うため東北大考古学研究室所有のソキア製トータルステーション（光波測量器）およびコンピューターシステム社製三次元測量システム・Siteを利用した。

重複する遺構については、上層遺構を精査し、それらの記録をとった後、下層の遺構を調査すべきか否かを検討した。また、埋没している遺構を把握する試みとして、安達三郎氏（東北大名誉教授・東北工業大学教授）、奥島基良氏（東京工業大学名誉教授・桐蔭学園横浜大学教授）に依頼し、レーダー、音波での遺構探査を実施した。

（大堀、富岡）

## 第3節 調査の経過

発掘区の設定は7月18日にG・J・I区、19日にA～C区、28日にD・H区、9月6日にK・L区を行った。表土除去は7月18日にG区、19日にA・I・J区、25日にE・F区、26日にC区、27日にB区、28日にD・H区、9月6日にK区、7日にL区を行った。

7月18日に、G区5層上面で溝を確認した。発掘区北端に60cm幅でサブトレントを設定し、下層に白色粘土層

(7層) や泥炭質の有機成分を含む疊層(11層) のひろがりを確認した。7月20日に、G区北端・西端、I・J区北端のサブトレンチで下層の堆積状況を確認した。7月21日には I 区西端で弥生土器を包含する泥炭質粘土層(9層) を検出した。7月24日に、A区で第1号堅穴住居跡、I区北側で畦畔状遺構を確認した。7月25日に、F区6b層の精査を行い、弥生時代中期の上器片を検出した。7月26日に I 区を南方向に 3 m 拡張して、畦畔状遺構のひろがりを確認した。また、G区第1～3号溝跡を検出し、27・28日には精査を行い、中世陶器1点、弥生土器、石斧を検出した。7月28日に、D区黒色土層(2層) 中に若干の遺物を検出したが、遺構のプランは不明瞭で、3層上面の精査を行った。7月31日に、I区9層で遺構のひろがりを確認するため上層を精査した。さらにF区9・10層の精査を行い、土壌などの遺構を検出した。

8月2日にF区第4号溝跡を検出し、II区では北壁にみられた焼土のひろがりや柱穴を検出し、第4号堅穴住居跡として精査を行った。8月3日にF区10層上面の精査を行った。C区では東西方向にのびる第4号溝跡プランを検出した。

9月7日にK区の調査を開始した。9月8日にE区で、第4号溝跡、多数の上塙や方形の遺構を確認した。一方、阿子島功氏が地形・地質の分析を行った。9月9日にK区包含層を確認し(7・8層上面)、10日から25日に精査を行った。9月12日にC・D区で遺構プランの検出、13日には、精査を行った。ピット9埋土からは土師器が出土した。9月14日にB区北東隅に深掘区を設定し、下部に疊層のひろがりを確認した。また、F区9・10層上面の精査を続行し、C区ピット3の精査を行った。9月18日から20日にF区南側の遺構群とK区7・8層の精査を行った。9月20日にF区北側で第2号堅穴住居跡、E区で多数の遺構の精査を行った。9月21日から22日にC区ピット3・9、E区ピット群の精査を行った。さらに北側で方形の遺構から土師器を検出し、精査を終了した。F区では第2号堅穴住居跡の精査(10月4日まで)を行った。9月25日にG区遺構群の精査を開始し(10月7日まで)、第5号溝跡は部分的に観察トレンチを設定した。また、第1号配石遺構の精査を行った。26日にC区ピット8・9において遺物の記録・取り上げを行った。9月27日にF区第3号堅穴住居跡の壁溝を確認した。9月28日にE区第1号土器埋設上塙の精査を行った。9月29日にD区で土壇群や第1号陥穴などの遺構の精査を行った。

遺構および遺物の諸記録は7月27日より10月6日にかけて随時行った。10月6日には、バリノ・サーヴェイによる自然環境分析試料の採取が行われた。10月7日に午後2時より現地説明会を開催した。10月11日には実測図や土層観察表を作成し、作業を終了した。

安達三郎氏を中心とするレーダー探査は8月4日に基準杭を設定し、8月20日から24日に探査、9月6日に測定結果の検討を行った。探査に際してA～G区に基準線を設定し、測定を行った。奥島基良氏を中心とする音波探査は、9月8日から10日に実施された。

(小山、大堀、富岡)

## 第4章 発掘調査の成果

### 第1節 層序

E～J区については、堆積層が最も多く確認されたG・I区を基準として1～11層の基本層序を認定した。A～D・K区では、それぞれの発掘区において層名を与え、E～J区との対応を検討した。

#### E・F・G・H・I・J区基本層序

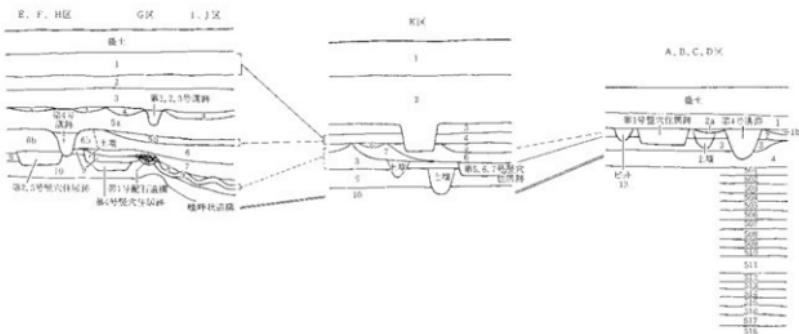
最上層は盛土である。1層は耕作土であり、部分的に礫や砂を含んでいる。2層は明褐色シルト質で、3層の酸化した層であり、厚さが2～5cmで、鉄分を多く含む。3層は明灰黄褐色シルト質土壤が主体であり、J区では黒褐色のシルト質となる。マンガンを多く含み、白色粒子を少量含む。4層は、10世紀降下の灰白色火山灰（白鳥1980、町田他1981）を含み、特に凹地において比較的厚く堆積している。4層の上面で、第1～3号溝跡が確認されている。また、植物珪酸体分析の結果、イネ科のプラントオバールが多く検出されている。5a層は灰褐色のシルト質であり、マンガンを含む。一部に砂のラミナが形成されている水成堆積層である。また縱方向に微細なクラックがみられ、灰白色火山灰粒が落ち込んでいる。

I区の西側では、5a層の下に、より褐色が強く、砂質の5b層がひろがる。6層は灰黄色の粘土質であり、沼鉄を多く含む。E・F区の6b層はG・H・I区の6層にあたり、より黄色みが強い砂質シルトである。F区の6b層上面では、弥生時代中・後期の土器片（第6図版23）と土師器の破片が出土し、古墳時代以降の生活面であったと考えられる。植物珪酸体分析の結果では、5、6層でもイネ科のプラントオバールがわずかながら検出されている。7層は明灰黄褐色の粘土質であり、鉄分を含み、G・I区では白色を帯び、H～J区に分布する。またI区7b層は、赤褐色の粘土質で鉄分を多量に含む。5～7層はラミナの形成と沈殿物のグラデーションが観察され、洪水層と考えられる。畦畔状遺構など、特にG～J区の遺構はこの層によって覆われている。8層は、9層の漸移層で、G・I区のみに認められる。

9層は黒色で、G～J区では粘土質で、東側の区では砂質になる。炭化物を多量に含み、I区西側で層が厚くなり、畦畔状遺構の基盤となる。I区における珪藻分析では、第1地点の層から陸生珪藻の非形形殻が多く検出され、縄文時代から弥生時代にかけての生活面であった可能性が高いと考えられている。また、イネ科のプラントオバールがわずかながら検出されている（第6図版3地点）。G・I区では鉄分がとくに多く、土中の鉄分が植物体のまわりに付着してできた「高師小僧」がみられ、遺物にも付着する。とくにI区では6～9層にかけて土壤中に沼鉄が多い。10層は色調の多様な砂層で、場所によって変化がみられる。部分的に暗褐色、灰色、黄褐色などを呈し、E・F区では黄褐色で、粒度はより細くなる。E・F区の遺構はこの面で確認されている。G区では縄文時代晩期の土器も確認されており、さらに分層される可能性がある。11層は泥炭質の有機成分を多く含む疊層である。

#### A・B・C・D区基本層序

最上層は公園造成時の盛土である。1層は旧表土である。1b層は黒褐色のシルト質で2層の漸移層である。1c層はD区南西部の1層下部に認められ、暗赤褐色シルト質土壤である。鉄分をブロック状に含む。2層は黑色



第3図 基本層序模式図  
Excavated layers in the Sanno-gakoi site

のシルト質であり、径5mmの白色上粒を少量含み、深耕の痕跡が多く認められる。層の堆積は南側で厚く、北側で薄い。2a層は黒色シルト質土壌であり、鉄分の多い土壌を斑状に多量に含む。3層にはにぶい黄褐色粘土質シルトであり、4層は黄褐色の粘土質シルトである。この3、4層からは遺物は検出されていない。

B区の北東隅を1m四方、深さ約1.4mまで試掘し、堆積状況を調べ、501～518層の18層に区分した。501～510層は、砂層、砂質シルト層、シルト層が互層となって堆積し、各層の厚さは約50cmである。その下の511層は厚さ約30cmの粘土層である。512～516層は厚さ20～30cmの砂層、517、518層は砂礫層である。いずれの層も水成堆積層で、遺物は出土していない。

#### K区基本層序

K区では1～10層が認められた。内容はA～D区と類似する。1～3層は公園造成時の盛土である。4層は旧表土、5、6層は耕作土である。7、8層は黒褐色の遺物包含層で南側でより厚く、主として縄文時代晚期後半から弥生時代前期の遺物が認められる。9層は10層由来の黄褐色土ブロックを含むシルトである。10層は、黄褐色のシルトであり、遺構確認面である。

#### 各区の基本層序の対応

E～J区の水成堆積層である2～8層は、A～D・K区には堆積が認められない。その下層では、E～J区の9層、A～D区の2層、K区の7、8層が対応する。いずれも黒色土層で遺物を多く含む。黄色土層の漸移層として、A～D区3層とK区9層が対応する。E～J区には堆積がみられない。さらにE～J区の10層、A～D区の4層、K区の10層が対応すると考えられる。この層は縄文時代から弥生時代の遺構の確認面である。E～J区の11層は礫層であるが、B区の深掘区の517、518層の礫層がこれに対応する可能性がある。I区では、11層は西側に向かって傾斜しており、複雑な水成堆積の状況が予想される。

(富岡、菅原)

## 第2節 遺構

今回の調査で検出された各遺構の内容と分布は次の通りである。

### 縄文時代晚期

D・E区南側、K区の自然堤防上で竪穴住居跡、ピット、墓壙と考えられる土器埋設土壙が検出されている。E・F・H区においては多数の遺構が重複して検出されており、G区より西側の遺構群についても、弥生時代の遺構と重複が確認されることから晚期以前に属する遺構群が存在する可能性が高い。

### 弥生時代

F区からI区において多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡はF区の北半で2棟が検出された。G区の南寄りには土器埋設土壙群が、中央付近では配石遺構とその周囲にめぐる溝跡が検出され、墓域の存在が推測される。G区から西にのびるI区では南北方向の駐跡状遺構が2条確認された。

### 古墳時代以降

自然堤防東南部にあたるA～F区にかけて確認された。A区南寄りに竪穴住居跡1棟、南端ではピット1基が検出された。C区の北端には7世紀末から8世紀前半のピット2基が検出されている。また、C～F区において上記の遺構とほぼ同時期に属する溝跡が確認されている。

#### 1) 竪穴住居跡

##### 第1号竪穴住居跡（第2図版）

A区中央東寄りで検出された、一辺約3mの方形の竪穴住居跡である。2層上面から掘り込まれている。床面は4層を掘り込んでおり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土壙を主体とし5つに分層される。覆土3と5はカマドの埋土と考えられる。

カマドは北辺中央部に設けられている。カマドの埋土である覆土3は暗赤褐色粘土質シルトで、多量の焼土を含んでいる。焼道は北にのび、その覆土5は黒褐色シルトで、炭化物や焼土を若干含んでいる。燃焼部で、倒立した状態の土師器の甕が検出されており、支脚として用いられたと考えられる。

竪穴住居跡内の南西隅に径30cm、深さ15cmの柱穴1が確認されている。柱穴埋土1は黒色シルトであり、黄褐色土ブロックと焼土粒を少量含む。埋土2は黒褐色シルトであり、焼土粒を多く含む。

黒褐色シルトの覆土4より土師器の杯が3個体出土している（第12図版4、5、6）。杯は国分寺下層式の前段階のものである（加藤1989）。これらの出土上器から第1号竪穴住居跡は7世紀末から8世紀前半に属すると考えられる。同時期の竪穴住居跡は、宮城県志波姫町山ノ上遺跡（手塚1980）、御駒堂遺跡（小井川他1982）、蔵王町塙沢北遺跡（小川1980）で確認されている。

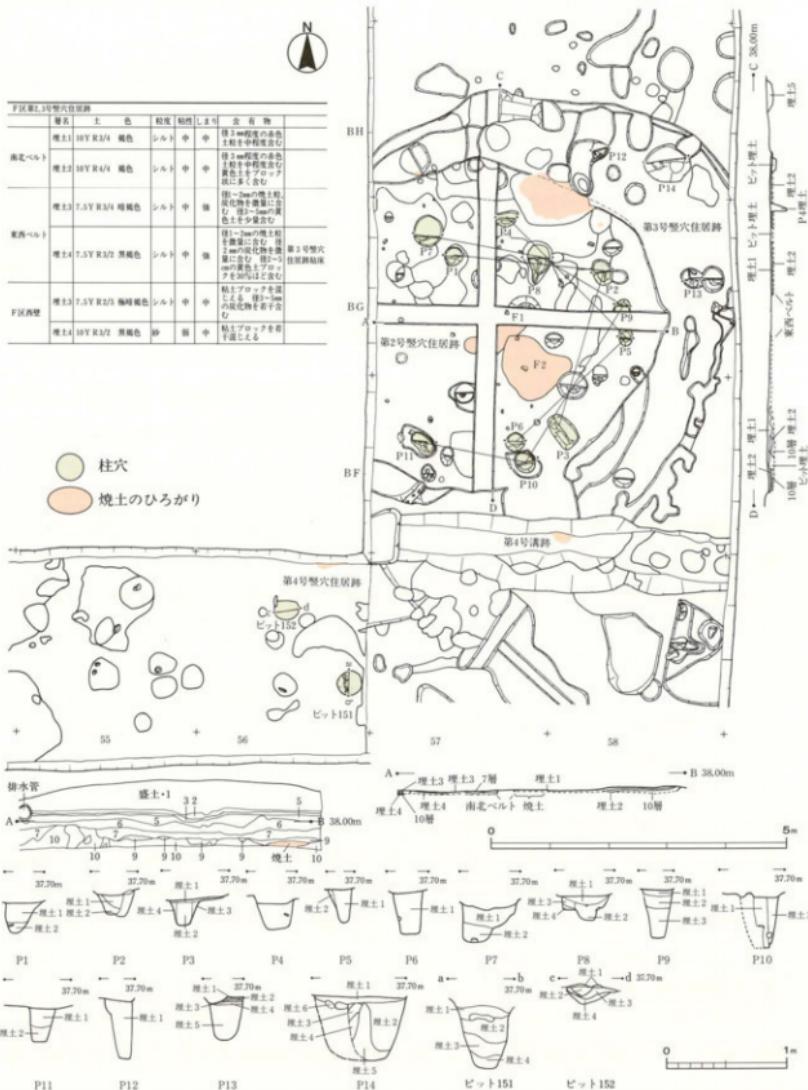
（高橋）

##### 第2号竪穴住居跡（第4図）

F区北寄りで検出された直径5.6m程の不整円形を呈する竪穴住居跡である。壁上部は第3号竪穴住居跡の構築の際に削平されている。残存する深さは5～15cmである。今回の調査では床面の精査は一部にとどめており、壁溝は検出されなかった。

住居跡の中央およびその南東寄りで重複する2基の炉跡が検出された。いずれの炉も、焼土と炭化物を多量に

下流部(2) 河床粒径分布						
層名	土 色	粒度	粘性	しまり	含 有 物	
南北ペルト	褐土1 10YR 4/4 棕褐色	シルト	中	中	棕褐色の細かな砂 を多く含む	
	褐土2 10YR 4/4 棕褐色	シルト	中	中	棕褐色の細かな砂 を多く含む 青色をキラリと 光る。多く含む	
東西ペルト	褐土1 7.5YR 4/4 棕褐色	シルト	中	強	化粧土を多く含む 青色をキラリと 光る。多く含む	
	褐土2 7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	中	強	1-2mm程の砂 を多く含む 青色をキラリと 光る。多く含む	算上可塑性 限界点
F区西壁	褐土1 7.5Y R 3/2 海綿褐色	シルト	中	特	粘土フリクション がよく 3-5mm程の砂 を多く含む 青色をキラリと 光る。多く含む	
	褐土2 10Y R 3/2 黑褐色	シルト	弱	中	粘土フリクション がよく 3-5mm程の砂 を多く含む	



第4図 第2、3、4号竪穴住居跡(F・H区)

### Plans and sections of pit dwelling 2, 3 and 4

含んでいる。1号炉(F1)は重複関係と位置から第2号窓穴住居跡に伴うと考えられる。この炉は長径1.4m、短径約60cmの不整梢円形を呈している。

主柱と推定される柱穴は、P1～6の6基が検出されている。P1～3は、深さ20cm前後で埋土に炭化物や焼土を比較的多く含み、一群と推定される。P1とP2は2.5m、P2とP3は2.7mの間隔をもち、南西の柱穴は検出されていないが、主柱はほぼ正方形の4本柱構成をとると推定される。P4～6は深さ30cm前後で焼土をほとんど含まず、一群のものと推定される。P4とP5は3m、P5とP6は2.6mの間隔をもち、これについても南西の柱穴は検出されていないが、これも主柱はほぼ正方形の4本柱構成をとると推定される。第2号窓穴住居跡は、これら2組の柱穴の存在から、ほぼ同規模で改築が行われたと考えられる。

第2号窓穴住居跡の覆土および床面からは、弥生IIb期の上器(第5図版4～11)、石鎌(第13図版20)、打製石斧(第15図版37)、凹石(第15図版44、45)、石核(第17図版53)が出土しており、この住居跡の所属時期は弥生IIb期と考えられる。この窓穴住居跡は、規模、構造の点で、岩手県滝沢村湯舟沢遺跡(鶴生庵 1986)、磐梯町馬場野II遺跡(田舎地 1986)、宮古市上村貝塚(小田野地 1991)の弥生時代前期窓穴住居跡と類似する。(須藤、西村)

### 第3号窓穴住居跡(第4回)

第3号窓穴住居跡は第2号窓穴住居跡と重複し、直径約8mの不整円形を呈する。洪水により壁上部が削平されている。壁溝は幅20cm、深さ20cm程度で周囲12m分が確認された。また貼り床も確認された。

2号炉(F2)は第3号窓穴住居跡に伴うと推定される。F2はF1の上層にある。この炉は東西1.2m、南北

ピット番号	層	名	色	粒度	粘性	しまり	含	有	物
P1	埋土1	7.5Y K3/2	黄褐色	シルト	中	中	10mm以上の炭化物、黄色、赤色土粒を多く含む		
	埋土2	7.5Y V3/2	黄褐色	シルト	中	中	10mm以上の黄褐色土粒を多く含む		
P2	埋土1	7.5Y R3/2	黄褐色	シルト	中	中	10mm以上の黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	19Y R3/4	褐色	砂質シルト	中	中	10mm以下の炭化物、褐色土粒を多く含む		
P3	埋土1	19Y R3/1	無褐色	シルト	中	中	5mm以内の炭化物を多く含む		
	埋土2	7.5Y R	黄褐色	砂質シルト	弱	中	5mmの炭化物を多く含む		
P4	埋土1	19Y R2/2	無褐色	シルト	弱	中	5mmの炭化物を多く含む		
	埋土2	10Y R2/2	無褐色	シルト	弱	中	5mmの炭化物を多く含む		
P5	埋土1	10Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	5mm以下の炭化物を多く含む、10mmの炭化物を比較的多く含む		
	埋土2	10Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	10mm以下の黄褐色土粒を多く含む		
P6	埋土1	10Y R2/3	無褐色	砂質シルト	中	中	10mm以下の黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R2/3	無褐色	砂質シルト	中	中	10mm以下の黄褐色土粒を多く含む		
P7	埋土1	10Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	5mm程度の黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	7.5Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	5mm程度の黄褐色土粒を多く含む		
P8	埋土1	10Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	5mm程度の黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	5mm程度の黄褐色土粒を多く含む		
P9	埋土1	10Y R2/2	無褐色	砂質シルト	中	中	1～2mmの炭化物を含む		
	埋土2	19Y R2/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの炭化物を含む		
P10	埋土1	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの炭化物を含む		
	埋土2	10Y R4/2	褐色	砂質シルト	中	中	10mm程度の炭化物を含む		
P11	埋土1	10Y R4/2	褐色	シルト	中	中	10mm程度の炭化物を含む		
	埋土2	10Y R4/2	褐色	シルト	中	中	10mm程度の炭化物を含む		
P12	埋土1	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	弱	2mm程度の黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
P13	埋土1	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
P14	埋土1	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
P15	埋土1	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
P16	埋土1	10Y R4/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
	埋土2	10Y R4/2	無褐色	シルト	中	中	10mmの黄褐色土粒を多く含む		
ピット番号	層	名	色	粒度	粘性	しまり	含	有	物
ピット151	埋土1	10Y R3/2	黒褐色	粘土質シルト	中	(中)やや弱	砂を少量含む	10mm程度の赤褐色土粒、10mm程度の炭化物を多く含む	
	埋土2	10Y R3/2	黒褐色	粘土質シルト	中	中	砂を多く含む	10mmの赤褐色土粒、10mm程度の炭化物を含む	
ピット152	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット153	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット154	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット155	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット156	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット157	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット158	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット159	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット160	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット161	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット162	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット163	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット164	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット165	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット166	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット167	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット168	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット169	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット170	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット171	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット172	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット173	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット174	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット175	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット176	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット177	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット178	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット179	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット180	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット181	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット182	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット183	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット184	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット185	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット186	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット187	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット188	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット189	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット190	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット191	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット192	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
	埋土2	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	
ピット193	埋土1	10Y R3/2	無褐色	砂質シルト	中	中	砂を含む	10mmの赤褐色土粒を含む	

80cmの不整形を呈し、その中にこぶし大の縁が7点散在している。

主柱穴は、P 7～11の5本が検出されている。P 7、P 9、P 10は深さが40～50cmある。P 8、P 11は深さ20～30cmと浅い。主柱穴P 7、P 9、P 10間の距離は3.2～3.6mである。さらに壁寄りに、P12～14の柱穴がある。これらはP 7～11に補助的に組み合う可能性がある。

この第3号堅穴住居は、第2号堅穴住居を拡張し、建て替えられたものと推定される。

第3号堅穴住居跡の床面および主柱穴P 9、P 10から弥生IIb期の土器が出土している。

また、第3号堅穴住居跡では、北寄りの貼り床上にひろがる長径1.4m、短径80cmの不整橢円形を呈する焼土面をはじめとして、いくつかの焼土面が確認されている。P14の埋土には焼土粒や炭化物が多く含まれ、P 13には焼土層がみられる。さらに壁溝からは焼けた土器片が出土しており、焼失住居の可能性が高い。

第3号堅穴住居跡は、その規模、構造の点で、青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡（伊東他 1982）、秋田県秋田市地藏田B遺跡（菅原他 1986）において検出されている弥生時代前期の堅穴住居跡と類似している。（富岡、西村）

#### 第4号堅穴住居跡（第4図）

第4号堅穴住居跡はH区東北隅で検出された。焼土の分布がH区東北隅にみられ、地床かと推定される。H区北壁セクションで10層を掘り込んだ第4号堅穴住居跡の壁の立ち上がりが確認された。ピット151、152は深さ15～30cmで焼土粒を含む。これらのピットは第4号堅穴住居跡の柱穴と推定される。F区の第2、3号堅穴住居跡やピットとの重複関係から、第4号堅穴住居跡は周囲の遺構群より古いことが明らかである。さらに、ピット152からは縄文晩期V期の壺（第5図版18）や縄文晩期VI期の深鉢（第5図版17）が出土している。（水見）

#### 第5号堅穴住居跡（第5図）

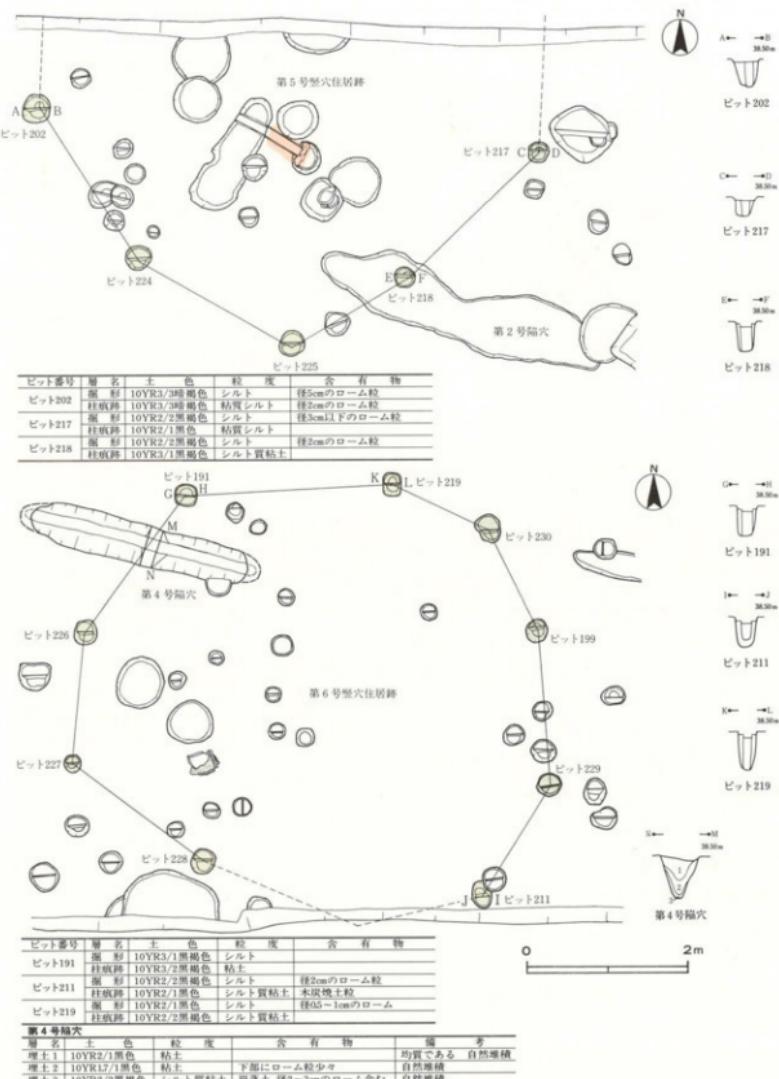
K区の中央東寄りに位置し、10層上面で確認されている。地床かとその周囲にめぐる5基の柱穴が検出された。地床灰は径約10cmのひろがりをもつ。壁は削平されていた。柱穴の配置から、径約6mの不整円形を呈する住居であったと考えられる。ピット202、217、218、224、225は住居の柱穴と推定され、深さ20～35cmである。ピット202、217、218には柱痕跡が認められる。ピット202からは、縄文晩期VI期、あるいは弥生I期の浅鉢が出土している（第6図版14）。さらに地床かから石皿（第17図版52）が出土している。この堅穴住居跡は、ピット202から出土した土器より縄文晩期VI期あるいは弥生I期に属すると考えられる。（大場、関）

#### 第6号堅穴住居跡（第5図）

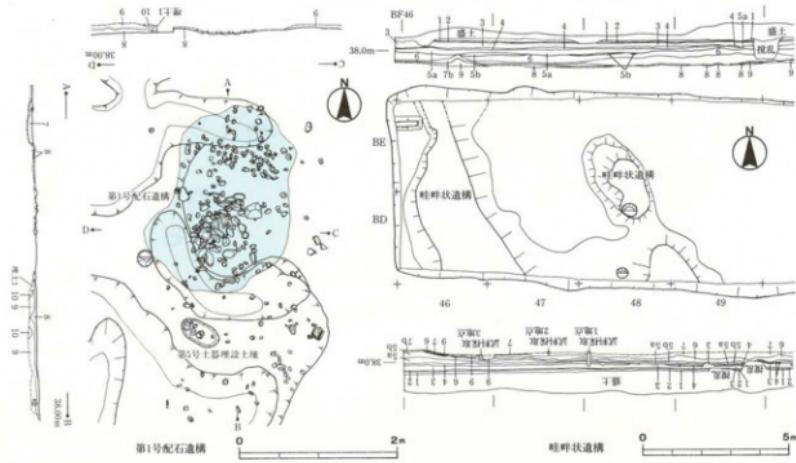
K区中央西寄りに位置し、10層上面で確認されている。柱穴の配置から推定して径約6mの円形を呈すると考えられる。ピット191、199、211、219、226～230の計9基が柱穴と推定される。このうちピット191、211、219は柱痕跡が認められ、深さ約30～50cmである。床面から縄文晩期VI期と推定される壺（第12図版1）が一括して出土している。（大場、関）

#### 第7号堅穴住居跡（第2図版）

K区北東隅において、狩野文朗氏の発掘によるトレンチに切られて検出された。覆土は6つに分けられる。ピット231はこの住居の柱穴と考えられ、柱痕跡があり、深さは20cm以上である。縄文土器片及び石器（第13図版17）が住居の覆土から出土している。（大場、関）



第5図 第5、6号竪穴住居跡 (K区)  
Plans and sections of pit dwelling 5 and 6



G区 第1号配石造構							
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考	
7 10YR 8/2	灰褐色	粘土	中	強	白色に砂化した。全体に覆っていたと考えられるが薄部に残存しているのみである。		
8 10YR 6/2	灰褐色	シルト	中	中	白色を多く含む。	生土層、フレークなどの遺物が多く出土した。	
9 7.5YR 8/1	灰褐色	砂質シルト	弱	弱	白色2mmの炭化物、後1mmの白色土粒を少量含む。	生土層、フレークなどの遺物が多く出土した。	
10 10YR 6/6	灰質褐色	砂	弱	弱		場所によって泥面が漸く変化している。	
配石 地土	7.5YR 8/1	黒色	粘土質シルト	中	中	3-5mmの炭化物をあまり多く含む。	生土層、フレークなどの遺物が多く出土した。配石造構、壁を切り、壁に覆われる。

珪群状造構						
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
5a 10YR 8/1	灰褐色	シルト	中	強	マンガンを含む。鉄分が少なく、縦方向に微細なクラックがあり鐵分を含む。	西側で「1層」で統一して土壌がみられる。また、西側では徐々に土粒が粗くなっている。
5b 7.5YR 6/2	灰褐色	シルト	中	強	鉄分が縦方向に細く入る。白色鉄分を含む。	時折かけて土壌として土壌がみられる。
6 10YR 4/2	灰質褐色	粘土	強	強	鉄分が縦方向にやや太めに入る。径2-3mmのマンガンを含む。	生土層の小礫片をまばらに含む一部で白色砂粒のラミナ後で堆積する水成堆積物。
7 7.5YR 6/2	灰褐色	粘土	強	強	鉄分が縦方向に入るとマンガンを多く含む。	6層より土色が明るい。
7b 5YR 8/6	赤褐色	粘土	強	強	上面に鉄分が少く、下部に鉄分を多く含む。	南北に分布する。
8 10YR 4/2	灰質褐色	粘土	強	強	炭化物を含む。	北側と南側には植生の根の痕跡がみられる。
9 7.5YR 1.7/1	黑色	粘土	強	強	炭化物を多量に含む。鉄分をや多く含む。	北側で土手に高まり珪群状造構がみられる。
11	-	-	-	-	-	山王寺式土器を多く出土する。

第6図 第1号配石造構、珪群状造構 (G・I区)

Plans and sections of stony feature 1 and the levee-like feature

## 2) 配石造構

### 第1号配石造構 (第6図)

G区の中央で検出され、長軸が2.2m、短軸が1.3mの楕円形を呈する。礫の集中は北と南に分かれる。北側は5~10cm程度の比較的小さな礫、南側は10~20cm程度の比較的大きな礫で構成される。9層および10層を掘り込んでいる。配石の埋土は、周囲の9層よりも黒色の強い粘土質と細粒砂質であり、炭化物を多く含んでいる。配石の埋土や周囲から、土器片、凹石、刷片、碎片などが多く出土している。配石上部で弥生IIb期の甕の口縁部破片が出土している(第5図版21、第6図版1)。

また、配石の南端から30~40cm離れた位置に、弥生IIb期の高杯脚部(第11図版3)などを出土した第5号土器埋設土壌がある。

(菅原)

### 3) 畦畔状遺構 (第6図)

I区において黒色の泥炭質粘土(9層)からなる土手状に高まつた2本の畦畔状遺構が検出された。この間隔は約4mである。東側の畦畔状遺構は、一部で途切れるが長さ約5.5mであり、断面は下端幅1.7~1.8m、上端幅1~1.5m、高さ13~33cmの台形を呈する。西側の畦畔状遺構は長さ約6mで断面は下端幅約60cm、高さ16cmの漸錐形を呈する。畦畔の間を埋める8層はG・I区にのみ認められ、9層に由来する灰黄褐色の粘土を主体とし、多量の炭化物を含んでいる。9層から弥生IIb期の壺(第7図版14)、高杯(第7図版11)や盤(第7図版16)、弥生IIa期の浅鉢(第7図版17)など多量の土器が出土している。畦畔状遺構は、出土土器から弥生IIb期に属すると考えられる。畦畔状遺構の西側では泥炭層が確認され、弥生IIb期の蓋(第7図版10)が出土している。

(森原)

## 4) 溝 跡

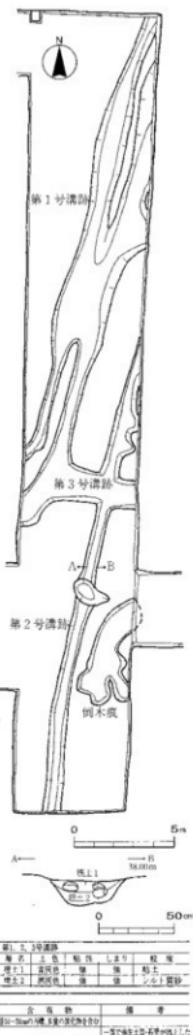
### 第1、2、3号溝跡 (第7図)

第1、2、3号溝跡はG区の4層上面で検出された。ほぼ南北に平行に走る溝を第1、2号溝跡とし、2つの溝を連結し東西に走る溝を第3号溝跡とした。第1号溝跡は幅約2.5m、深さ26cmである。B区K52区において東に分岐しており、またB区F51区で西へとのびる。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。第2号溝跡は第1号溝跡よりもやや狭く幅約90cm、深さ20cmである。壁の立ち上がりは明瞭である。第3号溝跡は幅1.7mで底面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。

埋土は2層が確認された。埋土1は多量の礫を含み、一部に4層由来の灰白色火山灰ブロックを含む。埋土2は黒褐色のシルト質砂である。この層により中世陶器の鉢鉢(第12図版13)が出土していることから、中世以降の溝と考えられる。また第2号溝跡からは弥生II期の土器(第6図版2)や磨製石斧(第14図版35)が出土している。

### 第4号溝跡 (第2、3図版)

C~F区で検出された。6b層を掘り込み、第2、3号竪穴住居跡の南縁辺を切っている。F区においては幅0.8~1.2m、深さ20cmで、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は粘土質シルトで、下層ほど沼鉄が多く含む。C、D区においては、幅1~1.2m、深さは1mである。掘り込み面は2層上面で、壁の立ち上がりは明瞭である。埋土1は黒色粘土質シルトであり、埋土2は黒褐色の粘土質シルトで、4層由来の黄褐色土粒をブロック状に含む。埋土1から縄文晚期IV~VI期の土器(第4図版28~34、第5図版1、2)や土師器の破



第7図

第1、2、3号溝跡 (G区)  
Plan and section of ditch No. 1, 2 and 3

片が出土しており、帰属時期は古墳時代以降と考えられる。

#### 第5、6号溝跡（第3図版）

G区の第1号溝跡の下層において検出された溝を第5号溝跡とし、これに直交し西にのびる溝を第6号溝跡とした。第5号溝跡は幅1.2~3.0mである。第6号溝跡は長さ2.5m、幅1mである。埋土は7層由来の白色粘土と8層由来の灰褐色粘土である。この溝は自然堤防と冲積面の傾斜変換線上に位置し、複雑に分岐しており、自然流路を利用した溝と推定される。これらは畦畔状遺構と関連している可能性が考えられ、今後検討していく必要がある。

(高橋)

### 5) 土器埋設土壌

#### 第1号土器埋設土壌（第8図）

E区A Z60区の10層上面で検出された。径60cmの円形であり、深さ35cmである。埋土1は黒褐色砂質シルトで、埋土2は褐色砂質シルトである。縄文晩期VI期の鉢（第11図版1）が出土した。

#### 第2号土器埋設土壌（第8図）

G区B B51区の西壁付近に位置し、10層で検出された。径34cmの円形で、深さ31cmである。埋土1は暗緑灰色砂質シルトで、焼土を含んでいる。埋土2は埋土1より昔みが強く、炭化物を多く含む。土器は正立し、体部下半と底部が出土している。この土器は横走縄文が施され、弥生IIb期に属する甕（第11図版2）と考えられる。また、径10cmの礫が埋土2上面で出土している。

#### 第3号土器埋設土壌（第8図）

G区B C52区の10層上面で検出された。楕円形を呈し、長径82cm、短径44cmで深さは20cmである。口縁部に突起を有し平行沈線のめぐる弥生I期の深鉢（第12図版3）が出土している。

#### 第4号土器埋設土壌（第8図）

G区B D52区の10層を掘り込み、上塙底部は11層に達している。径76cmの円形を呈する。埋土は黒色砂である。横走縄文が施されている弥生IIb期の甕（第5図版19）が出土している。

#### 第5号土器埋設土壌（第8図）

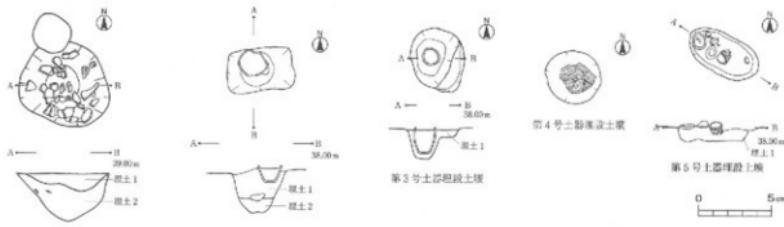
G区B H52区の第1号配石遺構の南で検出された。長径55cm、短径27cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。検出面は9層上面で、10層を掘り込んでいる。埋土は灰褐色砂質シルトである。弥生IIb期の高杯の脚部（第11図版3）が倒立して出土している。凹石と礫を共伴した。

(高橋)

### 6) 陷 穴（第2図版、第5図）

D・K区で長楕円形を呈する陷穴が5基確認された。D区は4層、K区は10層上面で検出されている。K区検出の第2~4号陷穴は自然堤防の等高線に沿って東西に一列に並んでいる。第1、5号陷穴の長軸は自然堤防の等高線に対し直交している。D区の第1号陷穴は、長軸約2.3m、短軸40cm、深さ50cmである。底部に「逆茂木」などの痕跡は確認されなかった。埋土からは遺物は出土していない。これらの陷穴は集落が盛んに営まれた縄文晩期中葉以前に作られたと考えられる。

(高橋)



第1号土器埋設土壌

第2号土器埋設土壌

第3号土器埋設土壌

第4号土器埋設土壌

第5号土器埋設土壌

0 5cm

第1号土器埋設土壌(G区)							
層名	土色	粒性	しりり	粒度	含有物	備考	
埋土1	10YR3/2 黄褐色	粘	中	砂質シルト	10層の黄褐色土とブロック状に食む	土器の小範囲	
埋土2	10YR3/4 砂褐色	中	中	砂質シルト			
第2号土器埋設土壌(G区)							
層名	土色	粒性	しりり	粒度	含有物	備考	
埋土1	10GY4/2 砂褐色	粘	中	砂質シルト	砂土を含む		
埋土2					シルト質砂	炭化物を含む	
第3号土器埋設土壌(G区)							
層名	土色	粒性	しりり	粒度	含有物	備考	
埋土1	10YR3/2 黄褐色	中	中	砂質シルト	鉛2.1mmの赤色土を含む		
第4号土器埋設土壌(G区)							
層名	土色	粒性	しりり	粒度	含有物	備考	
埋土1	10YR3/2 黄褐色	中	中	砂質シルト	褐色の鉄分が比較的多く含む	埋土1, 2と物で分けて出る	
埋土2	7.5YR4/2 砂褐色	中	中	砂質シルト		山王田原土と合む 墓(1-8m)を含む 9層を切り 8層に埋められた 3層に分かれる	

第8図 第1、2、3、4、5号土器埋設土壌 (E・G区)

Plans and sections of pit 1, 2, 3, 4 and 5 with buried pottery

## 7) ピット

## ピット3 (第9図)

C区AX74区の4層上面で検出された。径126cmの円形を呈し、深さ12cmである。縄文晩期Vc期の台付浅鉢（第4図版4）、弥生I期の鉢（第4図版3）、IIa期の鉢（第4図版2）、壺（第4図版1）が出土している。また、土製品（第10図2）、円盤状石製品（第15図版38）が出土している。

## ピット8 (第9図)

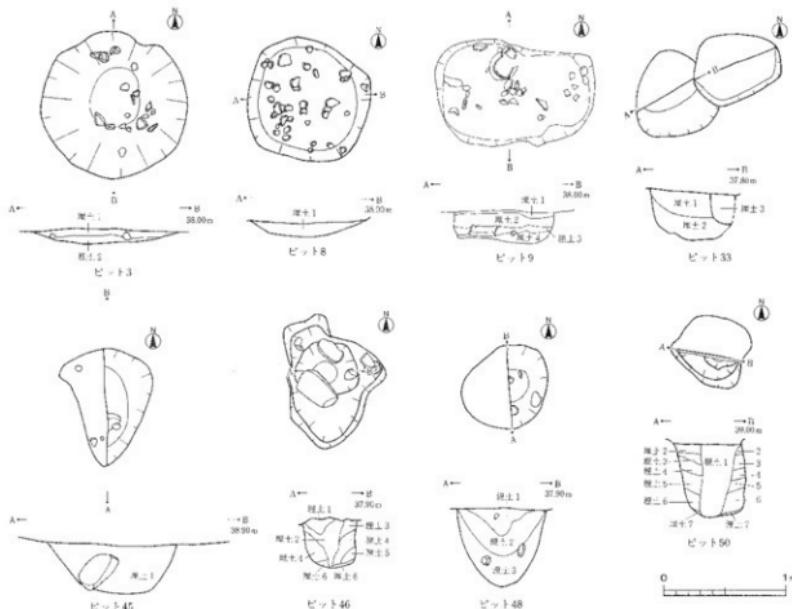
C区B75区の4層上面で検出された。径102cmの円形で深さ16cmである。縄文晩期V期の鉢（第4図版6）、Vc期の壺（第4図版7）、晩期VI期の深鉢（第4図版5）が出土している。

## ピット9 (第9図)

C区B75区の4層上面で検出された。長径131cm、短径51cmの小判形を呈し、深さ27cmである。焼土、炭化物が多量に含まれるピット下部から土師器の壺の口縁部（第12図版12）が倒立して出土している。また、土師器の杯、台付壺（第12図版7、8）が出土しており、これらは一括して廃棄されたものと考えられる。他に縄文晩期V期の壺（第4図版8）、晩期Vb期の壺（第4図版9）が出土している。このピットの帰属時期は7世紀末から8世紀前半と考えられる。

## ピット33 (第9図)

E区C61区の10層上面で検出された。径40cmの円形を呈し、深さ38cmである。埋土1から繩文土器片が出土した。埋土は2つに分けられ、埋土2から石刀（属性表No.44）と繩文土器片が出土している。



ピット番号	坑名	東	西	北	南	地質	地	年	物	層
ピット3	C	3.5Y R 2/2	無色	中	中	シルト	おさかがく1cm以下の土壌物を含む			
	D	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	10cm以上の土壌物を含む 黄色マットを含む 0.5cm程度の小石を含む			
ピット8	C	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	D	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット9	C	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	D	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット33	E	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	F	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット45	E	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	F	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット46	E	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	F	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット48	E	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	F	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
ピット50	E	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	F	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	G	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	H	7.5Y R 1/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			
	I	10Y R 2/2	無色	中	中	シルト	表面に1mm程度の土壌物を含む			

第9図 ピット3、8、9、33、46、48、50 (C・E・F|X)

Plans and sections of pit 3, 8, 9, 33, 46, 48 and 50

**ピット45(第9図)**

F区A Z58～B A58区の10層上面で検出された。長径94cm、短径76cmの不整形を呈し、深さ21cmである。埋土は暗褐色砂質シルトであり、黄褐色土粒をブロック状に含んでいる。ピットの底面近くから礫が出土している。

**ピット46(第9図)**

F区A Z57区10層上面で検出された。長径108cm、短径78cmの楕円形で、深さ41cmである。埋土は6層が確認され、黒褐色や褐色のシルトである。ピット上部に石皿などの礫石器(第16図版50)が出土し、一括して廃棄された可能性が高い。山形突起を有する弥生I期の高杯(第5図版12)が出土している。

**ピット48(第9図)**

F区B A58区の10層上面で検出された。径72cmの円形で、深さ65cmである。埋土は3層で、いずれも炭化物を含んでいる。埋土1と3から礫が出土している。

**ピット50(第9図)**

E区A Z60区の10層上面で検出された柱穴である。径65cmの不整円形を呈し、深さ64cmである。埋土1は柱痕跡であり、径30cmを測る。黒褐色シルトであり、径5mmの褐色土粒を含む。埋土1の周囲に褐色と黒褐色のシルト層が互層に堆積しており、柱の埋形と考えられる。このピットの約3m北に柱穴と考えられるピット37があり、関連する可能性が高い。

(高橋)

### 第3節 遺 物

#### 1) 土 器

C区の2層、E～J区の6～10層、K区の7、8層の遺物包含層および遺構から出土した完形土器と個体認定可能な口縁部や、有文土器片・底部・台部・脚部を抽出し、属性分析を行なった。器形と装飾の明らかな個体は176点に達している。

##### a 繩文土器・弥生土器

属性表に記した「時期」と、土器型式との対応関係は以下のとおりである。縄文時代晩期IV期は大洞C2式、V期は大洞A式、VI期は大洞A'式の時期に相当する。V期はさらに1965年の調査結果(伊東他 1985)にもとづいてVa、Vb、Vcの3期に区分した。また、弥生時代I期は砂沢式の時期に相当する。IIa期は青木畠式、IIb期は山王III層式である。III期は寺下開式、IV期は樹形圓式、V期は崎山圓式、VI期は天正山式の時期に相当する。

「器種」は甕・深鉢・鉢・浅鉢・台付浅鉢・高杯・壺・注口土器・蓋に大別した。

「口縁部の特徴」は平坦口縁、平坦口縁に刻みまたは押庁、小波状口縁(第4図版27)、山形口縁(第11図版6)、平坦口縁に突起(第5図版17)、山形突起(第9図版10)に大別した。

文様帶の名称は、口縁部装飾帯をI文様帯、頸部をII文様帯、体部上半をIII文様帯、体部下半をIV文様帯、底部あるいは台部をV文様帯とした。変形T字型は、A・B・C・P型の4類型に大別し、さらに、A型を2類型に、B型を2類型に、C型を2類型に細別した(須藤 1976、90)。

抽出された縄文土器には晩期IV期からVI期までの資料が含まれている。晩期IV期の資料は主にK区から出土し

ている。深鉢は口縁部が強く外反し、平坦口縁に刻み・押圧、突起が施されたものが主体である。浅鉢は、平坦口縁あるいは平坦口縁に低い突起を付し、体部に平滑な雲形文を施したもの（第10図版4、5、7）、無文のもの（第10図版8）がある。壺、注口土器は各1点出土し（第10図版11、12）、体部に雲形文が施されている。また、IV期には、L R・R L羽状縞文が多用される。

晩期V期の資料は、C・D・F・G・H・K区から出土した。深鉢・鉢・台付浅鉢・壺がみられる。口縁部がかるく外反する深鉢が出土している（第4図版19、第5図版14）。鉢には、工字文（第7図版5、第9図版12）、匁字文（第6図版20、第11図版10）、変形工字文（第7図版9）が施されている。台付浅鉢には、体部と台部に匁字文が施されている（第4図版32、第9図版13）。壺は、縞文施文（第7図版7）、匁字文（第4図版7）の資料が出土している。またK区から無文の袖珍上器が出土している（第12図版2）。D区2層から出土した壺は（第11図版6）、口縁部に細い隆帯による三角連繋文が施され、福島県墓料遺跡第8号土壙8号土器（須藤編 1984）、根古屋遺跡第15号墓坑2号土器（柳原他 1986）に類例がみられる。

晩期VI期の資料は、D・E・K区から深鉢・鉢・浅鉢・高杯が出土している。高杯は、山形突起を有し、体部に変形工字文A2型（第9図版9）、A1型（第9図版11）が施されている。鉢には、A1型（第4図版14）、P型（第4図版25）や匁字文が展開する。匁字文の鉢（第11図版1）は、山王IVa・m層出土土器に類例がみられる。第11図版1（第1号土器埋設土壙出土）は、口縁部がゆるやかに内彎する鉢である。口縁部に匁字文、体部にはL R縞文が施され、器面に朱が塗布されている。埋設された土器の中では最も古い型式である。

弥生時代の資料は、I期からVI期までのものが出土した。弥生I期の資料はC・G・K区から深鉢・鉢・高杯・壺が出土した。鉢には変形工字文A型が施される（第4図版3）。高杯の脚部にはA2型（第11図版8）、C1型（第11図版5）が施文されている。A2型は山王IVa・k層出土の高杯脚部に、C1型は青木畠遺跡出土上器（加藤 1982）、岩手県花泉町中神遺跡出土土器（須藤 1987、96）に類例がみられる。頸部に焼成前の穿孔を有する壺が1点確認された（第11図版12）。第12図版3（第3号土器埋設土壙出土）は、低い突起をもつ小型の深鉢で、口縁部に4条の平行沈線、内面に1条の沈線がめぐり、体部にはR無節縞文が施される。

弥生時代IIa期の資料は、G・K区から壺・鉢・高杯・壺が出土した。鉢には変形工字文C1型が施されている。高杯の体部にもC1型（第8図版15、17）が展開し、脚部には波状文（第8図版18）が施されている。壺は、口縁部がゆるやかに外彎しながら立ち上がる器形である（第9図版4）。第11図版2（第2号土器埋設土壙山十）は、体部に細いL R縞文が横走する壺であり、体部下半から底部にかけて残存し、外面に煤が付着している。

弥生IIb期の資料は、I・K区遺物包含層、F区第2、3号竪穴住居跡、G区第4、5号土器埋設土壙、第1号配石構造から検出されている。壺・深鉢・鉢・高杯・壺・蓋が確認されている。鉢には波状文（第7図版23）と変形工字文C2型（第5図版7、第8図版11）が施される。高杯は、体部にC2型（第5図版8、第7図版24、25）、王字文（第7図版11）が展開する。脚部には波状文（第9図版1）、垂下文が単独あるいは重層して（第5図版9）施される。壺にも変形工字文C2型が飾られる（第8図版1）。この時期の蓋は2点確認されており、いずれも体部が直線的にひろがり、L R縞文が施されている（第7図版10、第8図版13）。

第2号竪穴住居跡から主体的に出土した弥生IIb期の土器には、壺・深鉢・鉢・高杯・壺がみられる。変形工字文C2型が施され（第5図版7、8）、横走縞文が多用されている。第5図版19（第4号土器埋設土壙出土）は、L R横走縞文の施された壺で、内面に炭化物の付着がみられる。第11図版3（第5号土器埋設土壙出土）は、高杯の

脚部で、磨消繩文による垂下文が施され、器面全体に朱が塗布される。第1号配石造構から出土した土器は、平坦口縁で、口縁部がゆるやかに外彎する壺である。頸部に平行沈線3条、体部には横走繩文が施される（第6図版1）。弥生IIb期の器種構成と文様の特徴は、須藤が明らかにした山王III層式の内容と一致する（須藤 1983）。

弥生時代IV期以後の土器は、F区6b層、G区第2号溝跡、K区7、8層から出土している。弥生IV期の鉢には連弧文が施される（第7図版22）。第11図版7には焼成前の穿孔がみられる。第11図版13の鉢は底部に沈線文が施されたもので、蓋の可能性も考えられる。類例は、秋田県横長根A遺跡遺構外出土土器（児玉 1984）にみられる。第7図版1は、弥生IV～V期の壺で、半截竹管で弧線文が施され、F区とI区出土の破片が接合している。この土器型式は、境ノ日A遺跡出土壺（太田雄 1982）と共通する。第6図版23はこれと類似する壺で、半截竹管による波状文が施されている。

（小山、石田、青原）

#### b 土 師 器

土師器は△、C～F区から出土した。とくに第1号竪穴住居跡とピット9では器形と製作手法の明確な一括資料が出土している（第12図版4～12）。

##### 第1号竪穴住居跡出土土師器

カマド付近から3点の杯が出土した。2点の杯は器高が低く底部は比較的平坦である（第12図版4、5）。さらに他の1点は比較的器高が高く、底部がかるく丸みを帯びる（第12図版6）。いずれも体部外下面に段を有し、口縁部は内唇気味にひろがる。第12図版4は口縁部端面内側に稜をもつ。3点とも体部上半の外面はヨコナデ、内面は全面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。この土器の器形と調整は御駒堂遺跡出土土師器（小井川他 1982）と類似しており、その年代は7世紀末から8世紀前半に属すると推定される。

##### ピット9出土土師器

ピット9から一括出土した土師器は、杯1点、碗1点、壺3点、台付壺1点で構成される。杯（第12図版7）は丸底で体部外面に段を有し、ほぼ直立した口縁部をもつ。外面調整は上部をヘラミガキ、下部はヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。内面調整は全面ヘラミガキである。内外面ともに黒色処理が施されている。碗（第12図版11）は体部から口縁部にかけてゆるやかに外彎する壺形である。外面調整は口縁部ではヨコナデの後にヘラミガキ、体部ではヘラケズリの後に上半にヘラミガキ、下半にハケメが施されている。内面調整は全面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。第12図版9、10は壺の口縁部である。9は摩滅のため内外面の調整は不明である。10は口縁部内面に稜があり、内外面にヨコナデが施されている。第12図版12は頸部に段を有する長胴壺である。口縁部は外反し、内外面にヨコナデが施されている。体部は内外面ともに不調整で接合痕が明瞭である。第12図版8は台付壺の台部である。中央部でゆるやかに膨らみ、裾部が外方に開く。調整は外面にヘラケズリの後、裾部内外面にナデが施される。この上器は御駒堂遺跡の第2群土器（小井川他 1982）に伴う関東地方の真間式系土器に類似しており、年代は7世紀末から8世紀前半に属すると考えられる。

（荻原）

#### c 中世陶器

中世の捕鉢の口縁部破片がG区第2号溝跡から出土した（第12図版13）。表面は赤褐色を呈し、内外面をヨコナデ調整している。胎土や色調などから在地系の窯の製品と考えられる。

（荻原）

## 2) 土 製 品

土製品は土偶1点、土版1点、耳飾り3点、不明土製品が2点、計7点が出上している。

### a 土 偶 (第10図1)

K区遺物包含層確認面(7、8層上面)から左顔面を欠損した中大の土偶頭部が出土した。側頭部から頭頂にかけて結髪がブリッジ状に飾られ、側頭部の結髪が垂髪となっている。また、頭頂と結髪には朱が残っており、両耳には径3mmの焼成前穿孔がみられる。山王塚遺跡から出土した晩期V期の中空土偶(伊東他 1985)は、頭部の結髪がブリッジとなっている点、側頭部に垂髪がみられる点、朱が塗られている点など今回の出土土偶とよく類似している。これらは土偶と秋田県鶴田遺跡(晩期V期終末～VI期)、地蔵田B遺跡(弥生I期)、青木畠遺跡(弥生IIa期)、山王塚遺跡III層出土の土偶とを比較すると、晩期から弥生時代初頭の時期的な変遷を捉えることができる。

### b 土 版 (第10図3)

K区の櫻乳坑から小判形と推定される土版が出土した。丁端に二個一対の焼成前穿孔がみられる。その下に径2mmほどの刺突が並び、さらに細線が中軸線上に施され、その左右に横線8～10条が認められる。

### c 耳 飾 り (第10図4、5、6)

K区遺物包含層から出土した。第10図4・5は眞形、6は椎骨形耳飾りである。5・6には朱の残存がみとめられる。これらは、縄文時代晩期中頃から後半の東北地方で一般的な耳飾りである。

### d 不明土製品 (第10図2、7)

外面に細いT字文が施された土製品(第10図2)がC区ピット3から出土した。裏面には接合痕がみられ、大型中空土偶破片の可能性がある。

半球状を呈する土製品(第10図7)はK区ピット191から出土し、縄文時代晩期から弥生時代前期に属する可能性が高い。本体は大きく欠損しており、文様などの装飾はみられず、全面を丁寧にナデで調整している。(鈴木)

## 3) 石器・石製品

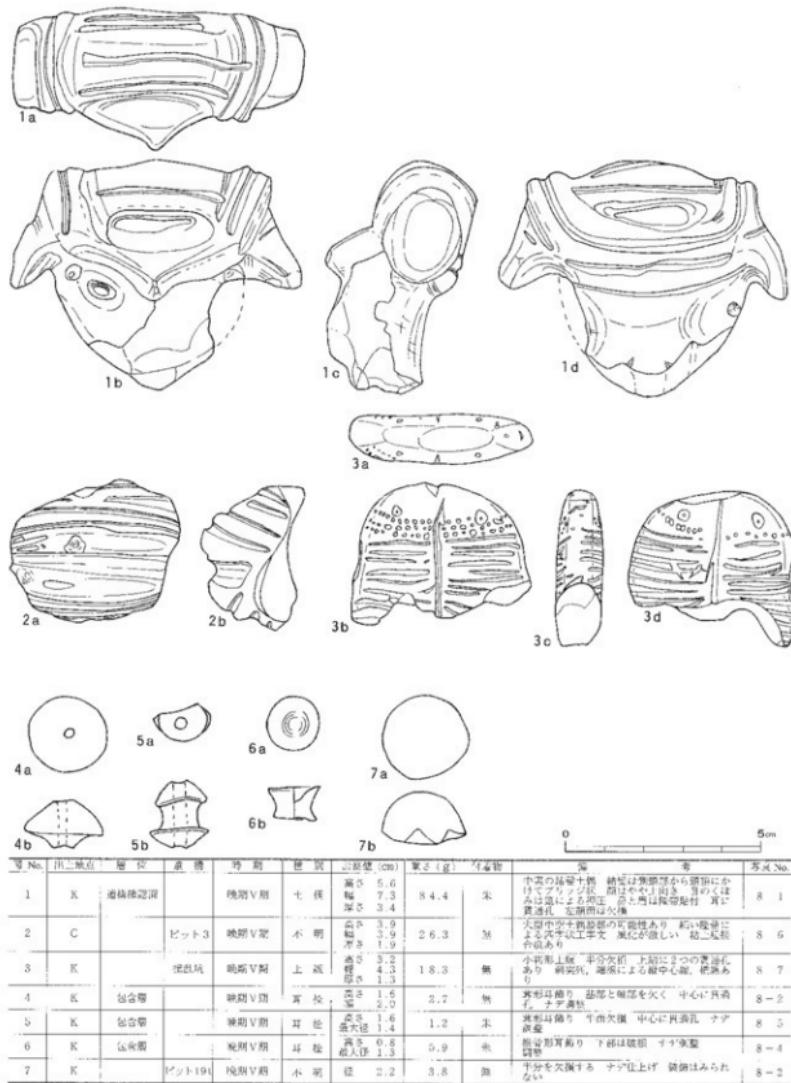
E～J区の6～10層、K区の7、8層の遺物包含層および遺構から出土した石器、石製品のうち加工の明確なもの100点について属性を抽出し検討を行った。

### 石 鐵 (第13図版1～25)

石鐵は33点出土し、有茎鐵が30点、無茎鐵が3点(第13図版19、23、24)みられる。左右対称で人念な剥離が施されたものが多い。有茎鐵の形態は多様で、長さ15mmから40mm前後、重量0.3gから2.4gと幅がある。石材は鉄石英が多く、他に頁岩、黒曜石などがみられる。18の関部に着柄の痕跡である微量のビッチがみられる。使用の際に生じたと考えられる基部・先端部の折れや衝撃剥離痕は、36点中14点に認められる。

### 石 錐 (第13図版26、29)

明確なつまみをつくり出したもの(第13図版26、29)が3点、つまみのないものが1点出土している。剥片の一端を加工して錐部を作り出し、つまみにはわずかに二次加工が施されている。石材は頁岩・凝灰岩・鉄石英である。29の先端はかるく摩滅している。



第10図 山王廻遺跡出土土製品  
Clay object from the Sanno-gakoi site

### 石 錐 (第13図版27)

この石錐は頁岩製で、わずかな加工が施されているが明確ではない。縁辺には微小剝離痕が観察され、刃部として用いられたと推定される。つまみを作り出すために27b面右側縁に鍔状の剝離が加えられている。

### 精円形両面加工石器 (第13図版28)

この石器は頁岩製で、比較的厚い剝片を素材としている。先端部には微小剝離あるいは調整痕がみられ、刃部が形成されたと考えられる。

### 石 刀 (第13図版30、第14図版31)

第13図版30は粘板岩製で、両端を破損している。敲打後研磨によって一側縁は鋭角に刃部が作り出され、他の側縁は丸く整形されている。刃部には整形の際の敲打痕が集中している。第14図版31も粘板岩製で、両端を破損している。整形の際の敲打痕をほとんど残さず、丁寧に研磨され向側面は平坦に作り出されている。

### 独 鉛 石 (第14図版32)

粘板岩製で、両端を破損している。中央の隆帯は丸みを帯び、周辺に整形の際の敲打痕と擦痕が観察される。

### 磨 製 石 斧 (第14図版33～35)

第14図版33は蛇紋岩製の小型石斧である。刃部には摩滅や刃こぼれがみられ、刃部に垂直方向の明瞭な擦痕が観察され使用痕と考えられる。34は凝灰質砂質頁岩製で、刃部を欠損している。破損面には敲打痕が集中しており、敲石に転用されたと考えられる。35は砂質凝灰岩製の始刃石斧とみられる。刃部には刃こぼれが観察される。34、35ともに整形時の敲打痕を多く残している。

### 打 製 石 斧 (第14図版36、第15図版37)

第14図版36は頁岩製で、片面加工である。第15図版37はやや小型で撮影を呈し、石英安山岩製である。刃部にはわずかに摩滅がみられる。

### 円盤状石製品 (第15図版38、39)

第15図版38は砂質頁岩製である。周縁は両面から剝離され、刃部は刃角70°前後に作り出される。縁辺には不明瞭な敲打痕がある。39は石英安山岩製である。周縁は両面から加工されており、部分的に90°を超す剝離がなされている。

### 石 鍤 (第15図版40)

石英安山岩製で短軸方向に対称に剝離による抉りを行する。

### 磨 製 石 (第15図版41)

ひろい磨面が認められる石器を磨石と分類した。

41は石英安山岩を素材とし、台形に近い形態で、e面に磨面が認められる。他にa面にもe面より弱い磨面が確認できる。この磨石はa、c、d、e面に敲打痕が確認され、特にa、c、e面に、局部的に敲打が集中する(第11図：敲打痕)。d面の敲打痕は頂部にはほぼ円形の平坦面を形成している点で、a、c、e面と異なる。

### 敲 製 石 (第15図版43)

礫の先端部などに敲打を残すものや、凹石とは異なり、敲打の位置が一定しないものを敲石と分類した。この敲石は石英安山岩を素材とする。長楕円形の礫の両端に敲打痕が顕著である。

## 凹 石 (第15図版42、44、45、第16図版46～49)

礫の中央部に集中して敲打が加えられたものを凹石と分類した。第15図版42は長楕円形を呈する。a、c面には2カ所ずつ敲打痕の集中が認められる。それぞれの凹みのひろがりと深さの程度は異なる。第15図版44は、ほぼ円形であり、a、c、d面に凹みが認められる。さらにe面には磨面が形成され、不明瞭であるが線条痕が観察される。c面には敲打痕の集中と、横断面がV字状の細長い凹みが複合している。第15図版45、第16図版46、47は、楕円形であり、両面に敲打痕の集中が認められる。第16図版48、49は大型品であり、凹みは石器の中央部付近に認められる。自然縁を用い、整形のための調整は施されていない。図示された凹石はすべて石英安山岩製である。

## 石 盆 (第16図版50、第17図版52)

比較的大型の礫を素材とし、ひろい磨面をもつものを石皿と分類した。第16図版50は比較的緻密な安山岩を素材としている。長楕円形の自然縁の平坦面を磨面としている。一部に長軸に平行する線条痕が認められる。裏面は中央部に一ヵ所発達の弱い敲打痕が認められる。第17図版52は多孔質の石英安山岩質凝灰岩を素材とし、ほぼ円形に加工されている。磨面には不明瞭であるが線条痕がみられる。約3分の1が破損し、一部が火を受けて赤褐色に変色している。

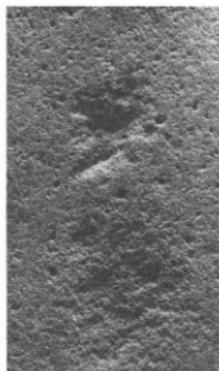
## 線 刻 磨 (第16図版51)

扁平な石英安山岩を素材としている。線刻は表裏に施されており、横方向に数本単位で幅0.1～0.2mmの細い線刻が施された後、縦方向に幅0.3～0.5mmの線刻がなされる。

## 石 核 (第17図版53～57)

第17図版53は珪化凝灰岩で、主要作業面はa面である。打面を固定して数回の剥離を行っている。54、56は鉄石英が素材である。54は自然面を多く残している。56は比較的良質の鉄石英を素材とし、同一面から数回の剥離がなされ、打面転移が頻繁に行われている。57は、周縁から剥離が行われ、円形を呈している。さらにその作業面を打面とし、剥離を行っている。石材はいずれも今回の調査で出土した剥片石器と共にしており、遺跡内でそれらが製作されたことを示唆している。

(玉橋、高橋、池谷)



第11図 敲打痕

(径2～5mmの敲打痕が集中する)  
Pecked mark

## 第5章 結語

本年度の調査は、山王開遺跡の立地する広々とした自然堤防上に縄文時代の集落がどのように営まれていたのか、遺跡の構造を明らかにすることが主要な調査目的であった。ことに縄文時代の人々の生活域、居住域がどのようにひろがっていたのか、居住域を構成する堅穴住居はどのような構造と規模をもっていたのか、膨大な遺物を出土する包含層がどのようにひろがるのか、さらに、死者を葬る墓域がどこに営まれたのか、その墓域はどのような構造をもつのかといった点を明らかにし、晚期集落の構造と規模を把握することにつとめた。また、集落を取り巻む泥炭層の範囲と、それを保護している地下水の状況についても発掘調査によって可能なかぎり情報を確保することを目指した。そのため、東西長200m、幅150mを越す自然堤防上に1550m<sup>2</sup>に達する調査区を設定し、遺構と包含層の検出を進めた。

2カ月間の調査で、晚期縄文時代の集落を構成する堅穴住居群、それを覆う包含層のひろがりが確認された。さらに、弥生時代の堅穴住居群、土器埋設土壙群、配石遺構、古墳時代の土器埋設土壙、古代の堅穴住居など多数の遺構が明らかになった。

第一次調査の最も重要な成果は、微高地のほぼ中央に設定したK区で検出された多数の柱穴群である。この遺構群を検討した結果、第5、6、7号堅穴住居跡の3棟の住居跡の存在が明らかにされた。第5号堅穴住居跡は、5カ所の柱穴が弧状に並び、直径6m前後の円形に主柱穴のめぐる堅穴住居と推定された。中央に焼けた石皿1点と灰跡とみられる炕上のひろがりが認められた。第6号堅穴住居跡は9カ所の柱穴が環状にめぐり、径6m程の円形に主柱穴がめぐる堅穴住居の存在が推定された。

また、K区の東北隅で、1958年に調査された狩野文朝氏の発掘区と、住居跡の壁とみられる遺構が検出された。この遺構を第7号堅穴住居跡とした。これらの住居以外に多数のビットが検出され、それを覆う包含層からは、晩期中葉から後半の縄文土器、石器が出土した。このように、微高地のほぼ中央に晚期縄文集落が営まれていたことが確認された。この居住域、生活域がどのようにひろがっているのか、また、集落がどのような推移をとどったのか、集落の構造とその変遷の解明が今後の課題である。

また、K区とD区から縄文時代の階穴が5基発見された。これらの遺構は、大規模な集落が営まれる以前にこの自然堤防が利用されていた状況を知る手掛かりとなった。

今回の重要な調査成果のひとつに、D区における弥生時代の堅穴住居跡の発見がある。第2、3号堅穴住居跡は、第5～7号堅穴住居跡から約50m程北にあり、弥生時代になると、晚期縄文時代の居住域からやや北西に移動し、自然堤防の微高地の北西縁辺で人々の生活がくりひろげられたことが明らかになった。

第2号堅穴住居跡は、径約6m、不整円形で4本柱、中央に地床炉（F1）1基をもつ。柱穴は3カ所（P1～3）が確認されている。いずれも焼土を含んでおり、焼失後に柱を移し、ほぼ同規模（P4～6）で建て替えている。さらに、後に規模を拡大して径9m程の不整円形の大型住居に建て替えている。この第3号堅穴住居跡は6本柱で5カ所の柱穴（P7～11）が確認されている。か跡1基（F2）、壁溝が1ないし2条めぐる。この大型住居跡も改修1回が認められる。第2、3号堅穴住居跡の床面から弥生時代前期後半の山王Ⅲ肩式土器が出土して

おり、住居が営まれた時期は前期後半である。この住居の下層に第4号堅穴住居跡が検出されている。地床炉1基と2カ所の柱穴が検出され、壁の立ち上がりが確認されている。この柱穴から晚期終末から弥生時代I期の土器が出土している。今後、このF・H区付近において晚期終末から弥生時代前期の堅穴住居跡が他にも検出されると予想される。また、弥生時代住居域の西側のG区では、土器壇設上壇4基、配石遺構1基が発見されている。いずれも山王Ⅲ層式土器が出土している。弥生時代の墓域がこの地域にひろがっている可能性が高い。

第3の成果として、泥炭層が自然堤防の北西に広範囲にひろがっていることが確認された。泥炭層の最上層で山王Ⅲ層式の上器片が検出されており、弥生時代の動植物遺存体が包含されている可能性が高く、今後の精査が必要である。

昭和40年度の調査区から、今回の調査区まで150m程の距離があり、縄文時代、弥生時代の生活域は、東西約150m、南北80mにおよび、さらに、弥生時代の墓域の存在も認められ、大規模な集落であったことが明らかになった。今回確認された弥生土器は、前期から中期中葉、後半、そして後期におよび、集落が晚期から弥生時代後期まで長期にわたって存続したことが明確になった。

さらに、微高地東南部のA・B・C区では古墳時代のピット9に5点の土師器が一括で埋設され、注目された。A区西南部では7世紀後半から8世紀初頭の堅穴住居跡が1棟検出され、この遺跡が縄文時代から古代まで断続的ではあるが、長期にわたって利用され続けた複合遺跡であることが明らかになった。

遺物では、縄文時代晚期IV期の大洞C2式上器、晚期V期の大洞A式土器、VI期の上器（大洞A式相当）がK区で多数出土している。また、弥生土器は、山王Ⅲ層式が豊富に出土するが、樹形匣式、岩出山町境ノ目△遺跡出土土器群と共通する中期後半の上器群、天干山式上器などが確認されている。また、石器や、土偶、土版などの土製品が多数共伴した。これらの資料によって縄文時代終末から弥生時代にかけての物質文化の変遷がよく理解できるようになった。とくに土偶については、晚期終末から前期弥生時代の山王Ⅲ層式期への形態変遷が明らかとなった。その変遷は、きわめて漸移的である。

このように多くの貴重な成果が得られた。①縄文時代晚期の居住域と生活域が自然堤防のほぼ中央にあり、多数の遺構が確認され、②微高地の北西側縁辺で弥生時代の堅穴住居群と墓域が隣接して営まれ、③古墳時代、古代の遺構が南東部で検出されており、各時代の複合遺跡であることが確認された。とくに弥生時代については、山上Ⅲ層式期の包含層が予想以上にひろく分布し、また、中期中葉の樹形匣式、後半の土器群、後期の上器も発見され、きわめて長い期間、集落が存続したことが明らかになった。このような成果から、山王門遺跡はこの地域の尾幹集落であったということがあらためて確認された。

今後の課題として、①縄文時代の居住域の範囲をより具体的に捉える。②縄文時代晚期の堅穴住居の構造を明確にする。③縄文時代の墓域の位置を明らかにする。④弥生時代の集落構造、住居構造を明らかにする。⑤弥生時代墓域構造を解明する、ことなどが必要である。とくに1965年調査の包含層と今年度調査区との間の未調査区を中心に、確認調査を進める必要がある。さらに、泥炭層調査の予備的調査が必要といえる。

なお、本年度のI区調査で、泥炭層とそれを覆う灰白色シルトの洪水層、あるいは疊状の高まりが検出されたが、弥生水田とのかかわりでこの地区的精査が必要といえる。

（須藤）

## 引 用 文 献

- 一迫町教育委員会 1976 史跡山王跡遺跡保存管理計画書（一迫町教育委員会）  
伊東信雄、須藤 隆 1982 海野遺跡（東北考古学会）  
伊東信雄、須藤 隆 1985 山王跡遺跡調査記録（宮城県・一迫町教育委員会）  
岩手県立博物館 1982 岩手の土器 墳内出土資料の集成（岩手県立博物館）  
梅宮 茂徳 1986 霊山根古屋遺跡の研究—福島県靈山町根古屋における再葬墓群  
遠藤勝博 1981 二戸市上田面遺跡・人頭遺跡・火行塚遺跡（岩手県埋蔵文化財センター）  
太田昭夫他 1982 宮城県黒川山古墳・日ノ目A遺跡の出土遺物 稿 4 pp.11-60  
小川淳一 1980 塩沢北遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書 III 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.277-347  
小野哲志、高橋義介 1991 上村貝塚発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書158集  
加藤道男 1992 青木塚遺跡 宮城県文化財調査報告書第85集（宮城県教育委員会）  
加藤道男 1993 宮城県における土師器研究の現状 考古学論叢 II (井沢長介先生追憶記念論文集刊行会) pp.277-329  
堅田 直 1965 田和市春木八幡山遺跡の研究 常盤山大学考古学研究室報告第1編（常盤山大学考古学研究室）  
狩野義章 1959 宮城県栗原郡一迫町山上遺跡調査 一迫町古代史第一輯  
木村剛朗 1970 編文時代石器における機能上の実験(1), (2) 考古学ジャーナル43 pp.23-26, 50 pp.22-24  
木村剛朗 1971 繩文時代石器における機能上の実験(3) 考古学ジャーナル54 pp.22-23  
興野義一 1965 宮城県山王遺跡出土の弥生式土器について 日本考古学協会第31回総会 研究発表要旨 pp.7-8  
興野義一 1976a 第二編 考古学からみた高清水、高清水町史 pp.69-100  
興野義一 1976b 第二篇・第一章 原始期 一迫町史 pp.45-100  
桙生正一他 1986 湯舟汎遺跡 湯舟汎文化財調査報告書 第2集  
T.藤利幸他 1986 馬場原II遺跡発掘調査報告書 岩手県文化事業団埋蔵文化財調査報告書第99集  
小川井和夫他 1982 御鉢堂遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書 VI 宮城県文化財調査報告書 第63集 pp.307-589  
児玉 幸徳 1984 横長根A遺跡（若美町教育委員会）  
佐藤信行他 1978 上ノ原A遺跡—弥生後期の住居跡— 宮城県一迫町文化財調査報告書第3集（一迫町教育委員会）  
佐藤信行 1984 宝鏡遺跡 宮城県一迫町文化財調査報告書第4集（一迫町教育委員会）  
白鳥良一 1980 多賀城跡出土上器の変遷 研究紀要 pp.1-40 (宮城県多賀城跡調査研究所)  
菅原俊行、安田忠市 1986 地蔵田B遺跡 秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 pp.11-261  
須藤 隆 1976 亀ヶ岡文化的終末と東北地方における初期弥生土器の成立 考古学研究 23-2 pp.25-50  
須藤 隆 1985 東北地方の初期弥生土器・山王III層式 〈考古学雑誌〉68-3 pp.1-53  
須藤 隆 1984 東北地方における弥生時代耕作社会の成立と展開 宮城の研究 I 考古学論 pp.238-303 (清文堂出版)  
須藤 隆 1986 弥生時代・統縄文時代 図説発掘が語る日本史 I 北海道・東北編 pp.113-148  
須藤 隆 1987 東日本における弥生文化の変容 考古学雑誌 73-1 pp.1-42  
須藤 隆 1990 東北地方における弥生文化 考古学・古代史論巧 pp.243-322 (伊東信雄先生追憶論文集刊行会)  
須藤 隆 1996 亀ヶ岡文化の発展と地域性 日本文部科学省研究助成金報告書第33集 pp.93-132  
須藤 隆 1984 松島塙跡(松島塙遺跡) (宮城県教育委員会)  
須藤 隆 1995 繩文時代晚期貝塚の研究 2 中沢貝塚II (東北大文学部考古学研究会)  
岸井長介 1996 旧石器時代研究の問題 考古学ジャーナル40号 pp.8-13  
岸井長介編 1979 圣山 北海道兔田郡七飯町(下北)縄文時代遺跡出土資料(北海道大学文学部考古学研究会)  
田中則和、上浜光郎 1981 山口遺跡II 仙台市文化財調査報告書第61集 (仙台市教育委員会)  
千塚 均 1980 山ノ上遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.461-499  
(宮城県教育委員会、日本道路公团)  
東京帝國大学 1926 日本石器時代遺物発見地名表 p.83  
野村 崇 1983 石劍・石刀 橋文化の研究 9 pp.181-196 (雄山閣)  
芳賀英一、小谷伸之 1994 八郎次遺跡・塩喰岩陰遺跡 東北横断自転車道遺跡調査報告25 (福島県教育委員会)  
花巻市史編纂委員会 1978 花巻市史 第二編・第一章 原始・古代 pp.47-72  
古川一明 1987 色麻古墳群の再検討 北奥古代文化 第18号 pp.25-31  
町田 洋、斎井 房大、森脇 広 1981 日本海を渡ってきたテフラ 科学 51 pp.562-569  
町田勝則 1993 第3章第3節(2)石器 山口遺跡 長野駅中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 pp.187-215  
(長野県埋蔵文化財センター)  
御草島正 1991 石獣と有舌尖頭器の衝撃剝離 古代 92 pp.79-96  
宮 城 県 1991 土地分類基本調査 岩ヶ崎 (宮城県企画部土地分類課)  
宮城県、一迫町、基礎地盤コンサルタンツ株式会社 1992 平成4年度 一道小学校建設工事に伴う地質調査委託報告書  
宮城県教育委員会 1993 宮城県遺跡地図 宮城県文化財調査報告書第152集 (宮城県教育委員会)  
宮城県教育委員会文化財保護課 1977 藤原遺跡 (- 追憶教育委員会)  
明治大学考古学博物館 1991 明治大学考古学博物館叢書叢書2 繩文晩期の世界 pp.86,87  
柳沢和明他 1991 搞糞遺跡 宮城県文化財調査報告書第132集 (宮城県教育委員会、宮城県土木部水資源開発課)  
山本暉久 1983 石棒 繩文文化の研究 9 pp.170-180 (雄山閣)

## 附章 山王開遺跡における古環境変遷

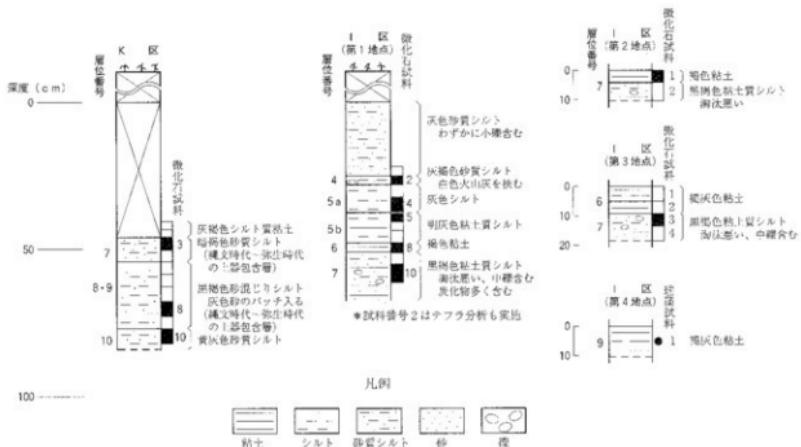
パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

本報告では、繩文時代晚期から弥生時代前期の古植生復元、本遺跡における稲作の消長および弥生時代前中期木葉から中期初頭の稲作の検証、弥生時代前中期木葉に構築された竪穴住居跡の構築年代を確認することを目的として、テフラ分析・<sup>14</sup>C年代測定・珪藻分析・花粉分析・植物硅酸体分析を行い、その結果に基づいて分析目的に対する解析を行う。

## 第1節 分析試料

珪藻・花粉・植物硅酸体の各分析では、前述した分析目的を考慮して、K区とI区から採取した土壤を選択した(第12図)。また、F区で確認された弥生時代前中期木葉から中期初頭の竪穴住居跡から検出された炭化材の<sup>14</sup>C年代測定を行った。



第12図 K区・I区(第1地点～第4地点)試料採取模式柱状図  
図中の●あるいは■は分析に用いた試料である。

## 第2節 分析方法

各分析方法については、一迫町教育委員会が保管する「平成7年度山王団遺跡 自然科学分析報告」を参照されたい。<sup>14</sup>C年代測定は学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

## 第3節 繩文時代晚期から弥生時代前期の古環境変遷

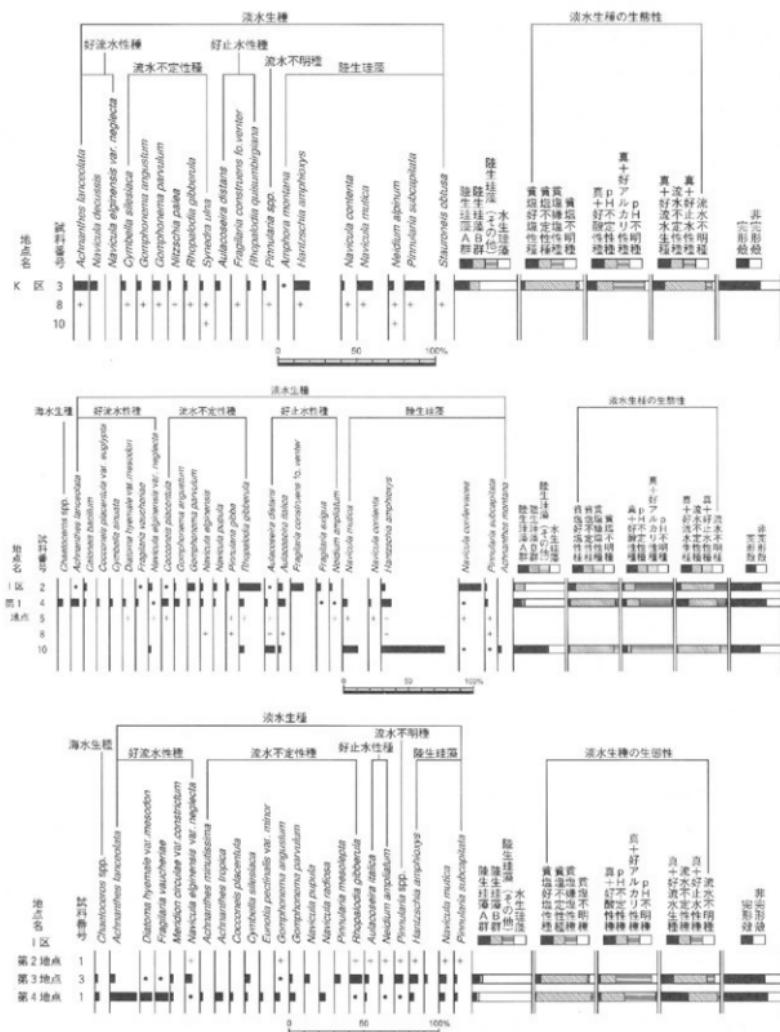
### 1) 堆積環境について

K区の繩文時代晚期から弥生時代前期の砂質シルト層（試料番号3）からは陸生珪藻を主体として好流水性種と好止水性種を伴う珪藻化石群集が認められた（第13図）。このように好流水性種と好止水性種、水生珪藻と陸生珪藻など相反する生態性を示す種群が同一に産出する場合は混合群集と考えられる。この特徴として最も重要な要素は流水に対する適応性で相反する種群（好流水性種と好止水性種）が認められることで、次に産出した分類群の数が多いことやそれぞれの種の産出率がいずれも高くないこと等が挙げられる。本試料の場合、陸生珪藻が特徴的に認められることから、基本的には乾いた場所であったと思われるが、周囲から氾濫などによる流れ込みの影響を少なからず受けているものと考えられる。

I区第1地点では各層によって珪藻化石群集の組成が異なっていることから、各層毎に群集の特徴と推定される水域環境を述べる（第13図）。最下位の疊混じり黒褐色粘土質シルト層では陸生珪藻が多産し、その占める割合は全体の68%であり、乾いた場所を指標とする△群に属する種群が90%以上を占めている。したがって、本層の堆積時は乾いた裸地のような環境であり、水の影響を受けにくかったと推定される。試料番号8と試料番号5からは珪藻化石の産出率が低いが、産出した種をみると陸生珪藻が卓越することから、乾いた環境であった可能性がある。試料番号4は好流水性種と好止水性種が共にある程度の産出率を示し、個々の種の産出率が全体にばらついていることから典型的な混合群集とみられる。ただし、本試料の場合、好止水性種および陸生珪藻など比較的静穏な環境下に生育する種群が多い。したがって、本層堆積時は乾いた場所も多く存在する湿地から沼沢地のような環境であったと思われるが、河川等からの水の流れ込みの影響も大きいものと推定される。上位の4層はテフラ分析の結果、A.D.915年に十和田カルデラより噴出したTo-aを小ブロック状に含むことから、A.D.915年以降の堆積層と考えられる。この層位の特徴は好止水性種および好塩性種が卓越する点である。したがって、本層準堆積時は沼沢地から湿地のような環境であったが、水の出入りが少ない停滞水域であり、水中の塩類濃度が高くなる状況であった可能性が高い。本地点の弥生時代前期末葉から中期初頭の水田層とされる褐灰色粘土層からは珪藻化石の産出率が低く、種毎の産出率もばらつくが、ほとんどは流水不定性種、好止水性種および陸生珪藻からなる。

以上のことから、本地点は基本的に湿地のような環境であったと推定されるが、乾いた場所も多く存在するような場所であった可能性がある。なお、産出率が低いのは一般的には堆積時に好気的環境下であったために、殻の分解が促進されたためと考えられている。

第3地点の殻を形成する土壤では、産出した種の生態性別にみた種構成と個々の種の産出率が全体にばらついている（第13図）。このような種群の特徴も典型的な混合群集である。本地点の場合、陸生珪藻に加えて好止水性



第13図 K区・I区(第1地点～第4地点)主要珪藻化石群集の変遷

各種産出率・完形殻出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基準として相対頻度で表した。いずれも化石総数が100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満は、-は産出個体数100個体未満の試料における産出を示す。

の種がやや卓越することから、

好気的な部分の多い湿地～沼沢地のような環境であったと考え

られるが、周囲から水の流れ込みの影響も大きい場所であったと推定される。

第4地点の試料は水田に伴う水路と推測されている遺構の埋

植物であるが、好流水性種が多産することが特徴である（第13回）。流水性種を除けば他の種群は流水不定性種を主として隣

生珪藻等も含むやや混合型の群集といえる。多産した好流水性種は *Achnanthes lanceolata* と *Meridion circulae var. cons. trictum* 等の中～下流性河川指標種群（安藤 1990）に属する種群である。中～下流性河川指標

種群とは、すなわち河川沿いに

河段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などの地形が見られる部分に集中して出現し、他の地域には出現しなかったり、出現しても主要でないことから、この地域の環境を指標する可能性が大きい種群とされる（安藤 1990）。これらのことから遺構埋植物は流水の影響によって堆積した可能性が高い。

## 2) 古植生について

縄文時代晚期から弥生時代前期の試料では花粉化石がほとんど検出されなかったため、この時期の古植生に関する資料を得ることはできなかった（第1表）。そこで1区第1地点の弥生時代前期末から中期初頭の水田層と推測されている層位からTo-a降灰層位で得られた花粉化石の種類について、本遺跡周辺地域の潜在自然植生との比較・検討を行う。

潜在自然植生では低地部はオニスゲ・ハンノキ群集のような湿地林の分布域である（宮崎他 1987）。また、平野から標高300m内外の丘陵地帯は、暖温帶性の落葉広葉樹と冷温帶性の落葉広葉樹の推移帶にあたり、いわゆる中間温帶林としてのモミ・イヌブナ群集はかが分布する。さらに上流の山地帯では、ブナに代表される冷温帶性落葉広葉樹林が分布する。今回検出された花粉化石の多くは、中間温帶林または冷温帶性落葉広葉樹林の構成要素であり、丘陵地帯から山地帯の潜在自然植生と調和的である。本遺跡は河川沿いに発達した谷状の沖積低地であるため、得られた花粉化石は後背地の植生を反映しているものと思われる。一方、現存自然植生調査の結果

表1 花粉分析結果

種類	地点 試料番号	K区			I区 第1地点					I区 第2地点			I区 第3地点		
		3	8	10	2	4	5	8	10	1	2	3			
<u>木本花粉</u>															
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	-	-	-	
ツケ属	-	-	-	-	-	-	6	10	-	7	2	-	-	-	
トウヒ属	-	-	-	-	-	1	1	6	-	1	-	-	-	-	
マツ属	1	-	-	-	-	2	4	7	-	2	-	-	-	-	
スギ属	-	-	-	-	1	-	-	2	-	1	-	-	-	-	
クマシデ属・アサ属	-	1	-	-	2	-	-	2	-	1	-	-	-	-	
カバノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	1	-	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	2	3	3	5	1	4	-	-	-	-	
コナラ属・コナラ耶属	-	-	-	-	4	2	-	2	-	-	-	-	-	-	
コナラ属・アカガシ垂属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<u>草本花粉</u>															
イネ科	-	-	-	-	3	9	3	-	-	2	2	-	-	-	
カヤソリグサ科	-	-	-	6	2	-	-	-	-	2	1	-	-	-	
サナエチテ属・ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ナデシコ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
オナモ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タンボク科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<u>不明花粉</u>															
不明花粉	1	1	-	-	5	3	2	8	8	5	-	-	-	-	
シダ類胞子	5	-	-	-	51	173	61	16	1	25	26	-	-	-	
合計															
木本花粉	1	2	1	10	10	15	39	1	18	2	-	-	-	-	
草本花粉	1	0	0	9	12	3	0	0	4	4	-	-	-	-	
不明花粉	1	1	0	5	3	2	8	8	5	0	-	-	-	-	
シダ類胞子	5	0	0	51	173	61	16	1	25	26	-	-	-	-	
総計(不明をのぞく)	7	2	1	70	195	79	55	2	47	32	-	-	-	-	

(宮脇、奥田 1987) では、遺跡の立地する低地部は開発が進んで、ウリカワーコナギ群集やサジョモダカ群集といった水田雜草群落に変化しており、ハンノキ林は山野との縁辺部にわずかに残るのみである。辻ら (1983) は千葉県の村田川流域における研究で、イネ出現開始とほぼ同時に多少遅れてハンノキ属の花粉が急減する傾向について、低湿地利用のための人間による湿地林の破壊を示唆するとしている。

今回は統計的に扱えるだけの花粉化石が得られなかつたため、出現率の変化から本遺跡周辺の森林植生変遷を捉えることはできなかつた。今後の低地部の調査において、花粉化石の保存の良好な試料が得られれば、本遺跡周辺地域の人間活動とそれによる植生変化について明らかにできることが期待される。一方、本遺跡周辺のイネ科植生については、縄文時代晚期および弥生時代前期より To-a 降灰層位までイネ属の産状を除いて大きな組成の違いは認められず、タケアシ科やウシクサ族・ヨシ属などのイネ科植物が生育していたのであろう。しかし、堆積物が氾濫堆積物と考えられることから、これら植物珪酸体は二次的に混入した可能性がある。

#### 第4節 稲作の消長について

K区の縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物包含層中からは僅かながらイネ属の植物珪酸体が検出された(第14図)。また、I区第1地点のTo-aを含む層位からはイネ属が高率に検出される。さらに弥生時代前期末から中期前半の水田層と推測されている粘土層や歯を形成する土壤層からも僅かに検出される(第14図)。

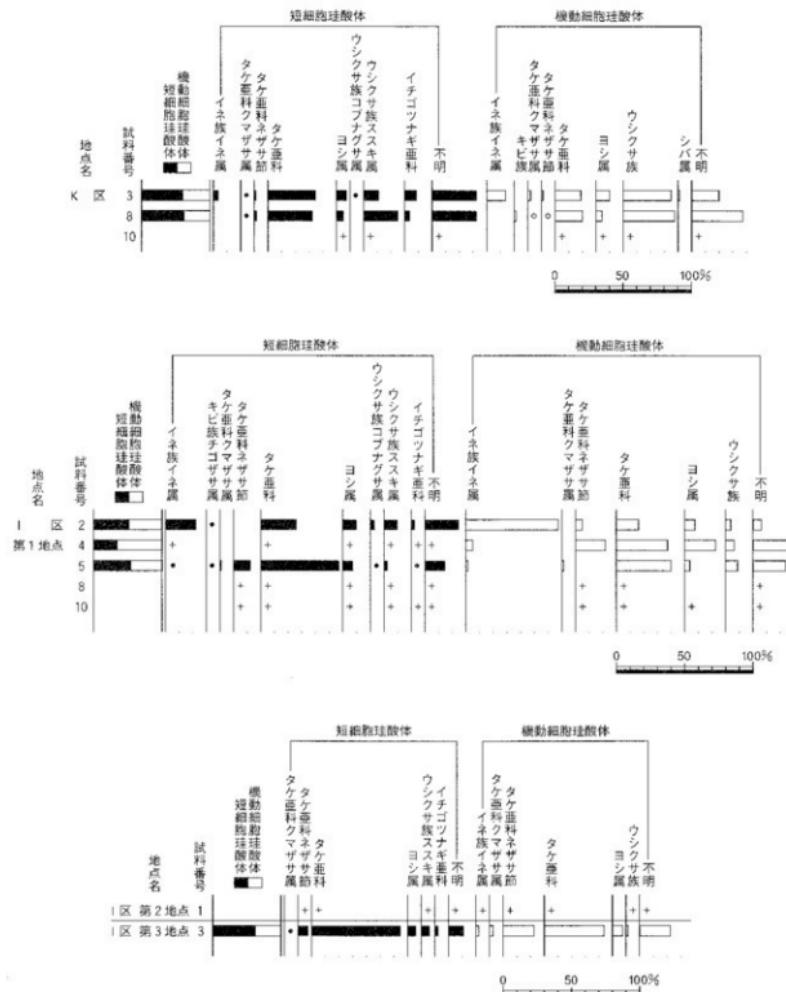
珪藻化石の産状から、K区の縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物包含層は氾濫堆積物と判断され、縄文時代晚期から弥生時代前期の層位に含まれるイネ属は他の場所から二次的に混入した可能性があり、本地点で当時稻作が行われていたと判断することは難しい。

I区第1地点ではTo-aを挟む灰褐色砂質シルトでイネ属が多産した。とくに機動細胞珪酸体の出現率は60%を越え、現在の水田耕土(イナワラ堆肥を500kg/10a/年の割合で8年間連用)の表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示す調査例(近藤 1988)と比較しても著しく高い。本層は珪藻化石の産状から停滞水域と推測され、氾濫などによる擾乱の影響は考えにくい。この堆積環境を考慮すれば、本層堆積時には本遺跡周辺で稻作が行われていた可能性がある。ただし、本層の上位では近・現代に水田耕作が行われ、上位からの落ち込みが考えられることや発掘調査により水田遺構を示唆する柱跡などが確認されていない。そのため、今後の発掘調査所見を考慮して改めて検討しなければならない。

弥生時代前期末から中期初頭の水田跡ではないかと推測されるI区第2地点・第3地点でもイネ属の植物珪酸体は検出される(第14図)。しかし、その出現率はきわめて少ないために、この地点で稻作が行われていた可能性は少ない。また、水田層とされる第2地点では珪藻化石の産状が悪いために、堆積環境を推定することは難しいが、該部の第3地点の珪藻化石の産状より周囲からの流れ込みが考えられるため、検出されたイネ属は異地性のものなのかもしれない。この点については、さらに水田層を対象にして面的な分析調査を行って検証を続けたい。

#### 第5節 第3号竪穴住居跡の<sup>14</sup>C年代測定結果について

測定結果は1,560±120y.B.P. (A.D.390) (Gak-19073) であり、第3号竪穴住居構築時期とされる弥生時代前期末から中期初頭としては、やや新しい年代を示す。



第14図 K区・I区(第1地点～第4地点)植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉部機動細胞で100個未満の試料で検出された種類を示す。

## 第6節 総 括

分析調査課題のひとつである縄文時代晩期頃の古植生復元については、花粉化石の保存状態が悪いために、今回には詳細に検討することができなかった。ただし、試料中にわずかながら保存される花粉化石の種類と東北地方の潜在自然植生から本遺跡周辺地域の古植生の概略は捉えることはできた。花粉化石の保存状態が悪い原因は、今回の調査区が河岸段丘上に立地し、好気的環境下で堆積したために花粉化石が保存されにくかったと考えられる。今後当該期の古植生を検討・復元するためには、花粉化石が比較的良好に保存される低地堆積物（泥炭層など）が有効であり、低地の調査が実施された際に堆積物を採取して分析調査を試みたいと考えている。

弥生時代前期末から中期初頭の稻作については、堆積物中にイネ属が検出されるものの、周囲からの混入の可能性があり、調査区内で稻作が行われていたと考えることは難しい。なお、今回はトレンチ調査による限られた範囲での結果である。今後の発掘調査で広い範囲で面的に遺構の検出状態を明らかにした上で同様の分析調査を応用し、改めて稻作について考えていく。また、To-a降灰層位からはイネ属が高率に検出されたが、発掘調査では疊群などが検出されていない。この点は層相の検討結果を考慮して評価する必要があり、今後の課題である。

## 参 考 文 献

- 安藤一男 1990 淡水産苔類による環境指標種群の設定と古環境復元への応用  
東北地理 Vol.42 pp.73-88 (aN. Tohoku Geogr. Assoc.)
- 近藤鍊三 1988 十二遺跡の植物珪酸体分析  
銅鏡屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書  
pp.377-383 (御代田町教育委員会)
- 町田 洋、新井房夫 1992 火山灰アトラス p276 (東京大学出版会)
- 宮脇 昭、藤原 一絵、中村幸人、大野啓一、村上雄秀、鈴木伸一 1987 東北地方の潜在自然植生図  
日本植生誌 東北 (至文堂)
- 宮脇 昭、奥田重俊 1987 東北地方の現存植生図 日本植生誌 東北 (至文堂)
- 辻誠一郎、南木時彦、小池裕子 1983 縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として—  
第四紀研究 22 pp.251-266

付表 1 山王圃遺跡出土土器觀察表(1)

### Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (1)

付表1 山田四遺跡出土土器觀察表(2)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (2)

遺跡名	出土地点	地	標	量	形	特	表面	山陽局の分類	主文化様の特徴	幾文・着目部姿の特徴	施	考	区分	参考文献
61 K-AS58	ピット187	埋	土	器	Ⅲ	直	平底口縁	1・無文(ナガ)、直	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-6	12-1-1	
65 K-AS58	ピット187	埋	土	器	Ⅲ	直	平底口縁	1・円筒腹鼓、直	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-7	12-2-2	
63 K-AS58	ピット189	埋	土	器	Ⅲ	直	平底口縁	1・直筒腹鼓、直	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-8	12-1-2	
64 K-AS58	ピット190	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-9	12-1-5	
65 K-AS58	ピット192	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-10	12-1-6	
66 K-AS52	ピット196	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-11	12-1-7	
67 K-AB54	ピット200	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-12	12-1-8	
68 K-AS55	ピット200	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-13	12-1-9	
69 K-AS56	ピット202	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-14	12-1-10	
70 K-AS56	ピット204	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-15	12-2-2	
71 K-AS57	ピット205	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-16	12-2-3	
72 K-AS58	ピット206	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-17	12-2-1	
73 K-AS58	ピット214	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-18	12-2-2	
74 K-AS59	ピット216	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-19	12-2-4	
75 K-AS59	ピット217	埋	土	器	Ⅲ	直	直筒腹鼓、直	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-20	12-2-6	
76 G-BF6	包合層	2	地	標	Ⅲ	直	直筒腹鼓	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-21	12-2-7	
77 E	包合層	9	地	標	Ⅲ	直	直筒腹鼓	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-22	12-2-8	
78 F	包合層	10	地	標	Ⅲ	直	直筒腹鼓	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	6-23	12-2-10	
79 G	包合層	11	地	標	Ⅲ	直	直筒腹鼓	1・直筒、直文(ナガ)	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-1	12-2-9	
80 J-BC57	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-2	12-2-11	
81 P-BD58	包合層	8	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-3	12-2-12	
82 P-BD58	包合層	8	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-4	13-1-2	
83 P-BC58	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-5	13-1-3	
84 H	包合層	8-9	地	Ⅰ期	直	盤	平底口縁	1・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-6	13-1-4	
85 H	包合層	8-9	地	Ⅰ期	直	盤	平底口縁	1・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-7	13-1-4	
86 G	包合層	10	地	Ⅰ期	直	盤	平底口縁	1・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-8	13-1-7	
87 G	包合層	10	地	Ⅰ期	直	盤	平底口縁	1・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-9	13-1-8	
88 I	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-10	13-1-5	
89 I	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-11	13-1-6	
90 J-BC49	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-12	13-2-1	
91 J-BD50	包合層	9-11	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-13	13-2-2	
92 J-BD50	包合層	9-11	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-14	13-2-3	
93 J-BD50	包合層	9-11	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縁文・直	山形手縁文・直	化物	7-15	13-2-5	
94 J	包合層	11	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-16	13-2-6	
95 I	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-17	13-2-4	
96 J-EN49	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-18	13-2-7	
97 J	包合層	6-7	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-19	13-2-9	
98 J-EN49	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-20	13-2-8	
99 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-21	14-1-1	
100 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-22	14-1-2	
101 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-23	14-1-3	
102 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-24	14-1-9	
103 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	7-25	14-1-5	
104 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-1	14-1-3	
105 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-2	14-1-4	
106 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-3	14-1-6	
107 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-4	14-1-7	
108 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-5	14-1-8	
109 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-6	14-1-10	
110 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-7	14-1-11	
111 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-8	14-2-1	
112 K	包合層確認面	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-9	14-2-3	
113 K-AS	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-10	14-2-3	
114 K-AR29	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-11	14-3-4	
115 K-AR58	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-12	14-2-5	
116 K-AR	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-13	14-2-6	
117 K-AR156	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-14	14-2-8	
118 K-AR56	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-15	14-2-7	
119 K-AR59	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-16	15-1-1	
120 K-AR	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-17	15-1-3	
121 K-AR	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-18	15-1-2	
122 K-AR56	包合層	9	地	Ⅰ期	高	杯	—	Ⅱ・直筒腹鼓	山形手縊文・直	山形手縊文・直	化物	8-19	15-2-5	

付表1 山王町跡出土土器観察表(3)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (3)

標体No.	出土地点	通	標	番位	時	期	器種	口縁部の特徴	土質文様の特徴	両面・表面調査の特徴	備考	図版No.	写真No.	
123	K-AR56	包含層			第Ⅲ期		高杯	V	直線文	直線文 (V), 平行・横文 (V)	直線文 (V), 平行・横文 (V)	9.2	15.2.4	
124	K-AIG57	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		鉢	手延の縁	平行・横文, 平行文	直線文 (V), 平行・横文 (V)	直線文 (V), 平行・横文 (V)	9.3	16.1.6	
125	K-AR58	包含層			第Ⅳ期		畫	手延の縁	直線文 (V), 平行文	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.4	15.3.3	
126	K-AA1	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		鉢	手延の縁, 突起 (A) (B)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.5	15.2.3	
127	K-AA2	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		鉢	手延の縁, 突起 (A) (B)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.6	16.1.1	
128	K-AA3	包含層			第Ⅳ期?		鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.7	16.1.5	
129	K-A165	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		深鉢	手延の縁, 突起 (A) (B)	平行・横文, 平行文	直線文 (V), 平行・横文 (V)	直線文 (V), 平行・横文 (V)	9.8	15.2.1	
130	K-AR66	包含層			晚Ⅳ期		高杯	山形の縁?	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.9	16.1.3	
131	K-AR66	包含層			晚Ⅳ期		高杯	山形の縁 (直線文)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.10	16.1.4	
132	K-AR56	包含層			晚Ⅳ期		高杯	山形の縁 (直線文)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.11	16.2.2	
133	K-AR59	包含層			晚Ⅴ期		鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.12	16.2.1	
134	K-AR56	包含層			晚Ⅴ期～Ⅵ期		高杯	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.13	16.1.1	
135	K-A169	包含層			晚Ⅳ期		高杯	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	9.14	16.2.3	
136	K-AR56	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.1	16.2.4	
137	K-AR57	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.2	17.1.1	
138	K-AR56	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.3	17.1.2	
139	K-AA3	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.4	17.1.4	
140	K-AR56	包含層			晚Ⅳ期		浅鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.5	17.1.6	
141	K-A169	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.6	17.1.3	
142	K-A169	包含層			晚Ⅳ期		浅鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.7	17.1.5	
143	K-A169	包含層			晚Ⅳ期		浅鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.8	17.1.7	
144	K-AT59	包含層			晚Ⅳ期		鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.9	17.2.1	
145	K-AA5	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		畫	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.10	17.2.2	
146	K-AR59	包含層			晚Ⅳ期		畫	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.11	17.2.3	
147	K-AR56	包含層			晚Ⅳ期		浅口	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.12	17.2.4	
148	K	渡瀬畠山地			晚Ⅳ期～Ⅴ期		便	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.13	17.2.5	
149	K	渡瀬畠山地			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.14	17.2.6	
150	K	渡瀬畠山地			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁 (V)	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	10.15	17.2.7	
151	F-A260	第1号古墳群			晚Ⅳ期		鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.1	6.2	
152	G-BE51	第1号古墳群			第Ⅱ期		画		D・W	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.2	6.2
153	G-BH50	第1号古墳群			第Ⅱ期		画		D・W	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.3	6.4
154	K-A166	U' - 209	埋	上	晚Ⅳ期		高杯	-	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.4	17.2.4	
155	K-AS51	ビ' - 166	埋	上	第Ⅲ期		高杯	-	平行文	平行文 (V)	平行文 (V), 平行文 (V)	平行文 (V), 平行文 (V)	11.5	6.5
156	U-AW72	包含層	2		晚Ⅳ期		畫	山形の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.6	6.3	
157	C-JIIS	第2号古墳	覆	上	第Ⅳ期		鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.7	6.6	
158	G-RG5	包含層	9	上	第Ⅳ期		高杯	-	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.8	6.7	
159	K-AS57	包含層			晚Ⅳ期		畫	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.9	6.8	
160	K-AS56	包含層			晚Ⅳ期		鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.10	6.2	
161	K-AA1	包含層			晚Ⅳ期～Ⅴ期		便	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.11	5.4	
162	K-AS50	包含層			第Ⅳ期		畫	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	11.12	5.6	
163	K-AS57	包含層			第Ⅳ期		(画)	-	平行文 (V)	平行文 (V), 平行文 (V)	平行文 (V), 平行文 (V)	11.13	5.8	
164	K-AR53	第1号古墳	(画)		晚Ⅳ期		手延口縫	-	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	12.1	7.2	
165	K-AR51	包含層			晚Ⅳ期		深鉢	手延の縁	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	12.2	8.5	
166	G-BD52	第1号古墳上塗			深鉢	手延の縁 + 壁起	手延の縁	-	直線文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	直線文 (V), 平行文 (V)	12.3	6.3	

凡例：1.「山形」の物は既生代で、既死代を示す。

2.「主要文様の特徴」の「I～V」は、本文中の文様類の区分と対応する。

3.「備考」の補遺孔は焼成後の、穿孔は焼成前のものを示す。

付表2 山王町跡出土十石器観察表

Attribute list of Iiagi ware from the Sanno-gakoi site

標体No.	出土地点	通	標	番位	時	期	器種	西面調査の特徴	計測値(推定)	備考	図版No.	写真No.
167	A-AB84	第1号古墳北側	覆	土	7C末～8C前半		杯	キシナフ (V)	口徑 (12.2cm)		12.4	7.3
168	A-AB84	第1号古墳北側	覆	土	7C末～8C前半		杯	タコナフ (V)	口徑 (12.8cm)		12.5	8.3
169	A-AB84	第1号古墳北側	覆	土	7C末～8C前半		杯	コロナフ (V)	口徑 (12.8cm)		12.6	7.2
170	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半		画	直線文 (V)	口徑 (10.4cm)		12.7	8.4
171	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半	台付型	カスミナフ (V)	口徑 (10.4cm)			12.8	7.6
172	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半	画	不明明瞭 (内) 不明瞭	口徑 (11.6cm)			12.9	7.4
173	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半	画	直線文 (V)	口徑 (11.6cm)			12.10	7.5
174	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半	画	直線文 (V)	口徑 (11.6cm)			12.11	8.2
175	C-UD75	ビ' - 9	埋	土	7C末～8C前半	画	直線文 (V)	口徑 (11.6cm)			12.12	6.3

付表3 山王岡遺跡出土陶器観察表

Attribute list of ceramic ware from the Sanno-gakoi site

個体名	出土地点	地 備	層位	時 用	器種	表面要綴の特徴				計測値(推定)	考 号	測定値	写真号
						種類	上側一見	下側一見	側面一見				
176	○ 第2号調跡	堆 土	14C		板 紋	上側一見: ラメナード、下側一見: T字彫	側面一見: ラメナード、側面後: マコナード			口径: 34.0mm	在地番	12-13	8-5

付表4 山王岡遺跡出土石器観察表(1)

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (1)

No.	器種	出土場所	層位	度	石 材	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重 量(g)	備 考	図版号	写真号	
1	石器	C-AX74	ビト3		堆土2	Sh	18.2	11.9	4.6	0.72	破損	13-1	18-14
2	石器	C-BD25	ビト9		堆土1	Ja1	26.6	9.6	4.8	0.73	破損	13-2	18-7
3	石器	D-AZ72	第4号調跡		堆土1	Ja2	26.6	14.5	8.2	2.03	破損	13-3	18-11
4	石器	D-AZ72	第4号調跡		堆土1	Ja2	20.0	9.9	3.3	0.39		13-4	18-2
5	石器	E-BG60	ビット		Sh-Tc	25.9	7.7	5.8	0.70	破損	13-5	18-13	
6	石器	E-BG51			Obs	15.4	1.5	3.8	0.43		13-10	18-18	
7	石器	F	第3号空穴住居跡		冰面	Ja7	21.5	13.9	7.6	1.38	平面凸		
8	石器	F	第2号空穴住居跡			Ja2	26.2	10.5	4.8	0.86		13-20	18-10
9	石器	F-BG57			6a	Sh	24.3	12.4	7.0	1.63		13-6	18-20
10	石器	F-BG57			9	Ja2	23.8	7.0	3.3	0.43		13-8	18-5
11	石器	F-BG57	第4号調跡			Ja2	16.8	8.7	3.6	0.29	破損		
12	石器	F-BG57	第2号空穴住居跡		面十	S3 Sh	37.1	10.0	6.6	2.54	破損	13-7	18-18
13	石器	G	第2号調跡			Obs	27.8	12.4	4.0	1.96	破損	13-9	18-19
14	石器	I				Sh	28.6	16.8	7.3	3.50		13-14	18-20
15	石器	I				Ja2	29.0	15.6	8.2	3.67			
16	石器	I-BD50				Ja2	22.1	9.8	4.5	0.61		13-13	18-6
17	石器	I-BH49				Ja2	18.6	13.8	5.6	0.90		13-12	18-3
18	石器	K-AI50	包合層			Ja2	18.9	10.2	4.4	0.55	缺損		
19	石器	K-AR52	包合層			Sh-Tc	23.6	11.3	4.5	0.76	破損		
20	石器	K-AR54	包合層			Ch	27.8	8.6	3.6	0.30		13-25	18-9
21	石器	K-AR55	包合層			Sh	24.1	15.3	2.8	0.85	破損	13-24	18-23
22	石器	K-AR56	包合層			Ja	15.6	11.6	3.6	0.37	破損		
23	石器	K-AR56	包合層			Sh	24.0	11.8	7.6	1.43	付着物有	13-18	18-21
24	石器	K-AR56	包合層			Sh	39.7	12.6	6.5	2.96		13-21	18-17
25	石器	K-AR57	包合層			Sh	28.2	17.8	4.0	1.37		13-23	18-24
26	石器	K-AI57	包合層			Ja2	16.9	6.5	3.8	0.68		13-15	18-18
27	石器	K-AR58	包合層			Sh	22.4	13.0	4.6	0.79		13-11	18-4
28	石器	K-AR58	包合層			Sh	25.0	12.4	4.0	0.72	破損		
29	石器	K-AI59	包合層			Ja2	16.2	16.1	4.0	0.75		13-19	18-16
30	石器	K-AI59	包合層			Ja2	13.6	8.3	4.2	0.44		13-16	18-1
31	石器	K-AI59	包合層			Sh	27.0	10.5	5.7	1.30			
32	石器	K-AS54	包合層			Ch	22.0	8.5	3.3	0.47	破損		
33	石器	K-AS57	包合層			Ja2	21.6	13.7	4.2	0.76			
34	石器	K-AS57	包合層			Ja2	30.0	11.2	6.6	1.38		13-22	18-23
35	石器	K-AS57	包合層			Ja2	30.7	11.8	5.6	0.81	破損		
36	石器	K-AS59	包合層			Sh	22.8	10.7	4.9	0.82		13-17	18-8
37	石器	F-BAS7			II	Ja2	34.3	13.9	7.0	3.09			
38	石器	G-AR57	包合層			Sh	44.7	31.0	10.0	13.62		13-26	18-1
39	石器	K	包合層			Sh-Tc	50.3	28.5	8.9	4.63		13-29	18-2
40	石器	K-AR59	包合層			Sh	18.6	16.0	8.4	1.87			
41	石器	?				Sh	53.2	26.9	9.3	8.80		13-27	18-4
42	橢円形石器	K-AS56	包合層			Sh	44.0	19.2	12.3	9.75		13-28	18-3
43	不定形石器	K-RM61	ビット49		埋土1	St	42.1	35.0	12.6	13.79			
44	石刀	E-BG61	ビット33		埋土1	St	52.1	37.2	7.8	10.48	破損		
45	石刀	K				St	11.5	31.6	22.8	133.83	破損	13-30	18-31
46	石刀	K-AI59	包合層			St	10.6	34.4	12.6	79.22	破損	14-31	18-32
47	石刀	K-AI59	包合層			St	77.4	34.2	9.2	24.13	破損		
48	石斧	K-AR67	包合層			St	94.0	20.4	13.6	35.24	破損		
49	鉄鋸刃	F-BG27			6b	St	69.8	43.8	15.8	53.85	破損	14-32	18-34
50	帶製石斧	E-D-00				Tu-Sa-Sh	137.0	39.6	28.7	237.04	破損	14-34	18-30
51	參製石斧	G				St-Sa-Sh	66.5	49.6	31.6	156.00			
52	參製石斧	G-BG61	第2号調跡		埋土1	St-Sa	114.5	41.8	28.0	197.07		14-35	18-29
53	參製石斧	K-AR69	包合層			Stor	61.3	32.4	17.7	41.58		14-33	18-28
54	打製石斧	P	第2号空穴住居跡			Da	150.6	65.6	28.0	124.92		15-37	18-26
55	打製石斧	G	第2号調跡			Sh	121.2	82.4	39.0	427.80		14-36	18-27

付表4 山王廬遺跡出土石器観察表(2)

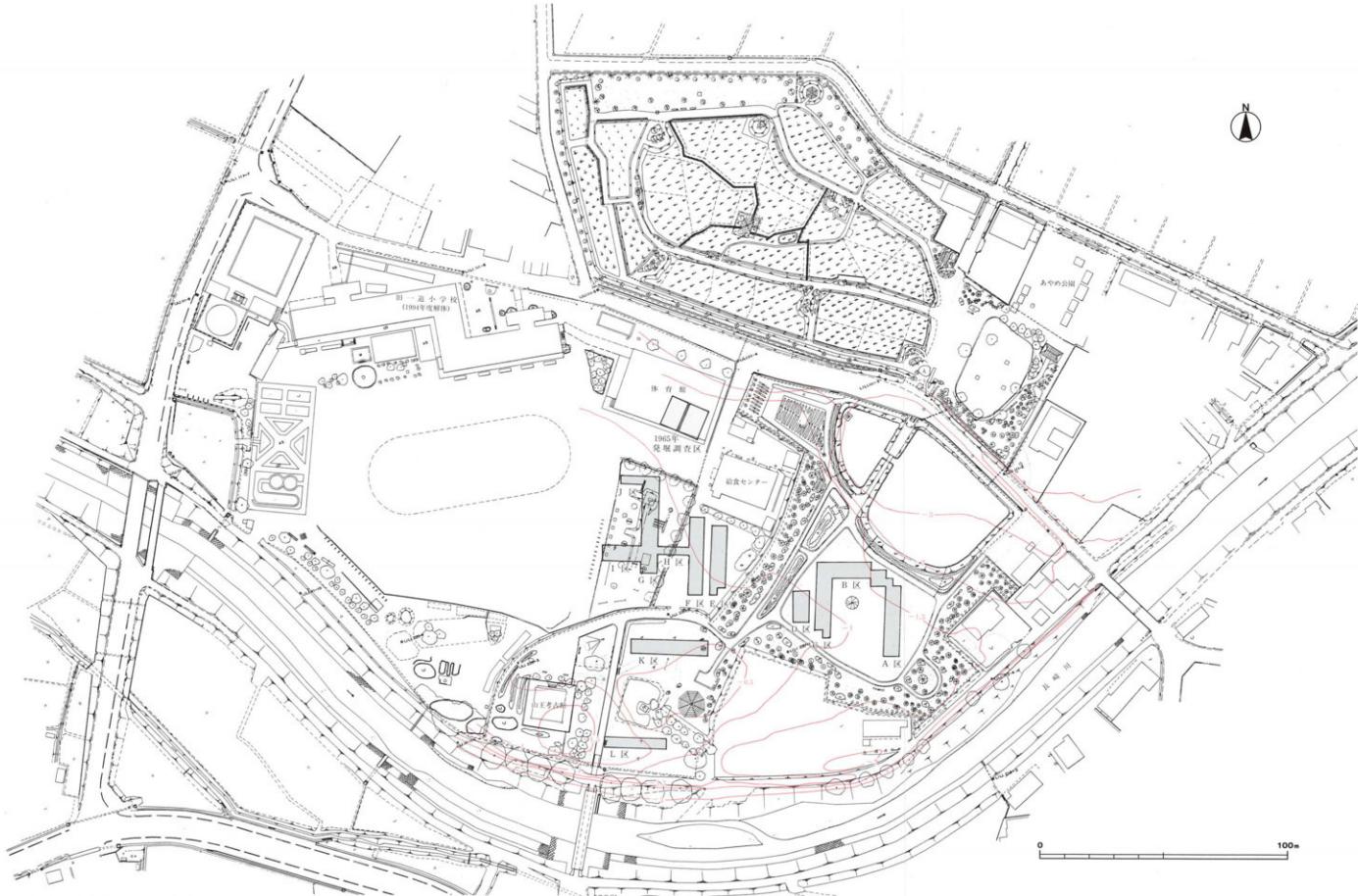
Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (2)

No.	種	出土場所	層	番	位	石	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	備 考	回収地	等級	
56	斧	H				理土1	Da-Tu	115.0	72.0	32.7	429.80			
57	円盤状石製品	C-AZ74	ピット3			理土1	And	59.4	57.2	12.0	52.50	15-38	18-36	
58	円盤状石製品	K	直構造出面				Da	50.7	48.6	14.4	39.32			
59	円盤状石製品	K-AZ57	台面裏				Sa-Tu	67.8	27.0	14.3	106.86			
60	円盤状石製品	K-AZ58	台面裏				Sa-Sh	60.9	56.0	14.9	66.39	15-39	18-37	
61	円盤状石製品	K-AZ59	台面裏				Da	54.8	54.0	17.0	84.49			
62	円盤状石製品	K-A550	台面裏				Da-Tu	57.6	52.9	18.5	93.74			
63	敲石	El					Da	130.0	92.5	54.4	1053.30			
64	敲石	R-A224	ピット24				Da	128.3	88.9	38.8	667.00			
65	鉄石	F	第2号堅穴住居跡				Da	82.6	72.0	33.7	437.90	15-45	19-16	
66	鉄石	F	第3号堅穴住居跡				Da	77.8	67.1	27.1	194.63	16-47	19-15	
67	鉄石	F-AZ57	ピット46				Tu-Sa	100.6	61.9	72.6	669.80			
68	鐵石	G		10			Da	87.0	74.6	42.1	380.00			
69	鐵石	G	第2号溝跡				And	130.8	115.6	69.0	1706.20			
70	鉄石	G-BD81		10			Da	10.2	95.8	68.0	932.10			
71	鉄石	H-BG55	ピット221	堆土1			Da	143.8	81.9	54.0	859.10	15-43	19-13	
72	鉄石	H-BP56	ピット101	堆土1			Da	119.6	37.0	47.1	465.50	受熱	15-42	19-12
73	鉄石	K					Da	80.0	64.8	44.2	278.00			
74	鉄石	K-A156	包含層				Da	125.4	92.7	39.3	667.00			
75	磨石・鉄石	K-AS51	ピット156	理土1			Da	93.5	79.9	46.0	491.60	18-46	19-11	
76	磨石・鉄石	F					Da	129.0	76.2	40.7	545.50			
77	磨石・鉄石	F		9			Da	88.3	77.7	35.0	360.20			
78	鉄石	F	第2号堅穴住居跡				Da	94.5	92.3	62.9	683.20	15-44	19-14	
79	磨石・鉄石	F-BD89	ピット47	堆土1			Da	97.4	84.1	35.9	618.30			
80	磨石・鉄石	G-BM52	ピット75	堆土1			Da	122.9	95.8	47.2	784.90			
81	磨石	R-RA61		9			Da	72.1	54.7	34.1	609.80	受熱	15-41	19-10
82	磨石・鉄石	F-AZ57	ピット46	堆土1			Da	63.3	64.9	36.8	942.80	受熱		
83	磨石・鉄石	H-BG55	ピット221	堆土1			Da-Tu	103.1	78.6	46.5	331.30			
84	磨石・同石	K-AR87	包含層				Da	110.3	81.4	62.1	742.10			
85	石皿	D-AW71	ピット42	堆土2			Da-Tu	125.0	63.2	55.4	366.70	破損		
86	石皿	F-BG57					Pum	93.0	73.4	32.0	104.30	破損		
87	右臼	F-DC56		9			Da-Tu	165.1	146.1	73.2	1850.00			
88	石皿	K-AS46	直構造出面				Da-Tu	349.0	321.0	108.0	11200.00	受熱、破損	17-52	19-20
89	石臼	F-AZ57	ピット46	堆土1			And	343.0	256.0	87.0	9000.00		16-50	19-19
90	四石	F-AY57		9			And	196.0	177.0	80.0	4000.00		16-49	19-17
91	右臼	H-BG59	ピット151	堆土1			Da	136.0	145.0	84.5	2916.30		16-48	19-18
92	右鍬	F-BP57	P11	理土1			Da	68.0	45.4	15.0	50.25		15-40	19-32
93	圓筒	K-AR87	包含層				Da	113.0	40.5	10.3	55.86		16-51	19-33
94	石核	E-BG50		9			Su	32.4	69.0	27.5	57.76		17-55	19- 5
95	石核	F		65			Su	87.4	75.9	32.6	292.50		17-57	19- 9
96	石核	F	第2号堅穴住居跡				Ja3	48.2	45.7	46.0	135.48		17-53	19- 6
97	石核	K	包含層				Ja2	27.2	42.5	18.4	20.88			
98	石核	K-AR87	包含層				Ja2	60.0	46.6	31.6	104.53		17-56	19- 8
99	石核	K-AR89	包含層				Su-Tu	35.5	57.2	25.8	68.77		17-54	19- 7
100	石核	K-A150	包含層				Su	34.0	26.6	31.0	22.02			

右臼名称の番号は次の通りである。

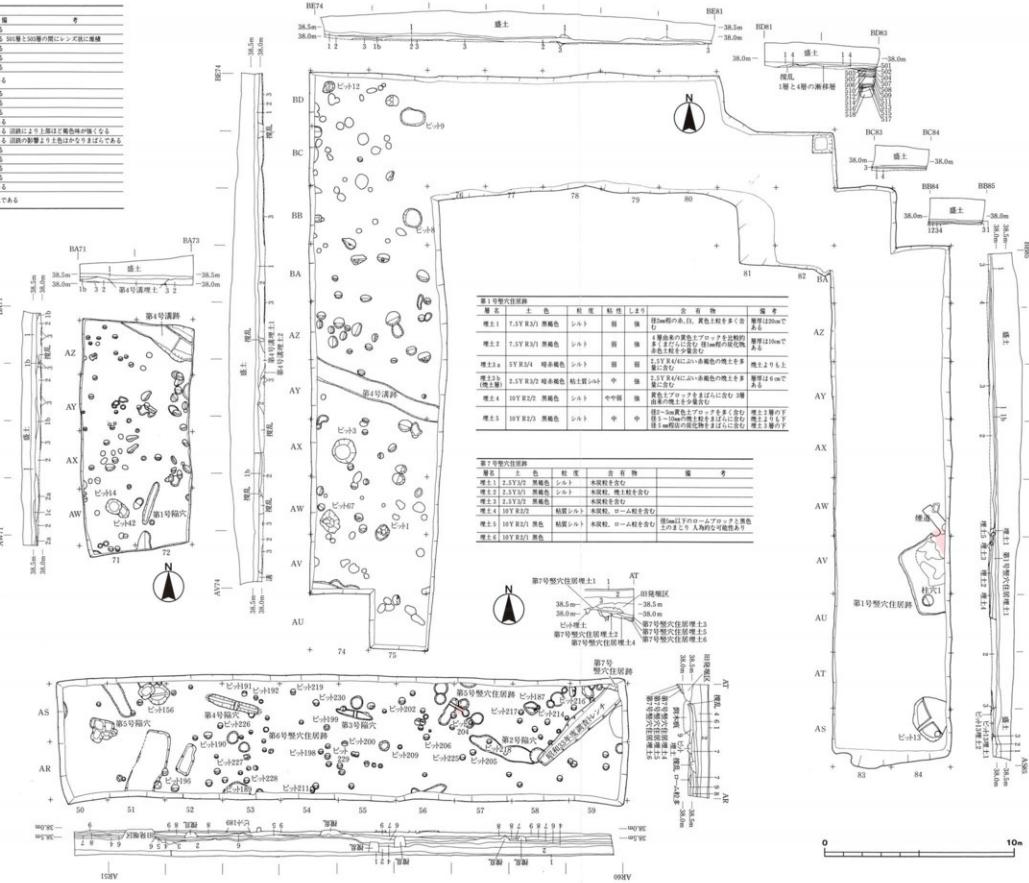
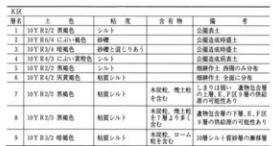
Se: 砂岩 Sh: 寶青 S: 粘板岩 Tu: 褐炭岩 Ch: 玉髓 Jal: 磷玉 Ja2: 铁石英 Sa: 地权石 Obs: 黑曜石 And: 安山岩 Da: 石英安山岩 Pum: 硅石 Tu-Sa: 褐炭質砂岩 Sh-Sh: 粘板質砂岩 Sa-Sh: 玉髓質砂岩 Su-Tu: 硅質褐炭岩 Su-Sa: 玉髓質褐炭岩 Da-Tu: 石英安山岩質褐炭岩

# 図 版



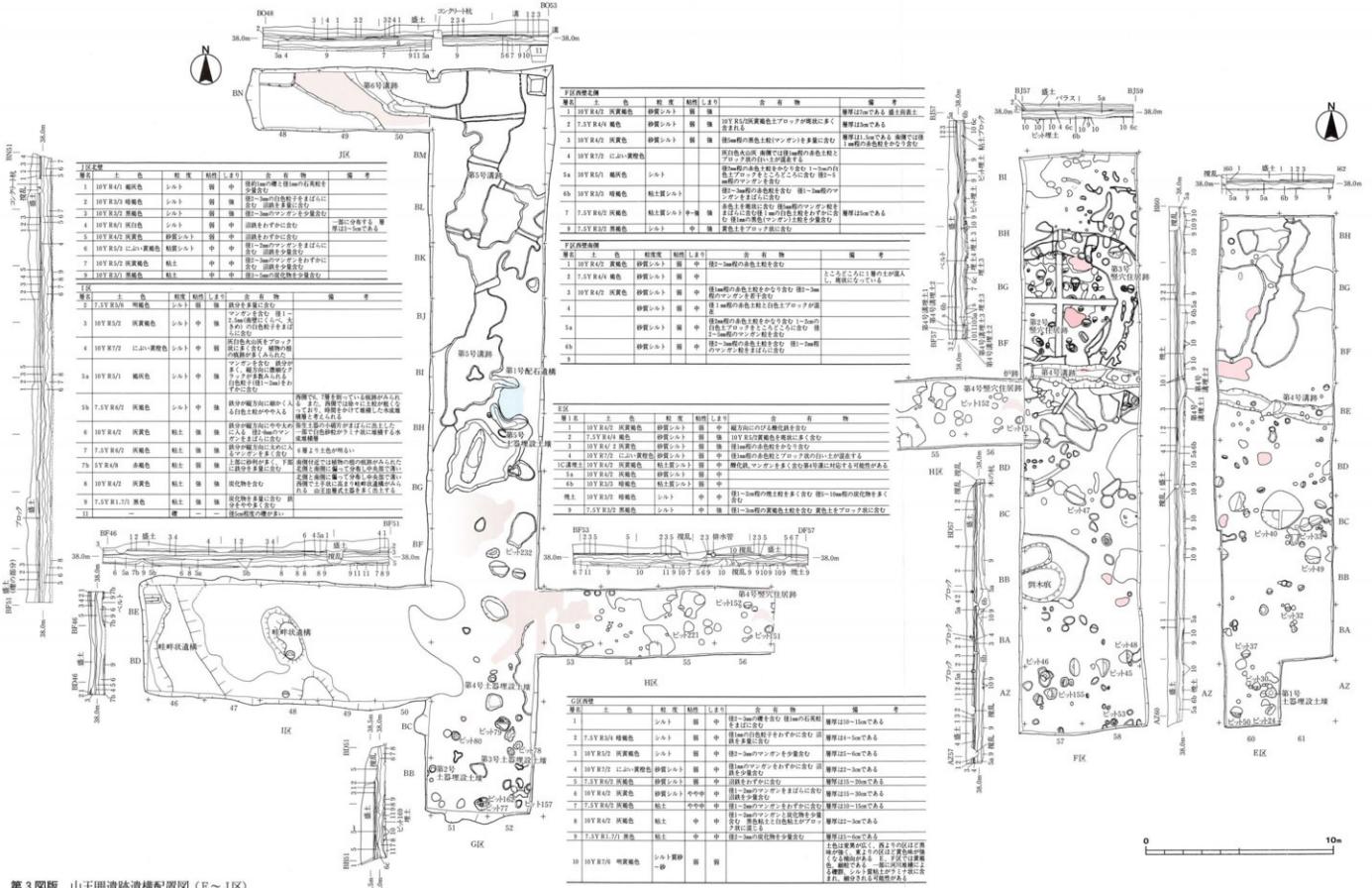
第1図版 山王開道跡発掘区配置図  
Excavated trench in the Sanno-gakoi site

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による



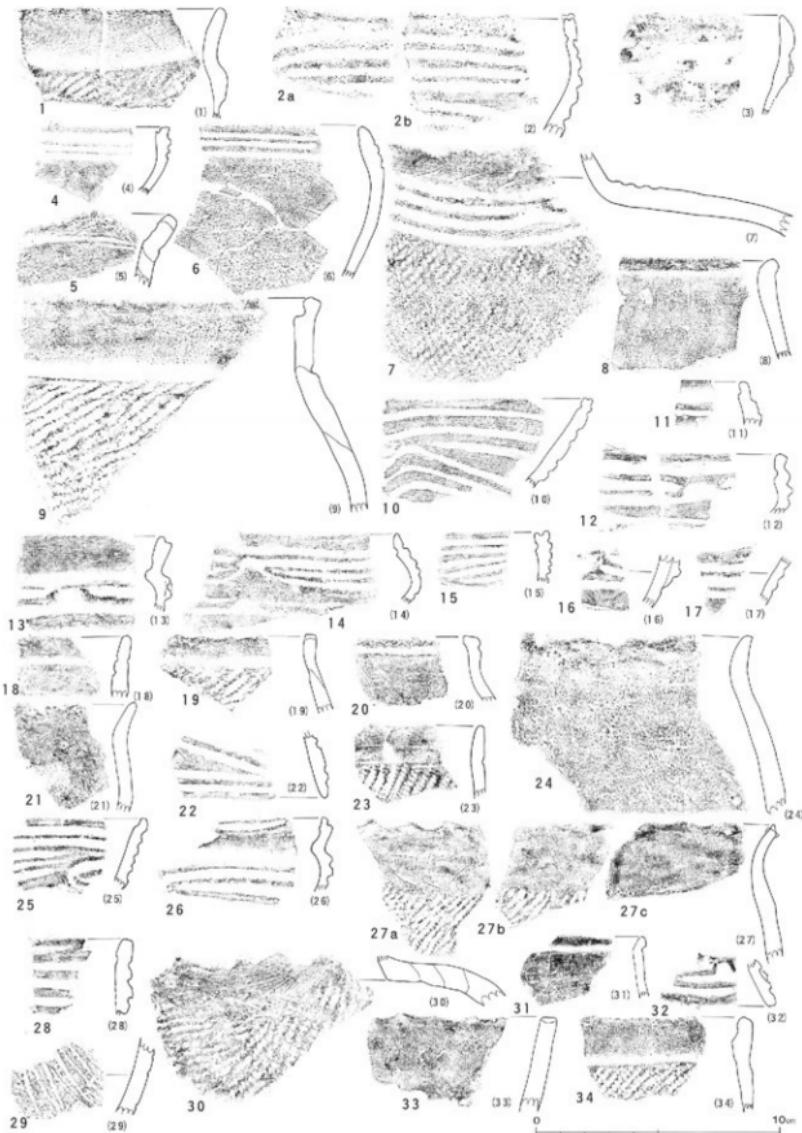
第2図版 山王廻遺跡遺構配置図（A～D、K区）

## Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



第3図版 山王町遺跡遺構配置図（E～J区）

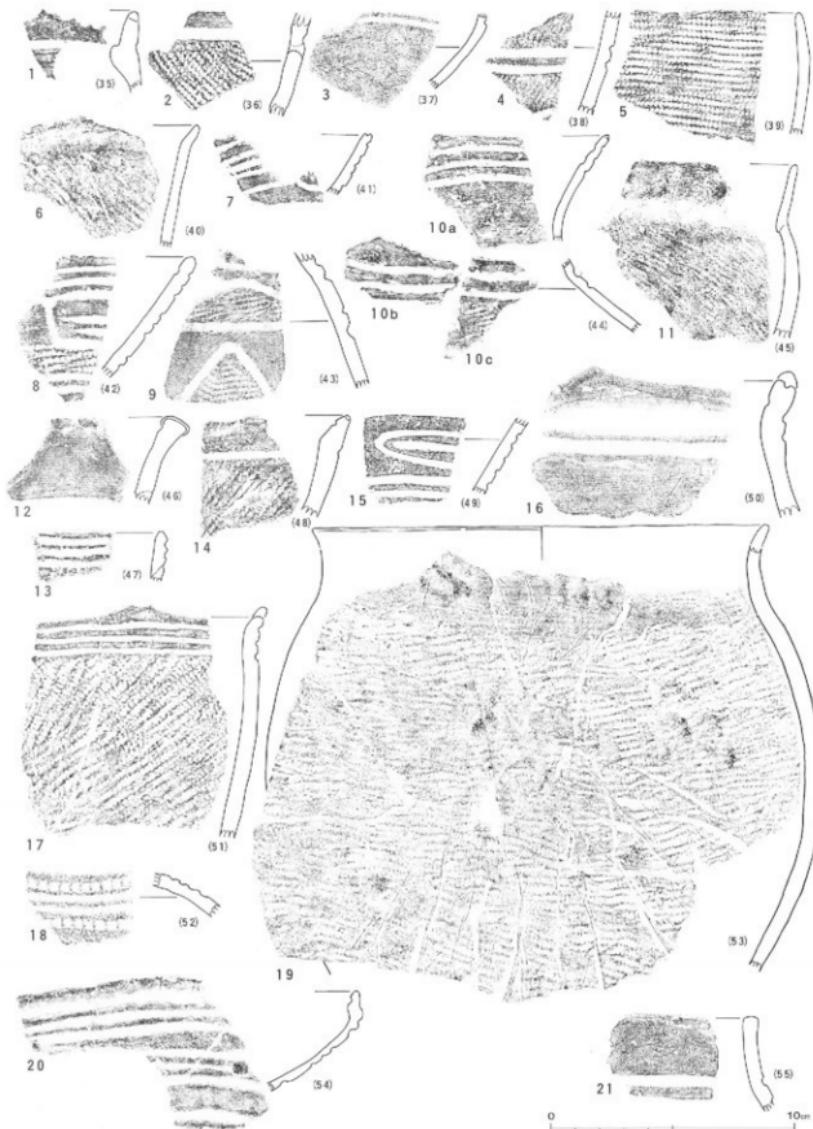
## Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



第4図版 山王四遺跡出土土器拓影 (C区、D区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

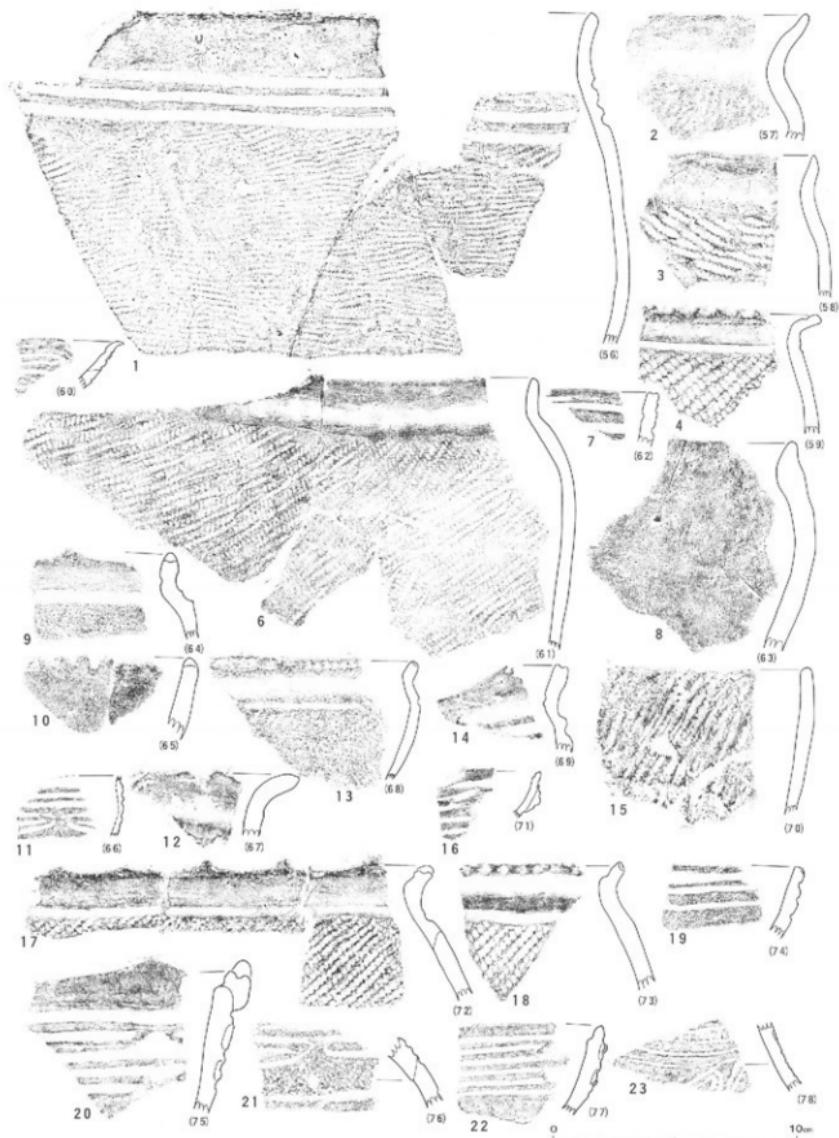
1~4 C区ピット3 5~7 ピット8 8・9 ピット9  
10 ピット12 11 C区第4号窓跡 12~21 D区ピット9  
22~27 ピット42 28~34 D区第4号窓跡  
10cm



第5図版 山王岡遺跡出土土器拓影(D~G区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

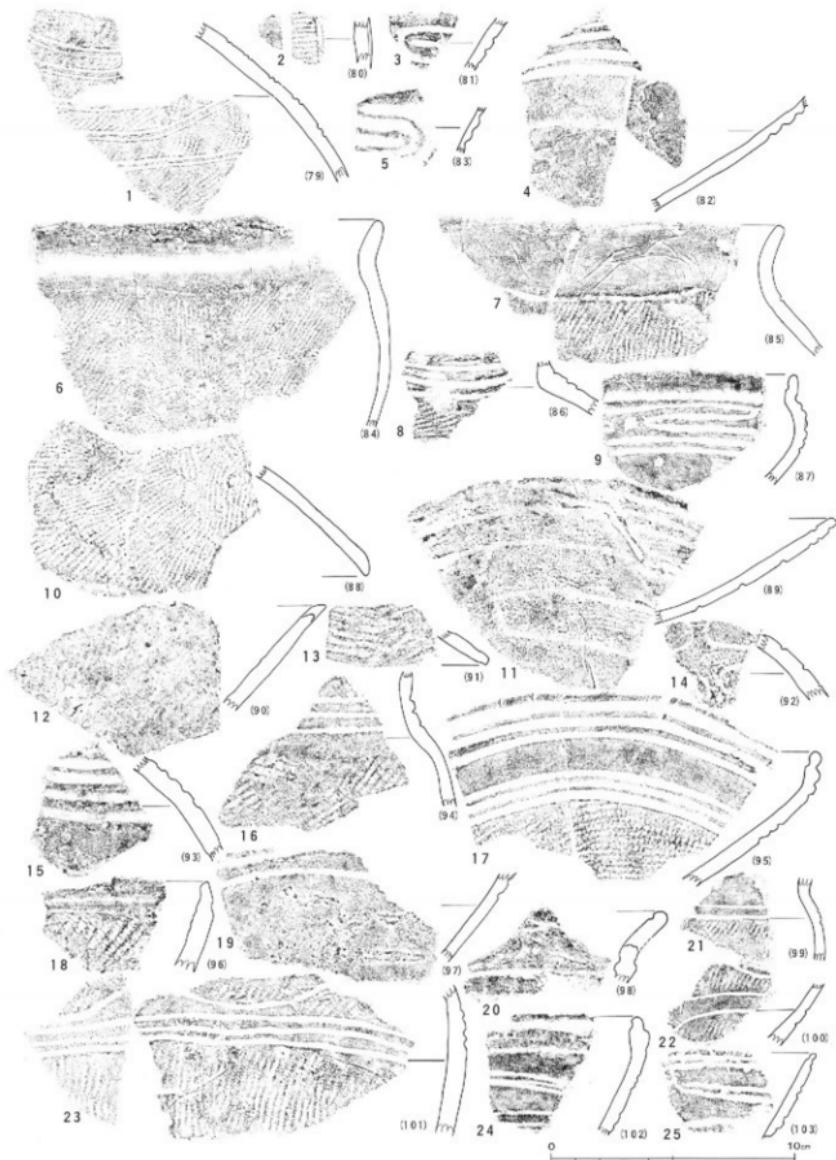
1・2 D区第4号窯跡 3 三区ピット窓 4~17 D区第1号窯穴式窯跡  
18 ピット窓 19 ピット窓 20 ピット窓 21 1号ピット窓  
19 G区第4号土器焼成土層 20 ピット窓 21 1号ピット窓



第6図版 山王岡遺跡出土土器拓影 (C、E～G区、K区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 C区第1号石窯場 2 第1号窯 3・4 E区・BE 5～7 E区・BE 8 E区  
9 E区・BE 10 E区・BE 11 E区・BE 12 E区・BE 13 E区・BE 14 E区・BE  
15 E区・BE 16 E区・BE 17 E区・BE 18 E区・BE 19 E区・BE 20 E区・BE



第7図版 山王四遺跡出土土器拓影 (E~K区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

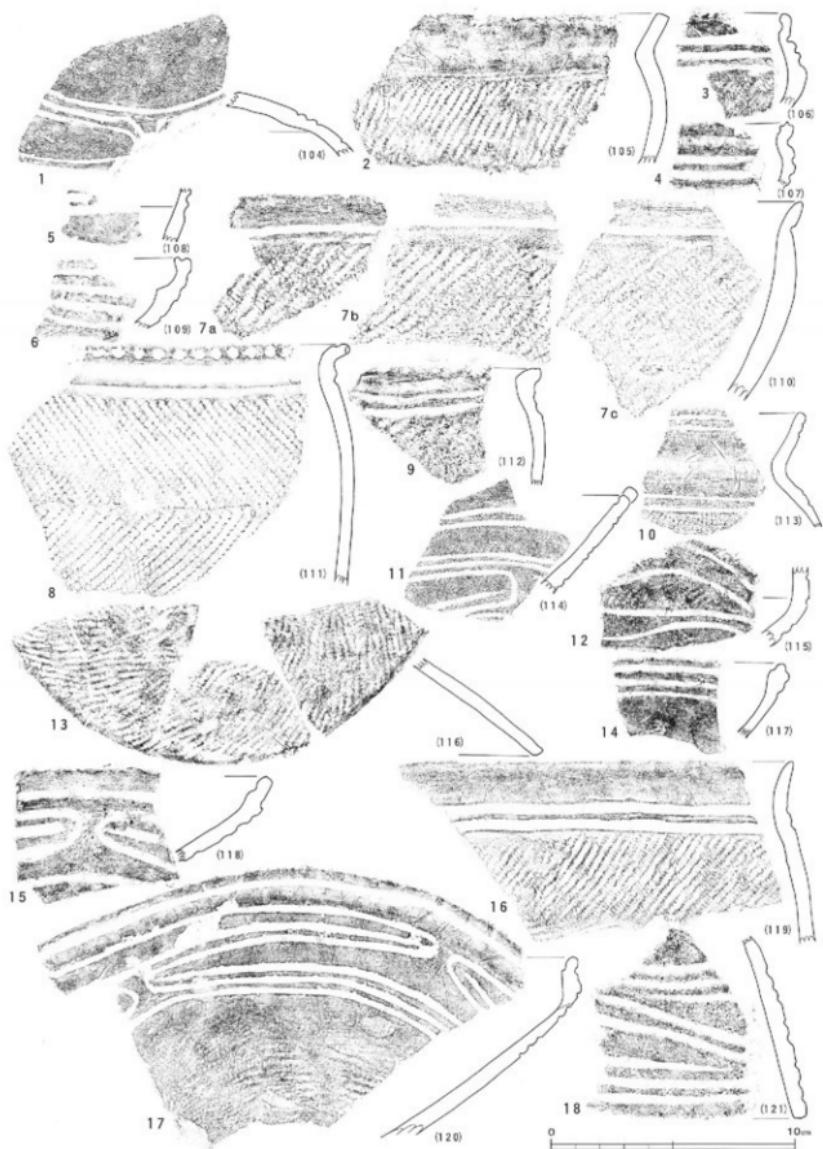
1~3 F区包含層 6~7 H区包含層 8~9 G区包含層

10~17 I区包含層 18~20 J区包含層

21~25 K区包含層標面 (7、8基の上部)

0

10cm



第8図版 山王遺跡出土土器拓影 (K区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~9 K区包食器縦断面 (7、8系の上部)

10~18

K区包合器 (7、8系)

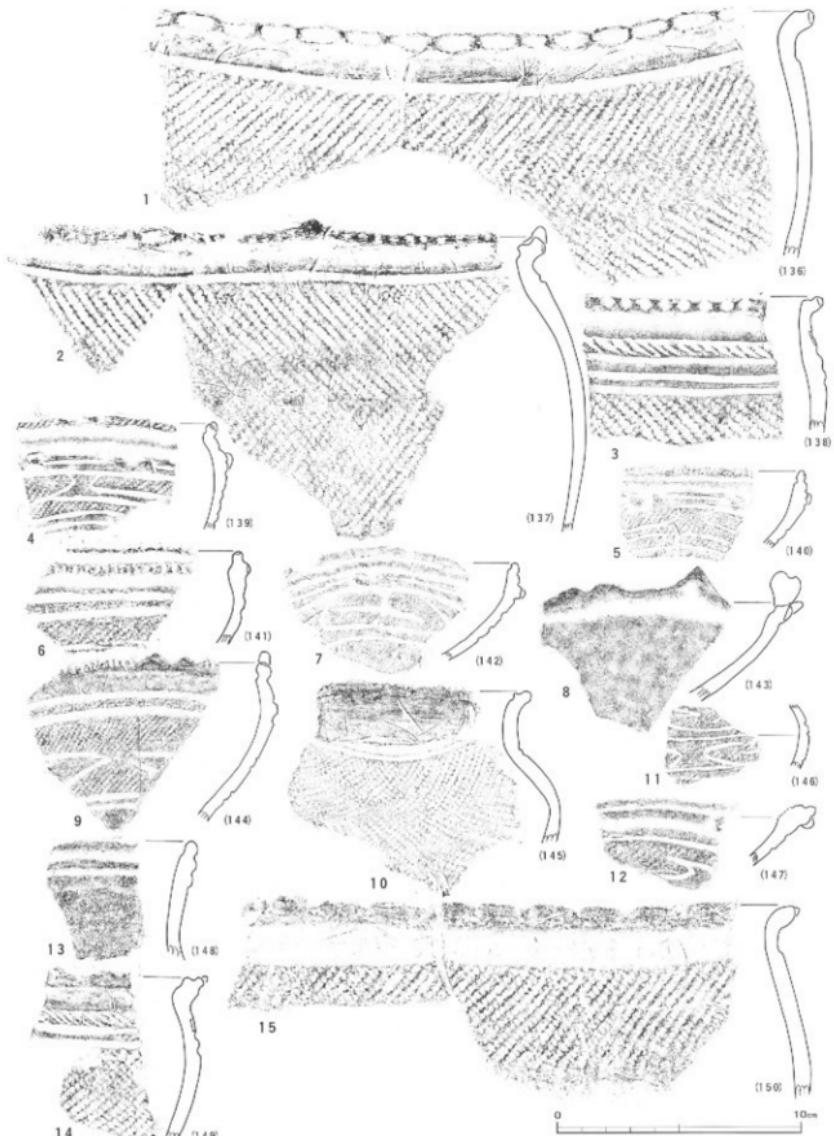
10cm



第9図版 山王廻遺跡出土土器拓影 (K区)

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~14 K区包含物 (7、8層)

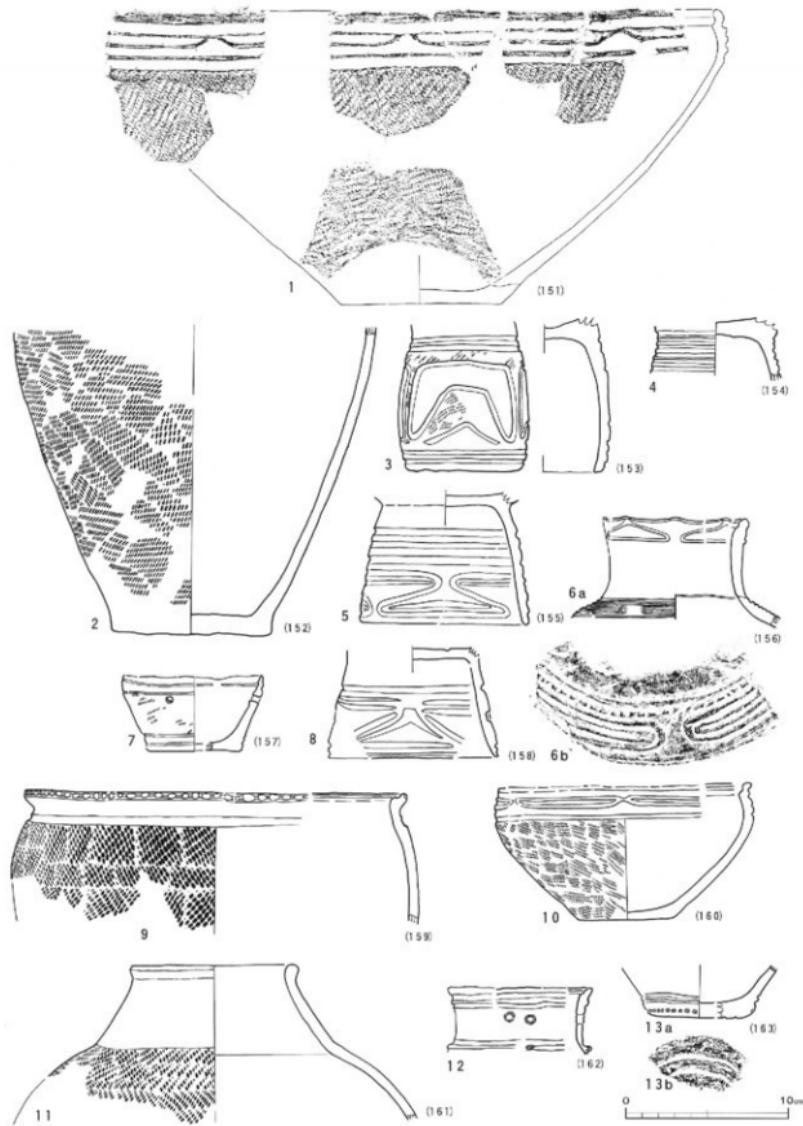


第10図版 山王圓遺跡出土土器拓影（K区）

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

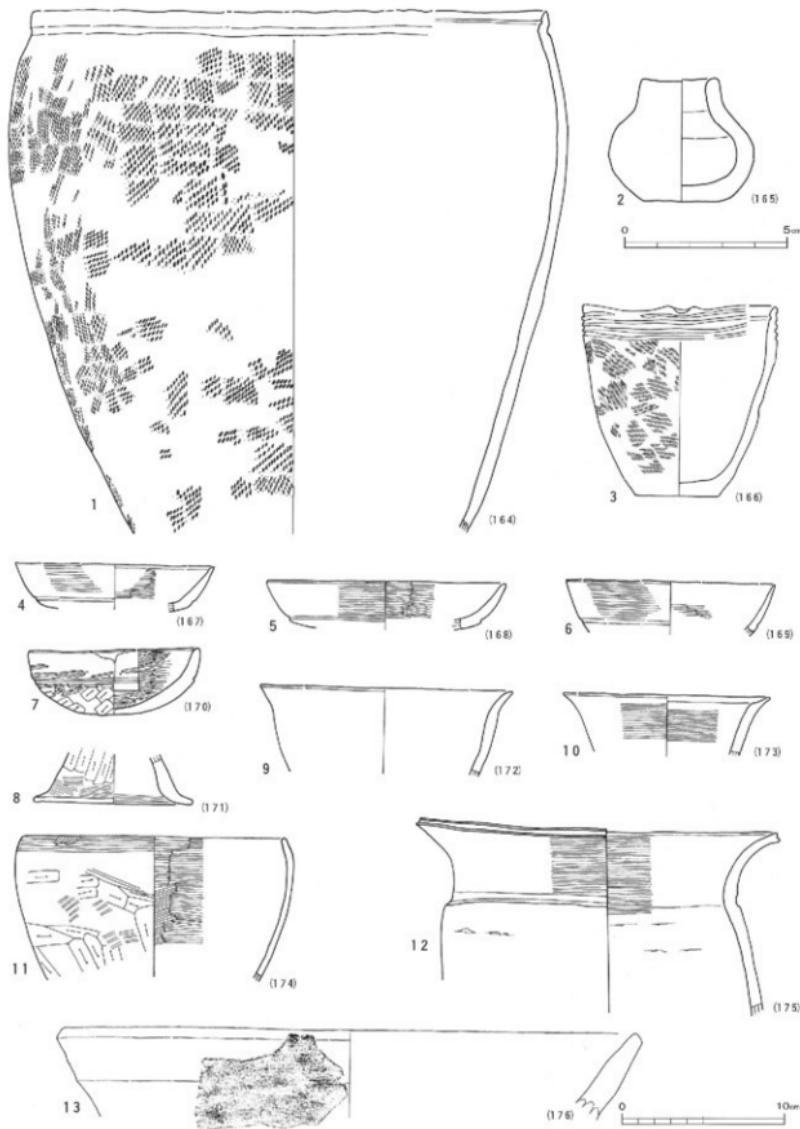
1~12 K区包含測（7、8層）

13~15 K区遺構横出圖（8層下部から9層）



第11図版 山王圓遺跡出土土器実測図 (D、E、G、K区)  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

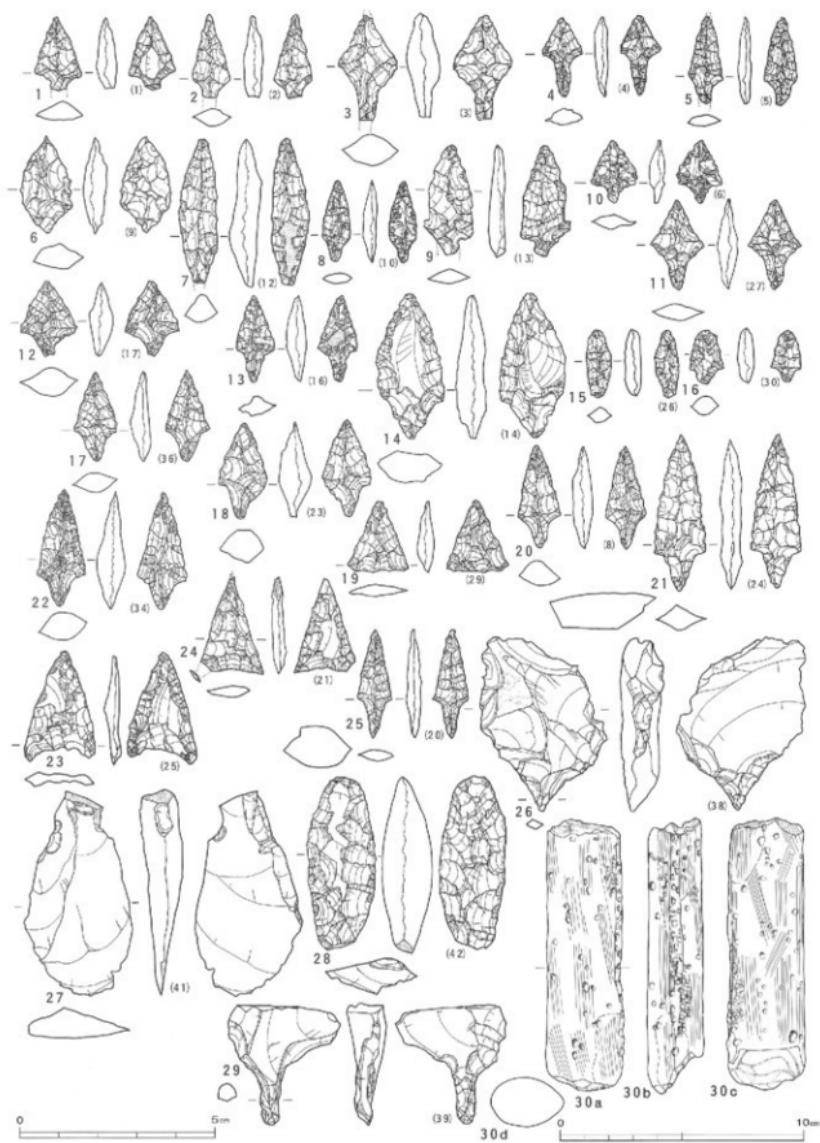
1 E区第1号土器埋設土器  
2 G区第2号土器埋設土器  
3 第3号土器底及上部  
4 K区5-2-1009  
5 E-2-1006  
6 D区2層  
7 G区第2号土器  
8 G区3号土器  
9~13 K区底含層(7、8层)



第12図版 山王跡出土土器実測図（A、C、G、K区）

Jomon and Yayoi pottery, Haji and ceramic ware from the Sanno-gakoi site

1 K区第6号穿穴付瓦器 2 K区组合器(1, 4号)  
3 G区第3号上部組合上縁 4~6 A区第1号穿穴付瓦器  
7~11 C区C, 7~9 D区第1号器



第13図版 山王塚遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

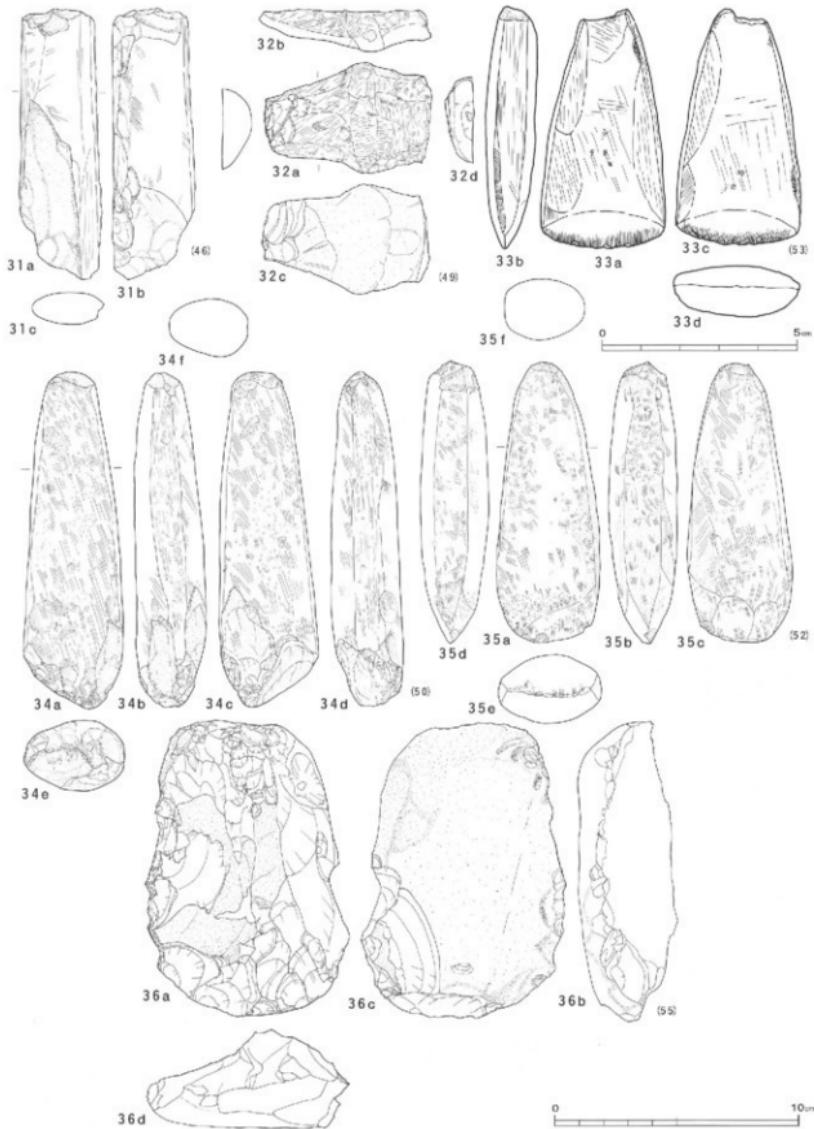
1~25 石鏃 arrowhead

26~29 石鋸 古刃

27 玉毛 tanged stone scraper

28 横円形片面加工石器 oval biface

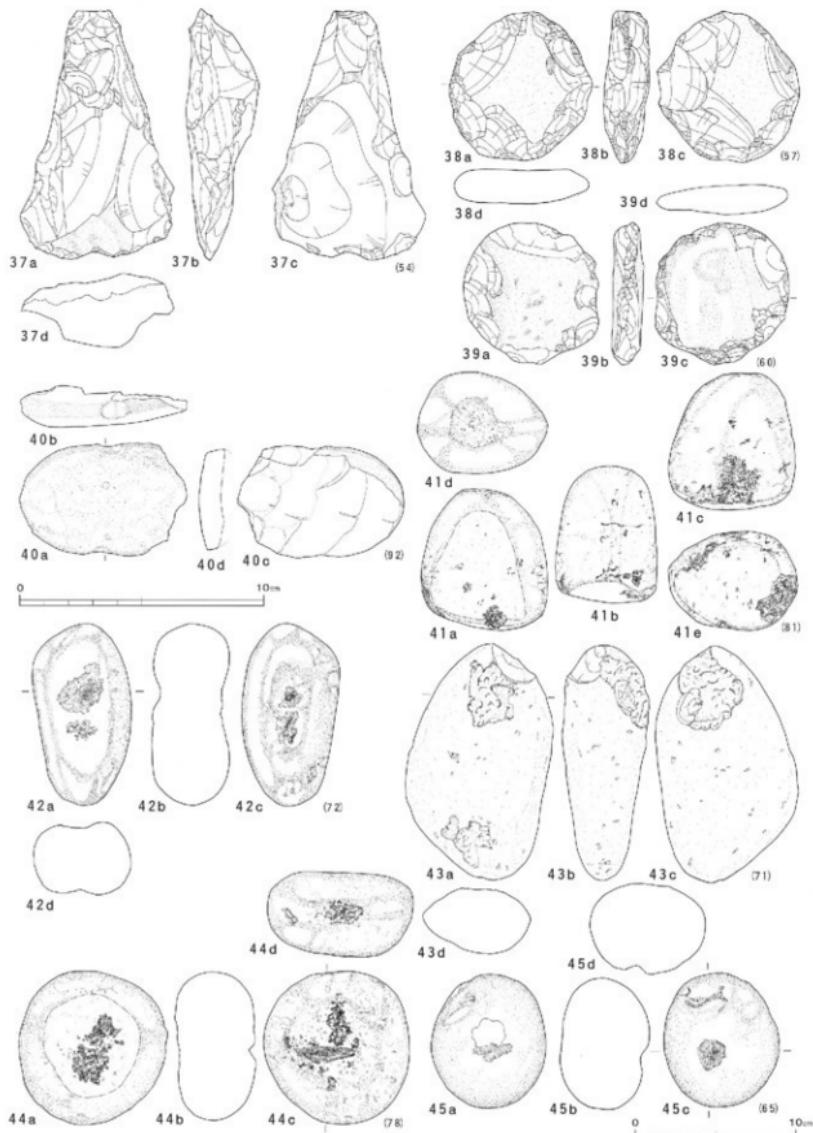
30 石刀 sword-shaped stone implement



第14圖版 山王廻遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

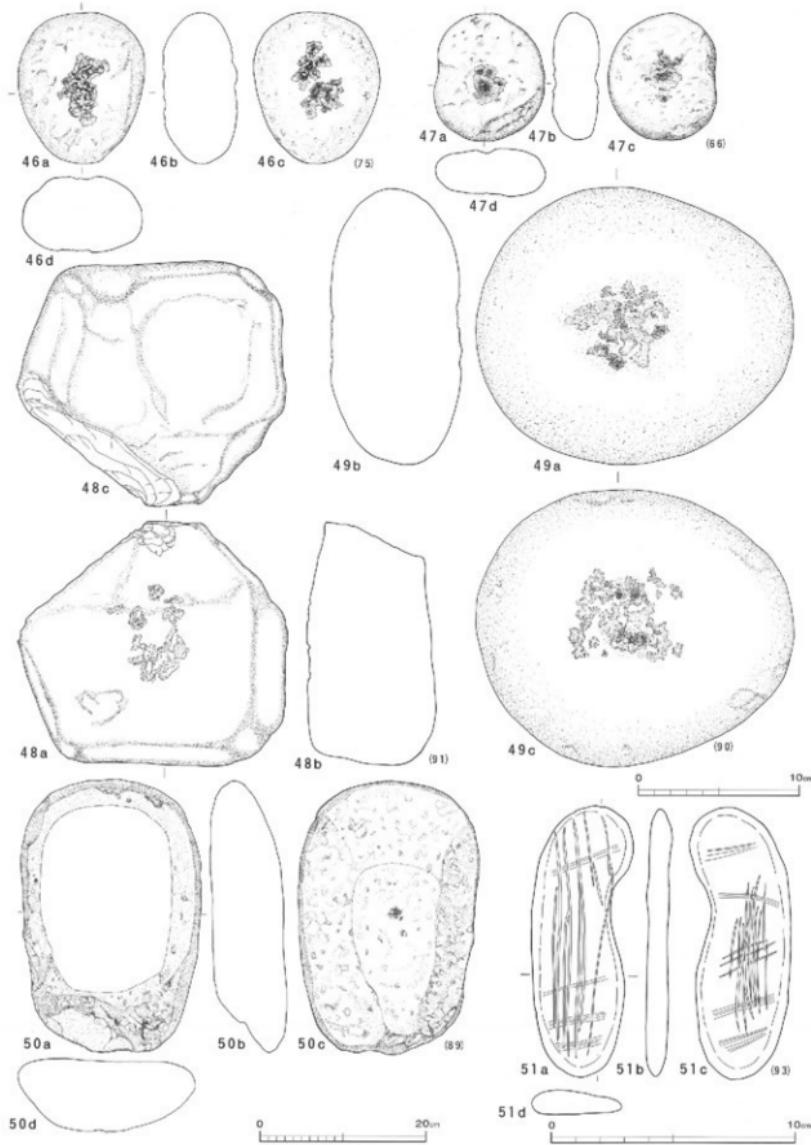
31 石刀 curved-shaped stone artifact 32 雙刃石 double-edged stone axe  
33~36 磨盤石 grinding stone axe 36 打擊石 chipped stone axe

0 10cm



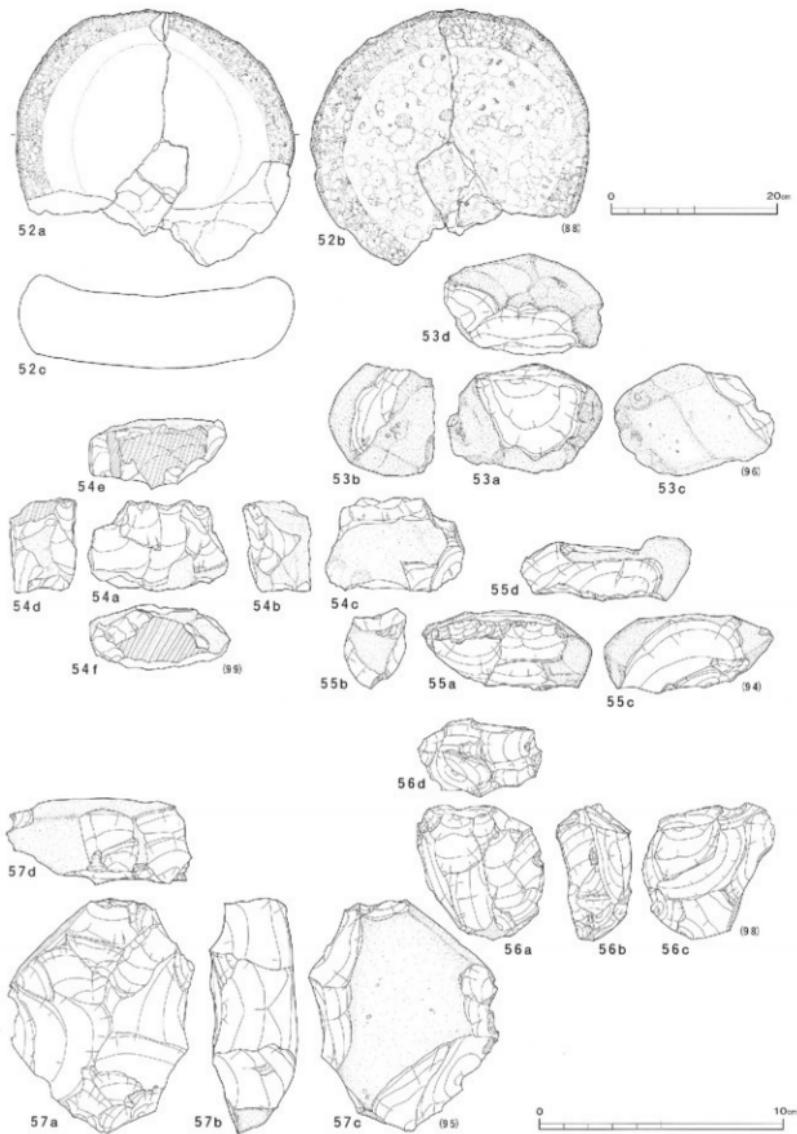
第15図版 山王廻遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

37 打磨石片 chipped stone一片 38-39 内凹状石器 concave-shaped stone artifact  
40 石器石片 weight 41 磨石 grinding stone  
42-44-45 凹凸石核 with reduction 43 磨石 hammerstone



第16図版 山王閣遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

46~49 四石 cobble with indentation  
50 石皿 grinding slab 51 繩刻繩 engraved pebble



第17版 山王隈遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

52 石皿 grinding slab 53~57 石核 core

# 写 真 図 版

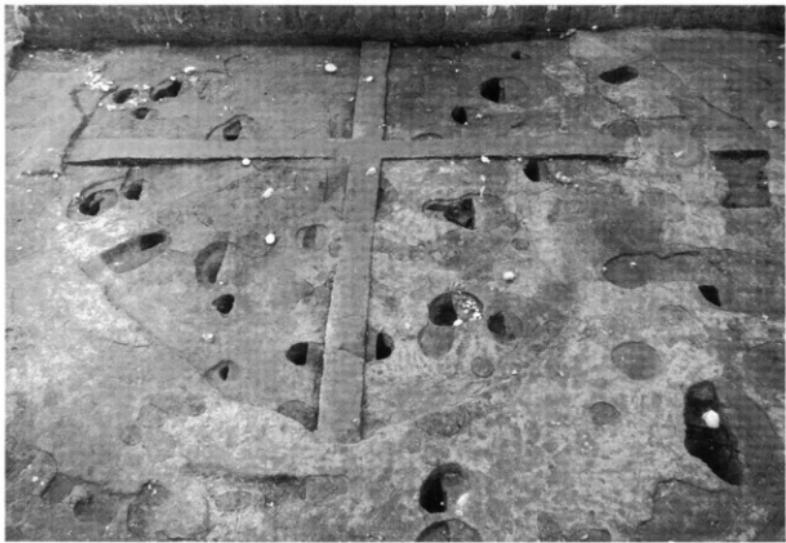
写真図版縮尺

- PL. 5 山王園遺跡出土土器  
1・2 2/3 5 1/3 4~7 3/4 8 4/5
- PL. 6 山王園遺跡出土土器  
1 3/4 2~6 1/2
- PL. 7 山王園遺跡出土土器  
1 1/2 2~6 1/2
- PL. 8 山王園遺跡出土土器、土製品  
1 3/4 2 1/2 3~4 3/4 5 1/2  
6~12 1/4

- PL. 9~17 山王園遺跡出土土器  
1~2 3/4
- PL. 18 山王園遺跡出土石器  
1~25 1/4 26~30 1/2 31~37 1/4
- PL. 19 山王園遺跡出土石器  
1~4 3/4 5~9 1/4 10~18 1/2  
19~20 1/4



1 山王園遺跡航空写真（南から）



2 F区第2、3号竪穴住居跡（東から）

PL. 1 山王園遺跡航空写真及び第2、3号竪穴住居跡

Aerial photograph of the Sanno-gakoi site and pit dwelling 2 and 3

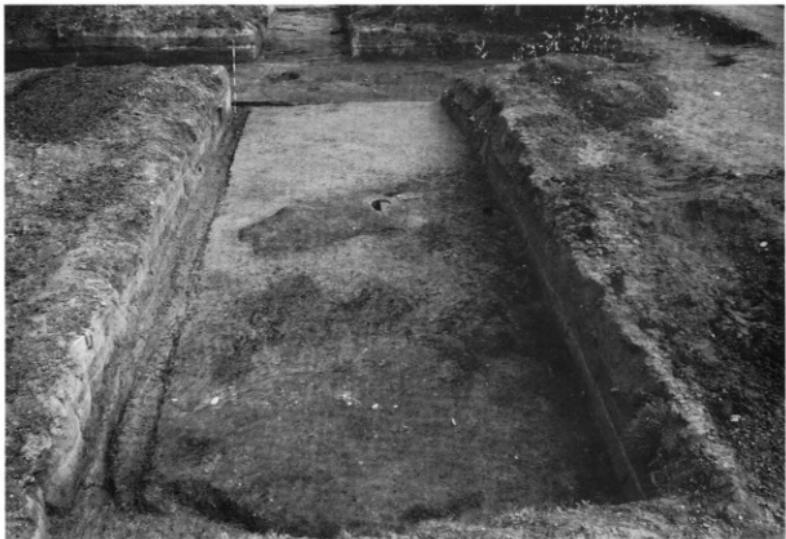


1 G区全景（南から）

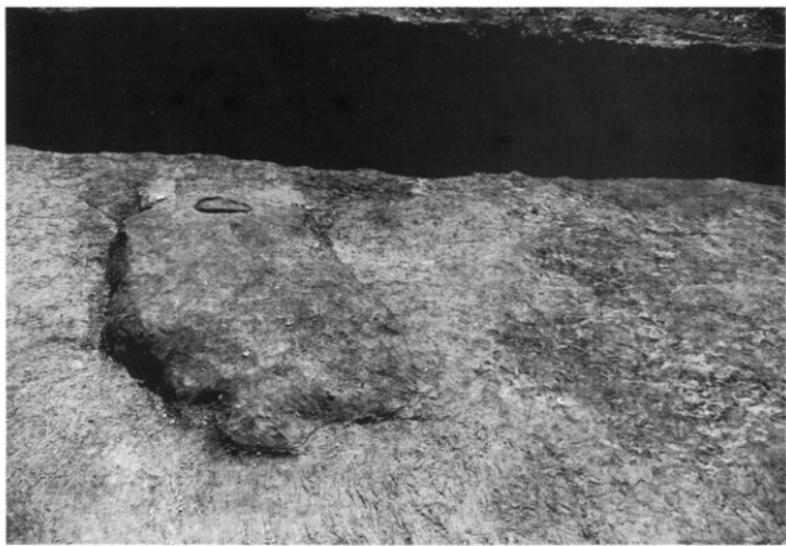


2 G区第1号配石遺構（西から）

PL. 2 G区全景及び第1号配石遺構  
View of excavated trench and stony feature 1



1 I 区全景（西から）



2 鞍状遺構（北から）

PL. 3 I 区全景及び鞍状遺構  
View of excavated trench and the levee-like feature



1 K区全景（西から）



2 第5号堅穴住居跡（南から）

PL. 4 K区全景及び第5号堅穴住居跡  
View of excavated trench and pit dwelling 5



PL. 5 山王圓遺跡出土土器  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2・4～6・8 K区包含層 3 D区包含層  
7 G区包含層



1

(151)



2

(152)



4

(153)



3

(156)



5

(155)



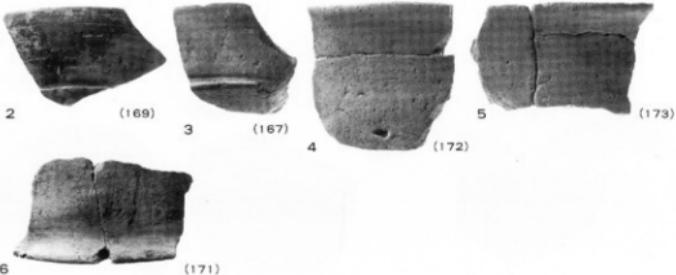
6

(157)

PL. 6 山王岡遺跡出土土器

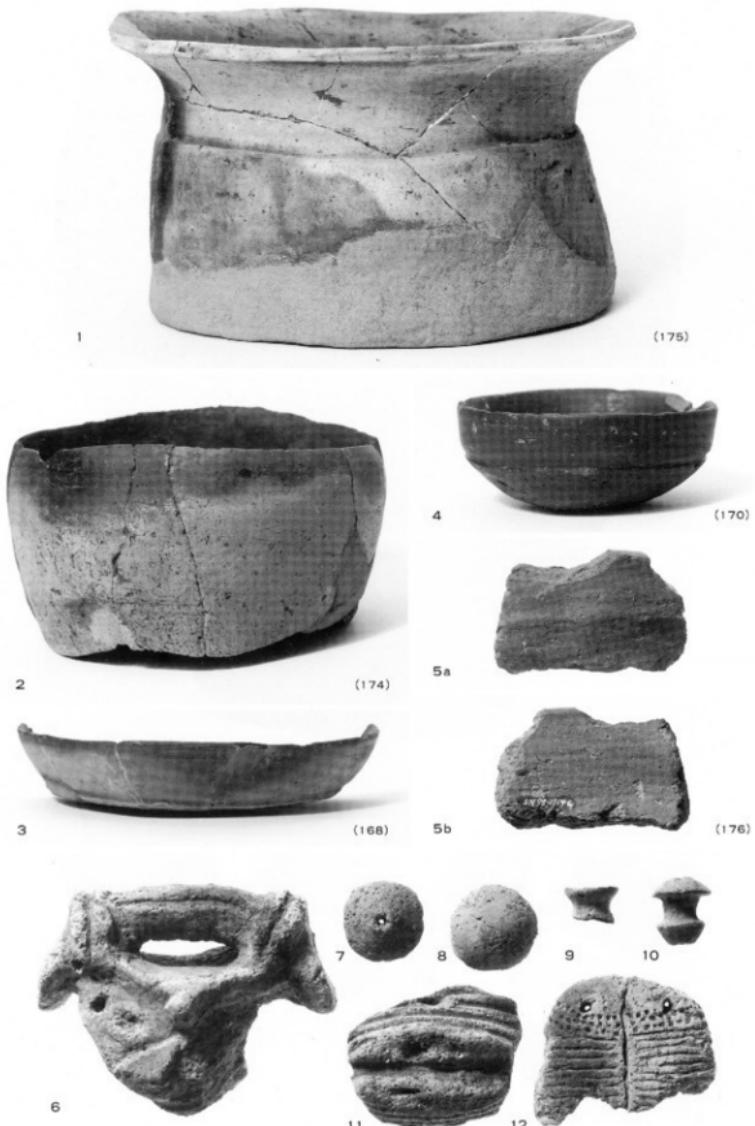
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 E区第1号土器埋設土壤  
2 G区第2号土器埋設土壤  
3 第3号土器埋設土壤  
4 第5号土器埋設土壤  
5 K区ピット156  
6 G区第2号拂跡



PL. 7 山王圓遺跡出土土器  
Jomon pottery and Haji ware from the Sanno-gakoi site

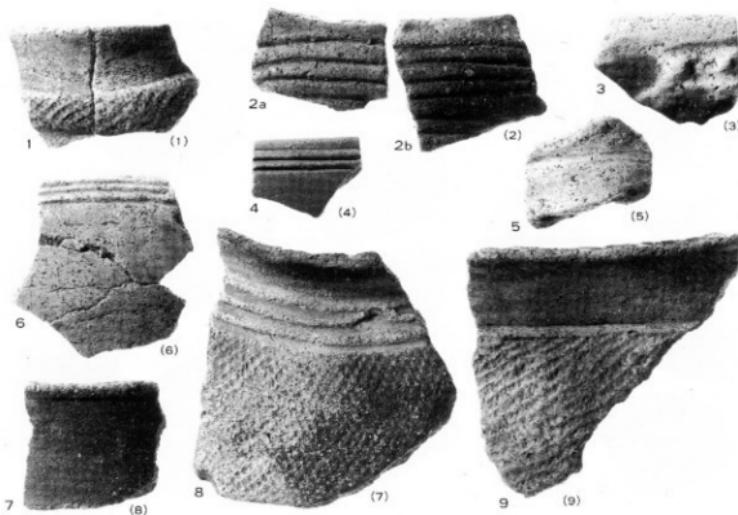
1 K区第6号堅穴住居跡 2・3 A区第1号堅穴住居跡  
4～6 C区ピット9



PL. 8 山王廻遺跡出土土器、土製品

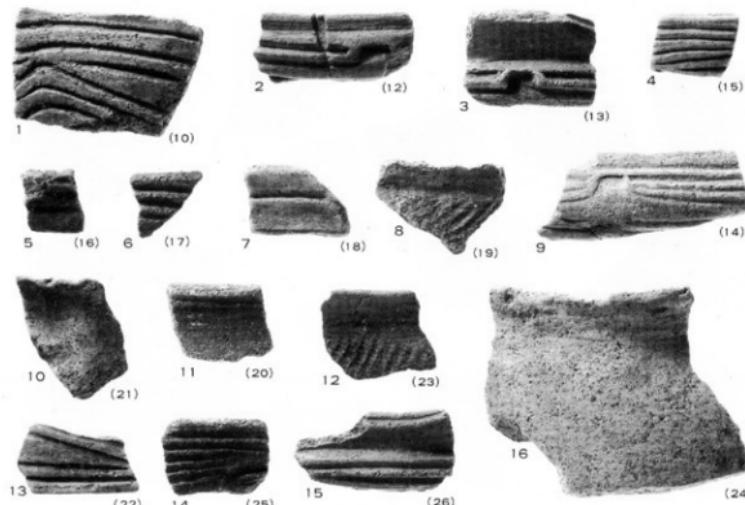
Haji ware, ceramic ware and Clay object from the Sanno-gakoi site

1・2・4 C区ピット9 3 A区第1号堅穴住居跡  
 5 C区第2号溝跡 6・7・9・10 K区包含層  
 8 K区ピット191 11 C区ピット3 12 K区撫拭坑



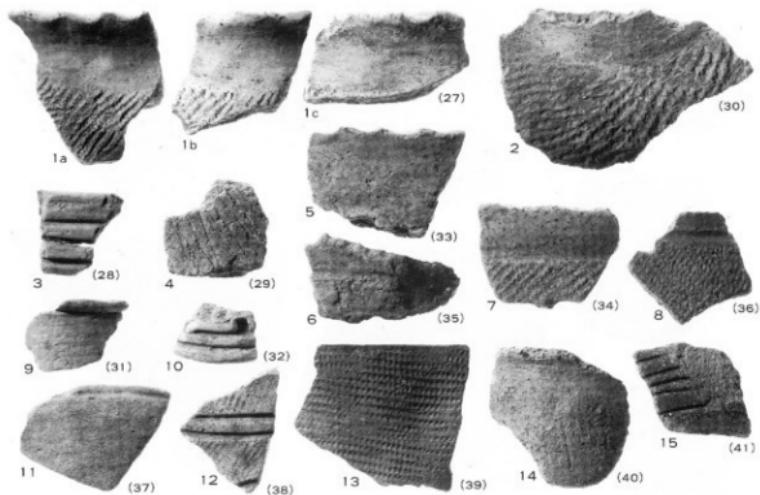
1 C、D区出土土器

1~4 ピット3 5~6・8 ピット8 7~9 ピット9



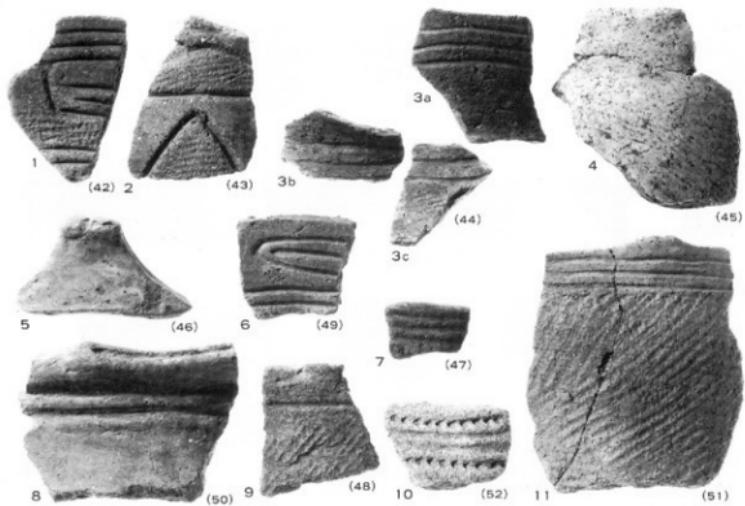
2 C、D区出土土器

1 ピット12 2~11 ピット14 12~16 ピット42



1 D~F区出土土器

1 ピット42 2~10 第4号溝跡 11 ピット37 12~15 第2号窓穴住跡

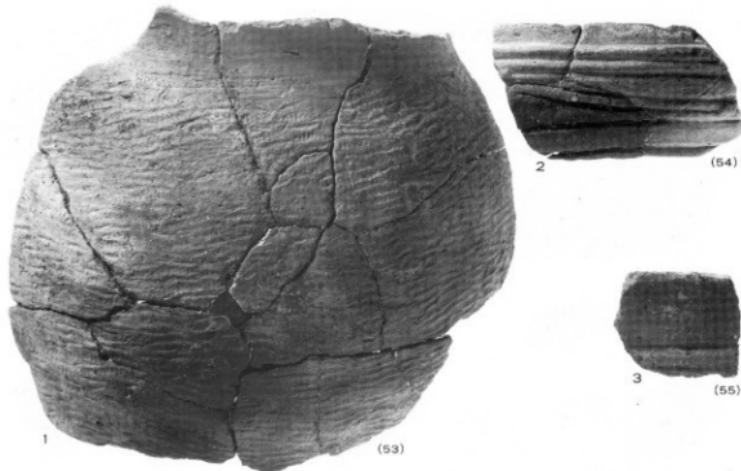


2 F、H区出土土器

1~4 第2号窓穴住跡 5 ピット46 6~8 第4号溝跡  
7 ピット47 9 ピット155 10・11 ピット152

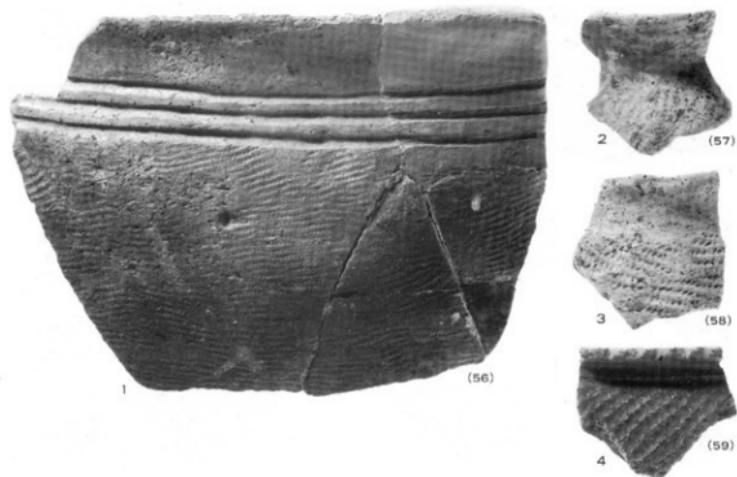
PL. 10 山王閣遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 G区出土土器

1 第4号上器縦溝土壙 2 ピット162 3 第1号配石遺構

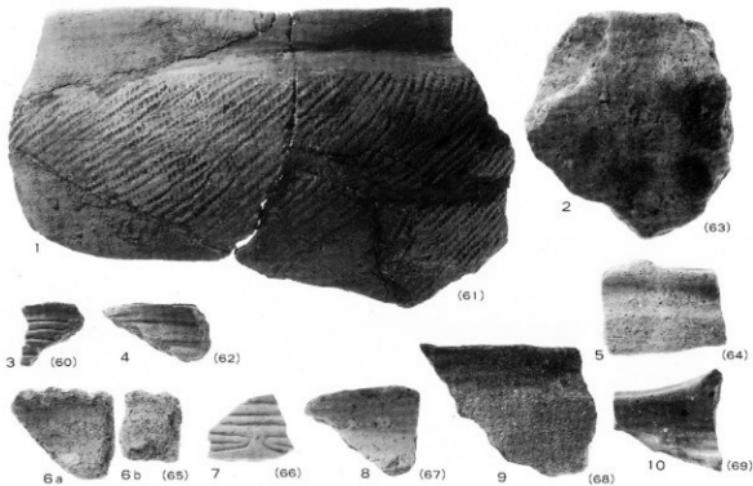


2 G区出土土器

1 第1号配石遺構 2 第2号溝跡 3・4 ピット156

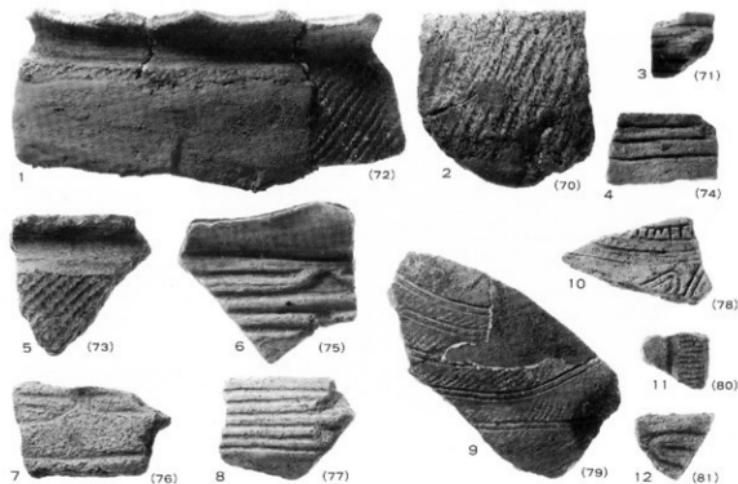
PL. 11 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 K区出土土器

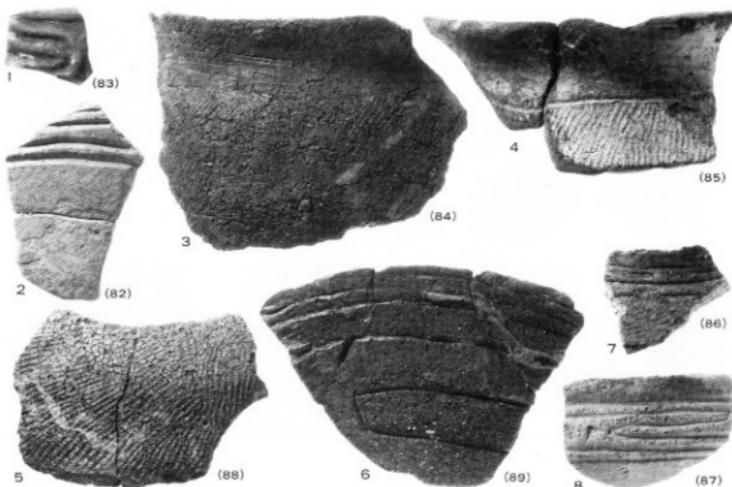
1・3・4 ピット187 2 ピット189 5 ピット190 6 ピット192  
7 ピット196 8 ピット198 9 ピット200 10 ピット202



2 C、E、F、K区出土土器

1 ピット206 2 ピット204 3 ピット205 4 ピット216 5 ピット214  
6 C区包含層 7・8 E区包含層 9 F・I区包含層 10～12 F区包含層

PL. 12 山王閣遺跡出土土器  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

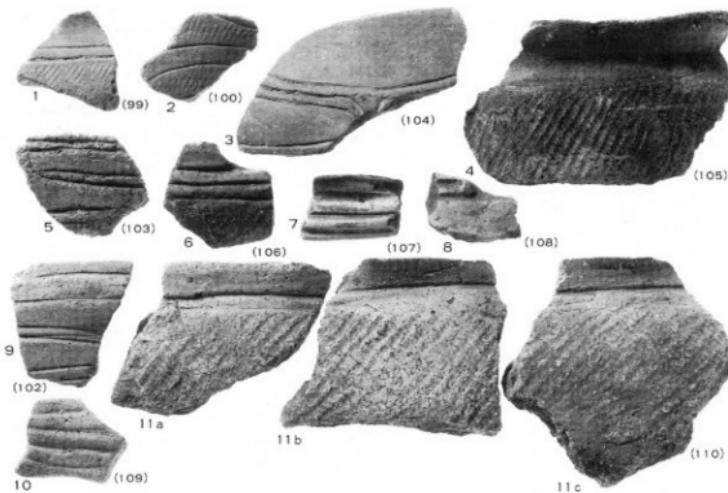


1 F、G、H、I区出土土器

1・2 F区包含層 3・4 H区包含層 5・6 I区包含層 7・8 G区包含層

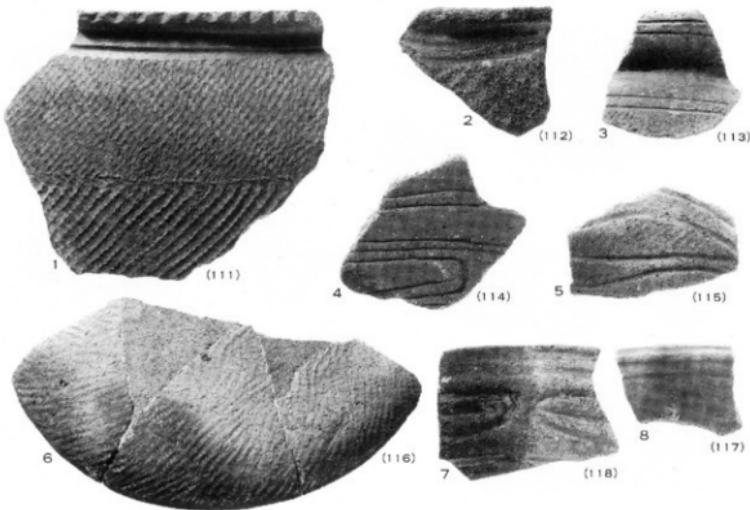
2 I、J、K区出土土器

1～6 I区包含層 7～9 J区包含層 10 K区包含層認面(7、8層の上部)



1 K区出土土器

1～11 K区包含層種認面 (7、8層の上部)

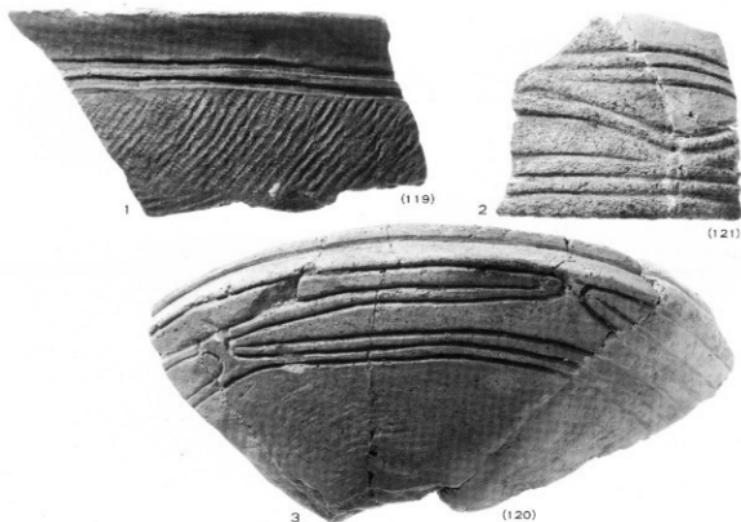


2 K区出土土器

1・2 K区包含層種認面 (7、8層の上部) 3～8 K区包含層 (7、8層)

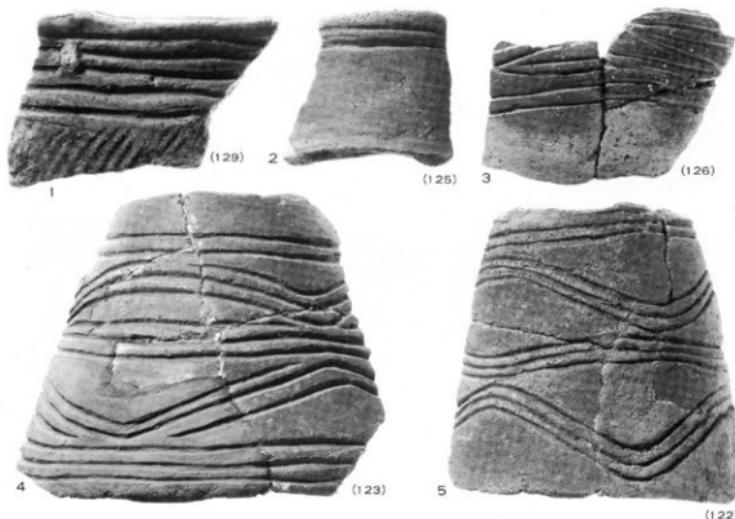
PL. 14 山王遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



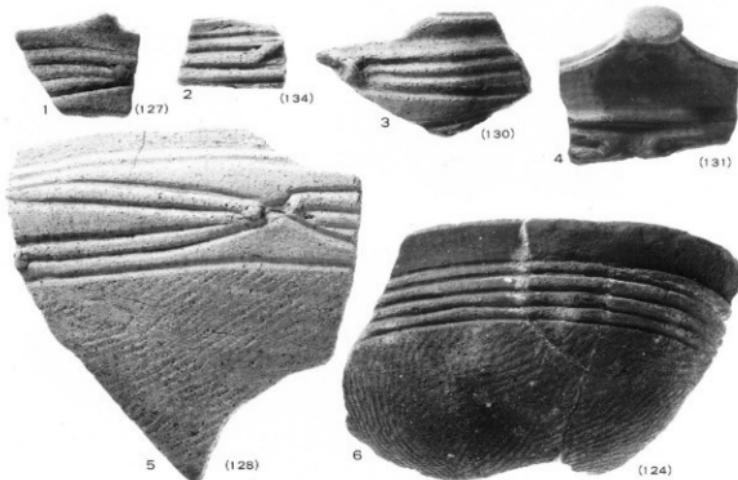
1 K区出土土器

1~3 K区包含層(7、8層)



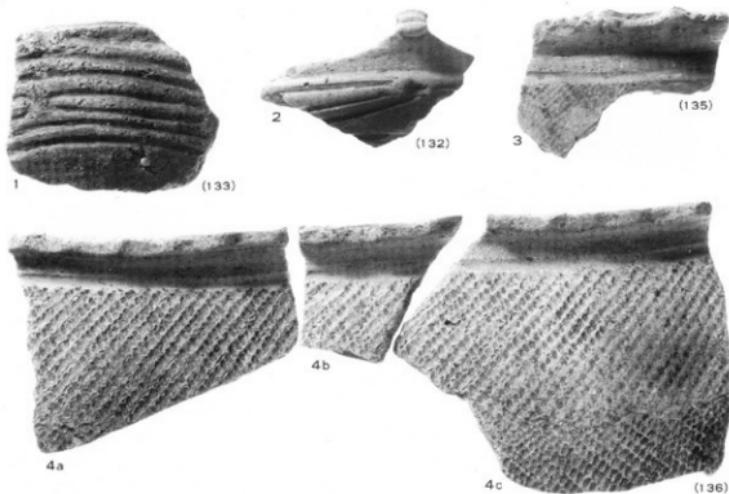
2 K区出土土器

1~5 K区包含層(7、8層)



1 K区出土土器

1~6 K区包含層(7、8層)

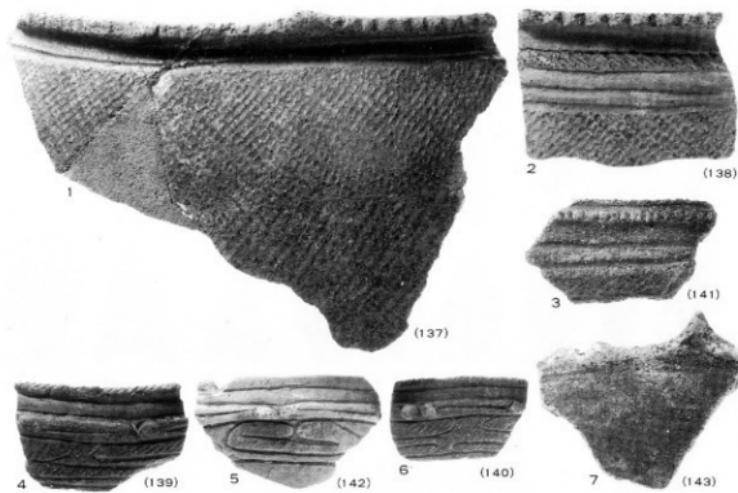


2 K区出土土器

1~4 K区包含層(7、8層)

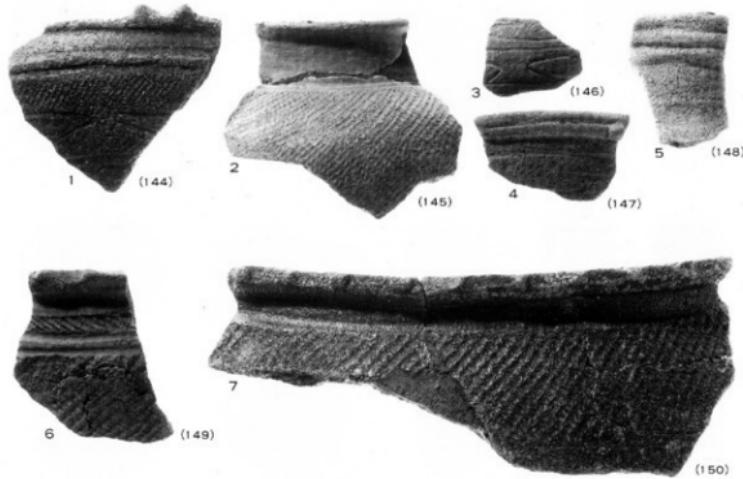
PL. 16 山王門遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



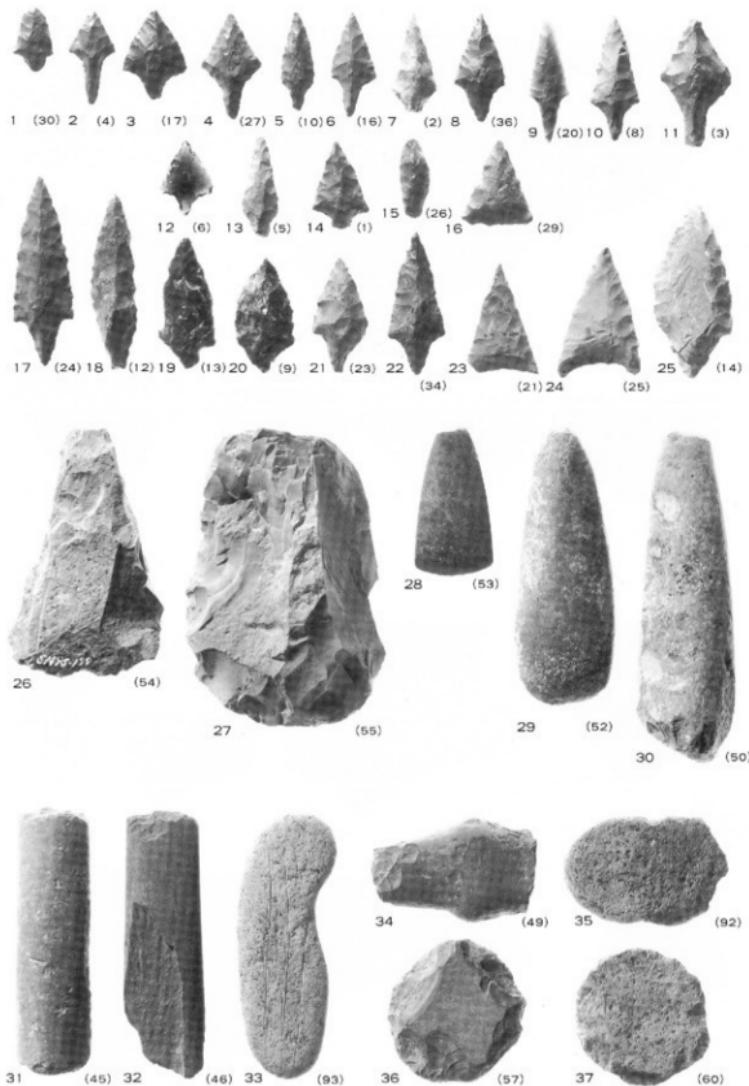
1 K区出土土器

1~7 K区包含層 (7、8層)



2 K区出土土器

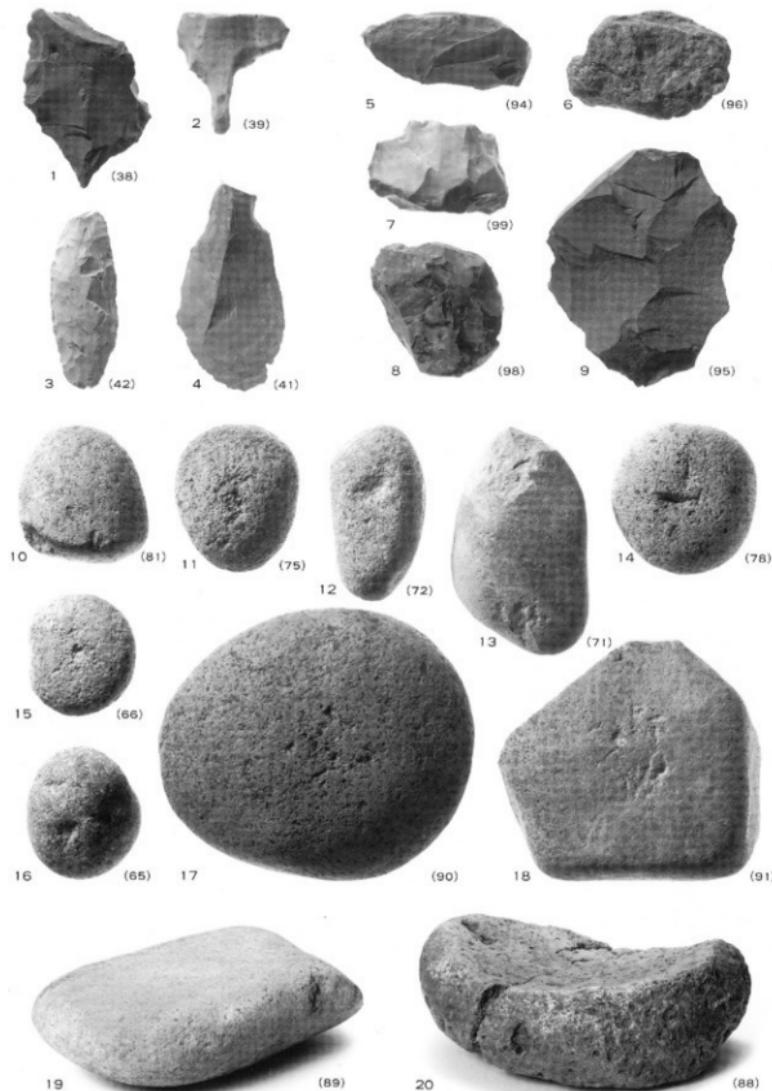
1~4 K区包含層 (7、8層) 5~7 K区遺構後出面 (8層下部から9層)



PL. 18 山王閣遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

1~25 石鏃 arrowhead 26~27 打製石斧 chipped stone axe  
 28~30 磨製石斧 grinding stone axe 31~32 石刀 sword shaped stone  
 33 紋刻bble engraved pebble 34 独狀石 artifact double-edged stone axe  
 35 石錘 stone weight 36~37 円盤状石製品 disc-shaped stone implement



PL. 19 山王圓遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1・2 石鑽 drill 3 條圓形兩面加工石器 oval biface  
4 石刮 tanged stone scraper 5～9 石核 core  
10 磨石 grinding stone 11・12・14～18 凹石 cobbles with indentation  
13 磚石 hammerstone 19・20 石盤 grinding slab

---

---

## 国史跡 山王廻遺跡

### 発掘調査報告書 I

平成8年3月25日 印刷  
平成8年3月31日 発行

発行 宮城県一迫町教育委員会  
栗原郡一迫町真坂字清水川河前5番地  
TEL 0228-52-2111

印刷 南部屋印刷株式会社  
栗原郡篠館町高田一丁目7-36  
TEL 0228 22-2131

---

